

国立大学法人一橋大学における
社会から見た大学教育に関する
自己点検・評価報告書

一橋大学評価委員会

2013年 3月

目次

序 エグゼクティブサマリー

1	報告書作成の趣旨	1
2	大学全体についての評価	1
3	各学部における学部教育に対する評価と課題	
(1)	商学部	2
(2)	経済学部	2
(3)	法学部	2
(4)	社会学部	3
(5)	学部教育に関する企業からの評価	4
4	全学的教育事項に対する評価と課題	
(1)	全学的教育事項に対する卒業生からの評価	4
(2)	全学的教育事項に関する企業からの評価	5

第1部 学部教育に対する評価と課題

1	本学における学部教育概要	6
(1)	学部を超えた教育体制	6
(2)	充実したゼミナール教育	6
(3)	他大学との交流	7
(4)	近年のカリキュラム改革概要	8
①	GPA制度の導入	8
②	英語を使った教育の拡充	8
2	学部教育に対する卒業生からの評価と課題	10
3	各学部における学部教育に対する評価と課題	23
(1)	商学部	
①	学部教育概要	23
②	大学全般に対する総合満足度と他者推奨度	25
③	教育と授業・教育システムに対する満足度	27
④	学習への取組状況	28
⑤	教員に対する評価	29
⑥	授業・教育システムなどに対する評価	30
⑦	大学生活で身についたこと	31
(2)	経済学部	
①	学部教育概要	33
②	大学全般に対する総合満足度と他者推奨度	33
③	教育と授業・教育システムに対する満足度	35
④	学習への取組状況	36
⑤	教員に対する評価	36
⑥	授業・教育システムなどに対する評価	37
⑦	大学生活で身についたこと	38

(3) 法学部	
① 学部教育概要	41
② 大学全般に対する総合満足度と他者推奨度	42
③ 教育と授業・教育システムに対する満足度	43
④ 学習への取組状況	43
⑤ 教員に対する評価	44
⑥ 授業・教育システムなどに対する評価	45
⑦ 大学生活で身についたこと	46
(4) 社会学部	
① 学部教育概要	47
② 大学全般に対する総合満足度と他者推奨度	48
③ 教育と授業・教育システムに対する満足度	49
④ 学習への取組状況	50
⑤ 教員に対する評価	52
⑥ 授業・教育システムなどに対する評価	54
⑦ 大学生活で身についたこと	56

第2部 全学的教育事項に対する評価と課題

1 本学における全学的教育事項概要	
(1) 学生受入状況	60
(2) 施設設備	60
(3) 支援体制	62
2 全学的教育事項に対する卒業生からの評価と課題	66
3 全学的教育事項に対する企業からの評価と課題	80

序 エグゼクティブサマリー

1 報告書作成の趣旨

- 本報告書は、学校教育法(昭和22年法26号)109条及び同法施行規則(昭和22年文部省令11号)166条に基づき、大学の社会的な責務として定められている自己点検・評価活動の一環として作成したものである。
- 項目については、「社会から見た大学教育」として、一橋大学の卒業生や就職先等の関係者からのアンケートを踏まえた学習成果等について分析を行った。
- これは、学校教育法第109条第2項及び学校教育法施行令第40条に基づく国・公・私立大学(短期大学を含む。)及び高等専門学校が7年以内ごとに、文部科学大臣が認証する評価機関(認証評価機関)の実施する評価を受けることが義務付けられている認証評価を受けるにあたり、認証評価機関である大学評価・学位授与機構が定めている「大学評価基準」の評価項目にもなっているものである。
- 本報告書の作成に際しては、上記法令や認証評価の趣旨等に鑑み、学習成果等を明らかにすることで、今後の大学運営や業務改善、教育研究活動等の更なる質的向上を図ることを、作成の主たる目的とした。
- 本報告書は、2011年4月に設置した社会から見た大学教育点検・評価部会において作成されたものを評価委員会において承認し、公表するものである。

2 大学全体についての評価

- 一橋大学についての満足度の総合的評価は、卒業生の28%が「とても満足」、62%が「まあ満足」していて、両者の合計は90%に達している。しかし、前回2005年度に実施した調査(報告書:2007年度)では95%で、それよりは若干低下した。
- これは、「とても満足」に1、「まあ満足」に0.5のウェイトをかけて求めた評価ポイントにすると59ポイントであり、個別にたずねた四つの側面のいずれよりも、総合評価の方が高い。また、すべての学部が57~62評価ポイント(満足している人の比率が86%~93%)の範囲内の高水準となっている。
- 四つの側面の中では、教員についての満足度が高く、評価は55ポイントを示す。次に、施設・整備が48ポイント、授業・教育システムも47ポイントである。他方で、進路支援の体制の評価は14ポイントと低い値にとどまり、改善の余地がある。しかしながら、この4側面とも、前回2005年度に実施した調査と比べるといずれもポイントが上昇した(前回調査の評価ポイントは、教員;47ポイント、施設・整備;37ポイント、授業・教育システム;37ポイント、進路支援の体制;10ポイント)。
- 総合満足度に対応して、後輩等や子どもに対して「一橋大学への進学を勧めるか」(他者推奨度)という質問にも、92%の卒業生が「ぜひ勧めたい」又は「まあ勧めたい」と答えている(73ポイント)。
- 一橋大学で学んだことで「人間的な成長が得られたと思うか」という質問に対して、「とてもそう思う」と「まあそう思う」と答えた卒業生の比率の合計も、92%という高い値に達している(70ポイント)。

3 各学部における学部教育に対する評価と課題

(1) 商学部

- 商学部の卒業生の大学に対する総合的な満足度をみると、58ポイントと、全学の平均とほぼ同じ高い値を示している。また、「教員」、「施設・設備」、「授業・教育システム」、「進路支援の体制」の四つの側面についても、いずれも全学平均と1ポイントしか離れていない。
- 後輩等に対して「一橋大学への進学を勧めるか」という他者推奨度の質問への回答では、他学部の卒業生と比べてもっとも高い76ポイントを示している。
- 「施設・設備」の評価として、商学部の卒業生からは、授業人数の適切さを評価する意見が多かった(58ポイント)。これは、商学部において全教員の授業負担を増やす形で進められているカリキュラム改革の成果が現れているのかもしれない。
- 「授業・教育システム」に関しては、「専門的な教育が充実していた」(57ポイント)、「内容豊富な授業が多かった」(49ポイント)、「最先端の研究分野に触れられる授業科目があった」(26ポイント)といった項目では、他学部と比較しても高い評価を得られている。このように、商学部においては、教員の専門的な授業内容についての評価が高いといえるであろう。
- 「授業・教育システム」に関して、他学部と比べてやや評価が低かった点は、「自分の視野を広げるのに役立つ授業科目があった」、「自分の進路や「生き方」を考える機会が多かった」、「現代の社会的テーマを多角的に考える総合科目があった」、「一般教養的な教育が充実していた」である。

(2) 経済学部

- 経済学部の卒業生も、他学部の卒業生と同様に大学に対して高い総合満足度を示している(57ポイント)。この総合満足度に、個別にたずねた四つの側面が寄与しているのかどうか分析すると、「授業・教育システム」、「施設・設備等」、「教員」の三つが、この順に統計的に意味ある関係を持つことが判明した。
- 他者推奨度に対して、学生時代に取り組んでいた活動や一橋大学に対する様々な評価項目のうち関係が強いものはどれか分析すると、「友達から良い刺激を受けた」、「個人的に魅力のある、または影響を受けた教員がいた」、「大学(就職課(=キャリア支援室(以下同様))の職員)は親身に就職指導をしてくれた」、「友人との交流」への回答との関係が強いことが認められた。このように、大学で良い人間関係を持ったと記憶している卒業生ほど、一橋大学を後輩や子どもに勧めたいと思う傾向が強まっていた。
- 大学生生活で取り組んだ活動については、「友人との交流」(67ポイント)がもっとも評価が高く、他学部の卒業生と比べてももっとも高い。それ以外にも、「ゼミ・卒論のための学習」、「クラブ・サークル活動」、「専門科目の学習」で評価が高い。
- 教員に対する評価では、「学問分野の専門家として優れた教員が多かった」の質問に、他学部の卒業生と比べても高い評価が示されている(68ポイント)。また、この回答が、教員についての満足度ともっとも関連が強いことも認められた。
- 授業・教育システムについての評価では、「友達から良い刺激を受けた」、「専門的な教育が充実していた」などについて、他学部と同様に高い評価が得られている。しかし、「現代の社会的テーマを多角的に考える総合科目があった」及び「自分の視野を広げるのに役立つ授業科目があった」については、経済学部の卒業生からの評価がもっとも低い。この点の改善は今後の課題だろう。

(3) 法学部

- 法学部の卒業生は、大学について総合的には61ポイントの満足度で、他学部と比べても満足度が高い。「教員」及び「授業・教育システム」の満足度については他学部と

それほど相違はないが、「施設・設備」については特に評価が高い。また、「進路支援の体制」についても、他学部の卒業生よりも満足度が高くなっている。

- 大学生生活で取り組んだことについては、「資格取得のための学習」への取組が他学部と比べると顕著に高く（25ポイント）、「専門科目の学習」や「一般教養的な科目の学習」、「外国語科目の学習」といった学習全般に熱心に取り組んでいる様子が伺える。反面、「ゼミ・卒論のための学習」には、他学部に比べてやや熱心ではなく、ロースクール入試やそのための各種の試験に追われている様子が伺える。
- 「施設・設備」の評価として、法学部の卒業生では、図書館が役に立ったとする意見が突出しており（65ポイント）、「教育・研究に必要な施設・設備が充実していた」との意見も、他学部の卒業生より高い。「パソコン・インターネット等の情報設備は利用しやすかった」との意見も多い。図書館の蔵書だけではなく、データベースによる判例集の検索などが充実してきている成果と思われる。また、進路支援体制として、「大学（就職課の職員）は親身に就職指導をしてくれた」と評価する者が比較的多い。
- 教員については、他学部同様に評価が高いが、「授業以外でコミュニケーションがとれる教員が多かった」、「授業評価など、学生の声を教育改善に取り入れる教員が多かった」の項目で、他学部と比べて高い評価がみられる。
- 授業・教育システムについての評価では、他学部同様「友達から良い刺激を受けた」との回答が多い。「専門科目のために必要な知識等を学ぶ基礎科目があった」も相対的に多いが、「内容豊富な授業が多かった」は相対的に少ない。実定法科目など定型的な授業が多い学部の特徴を反映したと思われる。基礎科目や外国語教育の充実を評価する者も多い。

(4) 社会学部

- 社会学部の卒業生は、大学について全学部でもっとも満足度が高い（62ポイント）。一方で、他者推奨度は他学部よりも低い。「教員」、「授業・教育システム」、「施設・設備」についての満足度は全学平均と同じか、やや低めであり、「進路支援の体制」についてはやや高めである。
- 大学生生活で取り組んだことについては、一橋大学生らしく「ゼミ」、「クラブ」に活発に取り組んだという評価が目立つ一方、「資格取得のための学習」、「専門科目の学習」は低めである。「フィールドワークなどの体験的な学習」、「学外でのボランティア活動や社会的な活動」で高い回答率を示していることも社会学部の特徴を反映していると考えられる。
- 施設・設備等についての具体的な項目に関しては、社会学部の卒業生の「図書館が役に立った」の評価が低く（55ポイント）、「パソコン・インターネット等の情報設備は利用しやすかった」についての評価も全学部で最も低い（11ポイント）。進路支援体制の各項目についての評価は他学部とあまり差はないが、あえて言えばやや低めである。IT化に応じた施設・設備の改善や進路支援体制のさらなる充実は、他学部同様、社会学部の課題である。
- 教員については、他学部同様に評価が高い。「熱意をもって授業やゼミに取り組む教員が多かった」（64ポイント）、「個人的に魅力がある、または影響を受けた教員がいた」（66ポイント）で平均より高く評価されている一方で、「学問分野の専門家として優れた教員が多かった」と「授業以外でコミュニケーションがとれる教員が多かった」で他学部よりやや低めの結果となっている。
- 他学部同様、「友達から良い刺激を受けた」との回答が多い（70ポイント）。このほか他学部と比較して特に高い項目としては、「現代の社会的テーマを多角的に考える総合科目があった」（51ポイント）、「一般教養的な教育が充実していた」（36ポイント）をあげることができる。全体として、全人的教養教育としての充実度が高く評価される一方で、専門教育についてはやや評価が低めに出ているといえるだろう。
- 必要な能力・資質を卒業時に修得できていたかについては、「人間的成長」や総合的

な知識・教養といった資質の修得については肯定的な評価が高い一方で、専門性や専門的学習能力についての評価が低めに出ている。また全学的にも評価が低い語学・英語力について社会学部の評価はさらに低めに出ている。社会学部の専門的学問内容に応じた語学・英語力の育成が今後の課題であるだろう。

(5) 学部教育に関する企業からの評価

- 一橋大学に対する社会的イメージを企業採用担当者と卒業生とで比較すると、「世界的研究・教育拠点（研究大学院）」、「社会貢献機能（地域貢献，産官学連携）」といった点では、企業の方が卒業生よりも肯定的なイメージを抱いている。逆に、「ゼミ教育の充実」，「自由な校風」，「産業界のリーダーの育成」といった点では、卒業生の方がより肯定的なイメージを持っている。
- 卒業生についてのイメージでは、企業の採用担当者からの評価の方が卒業生の自己評価よりも概して高い傾向にある。なかでも、「論理的思考力がある」，「社会的常識を身につけている」，「幅広い教養を身につけている」，「コミュニケーション能力がある」，「行動力・実行力がある」，「企画・アイデアなどの創造力がある」については評価が高い。他方で、卒業生の自己評価と比べて、「幅広い人脈がある」では、企業の評価は低い。
- 企業が採用にあたって重視していることの上位には、順に「コミュニケーション能力」，「熱意・意欲」，「行動力・実行力」，「協調性・バランス感覚」，「理解力・判断力」，「論理的思考力」，「状況への適応力」などが並んでいる。このうち、「論理的思考力」については、重視される程度に相応する肯定的なイメージを卒業生に対して企業が抱いている。
- しかし、それ以外の「コミュニケーション能力がある」，「行動力・実行力がある」，「協調性・バランス感覚がある」などの点では、抱かれているイメージの肯定度は、採用に当たって重視する程度に及んでいない。一橋大学の教育によって、これらの能力を企業が望む程度にまで伸ばすことが望ましい。

4 全学的教育事項に対する評価と課題

(1) 全学的教育事項に対する卒業生からの評価

- 卒業生から見て在学時に取り組んだこととして、「友人との交流」（63ポイント）、「ゼミ・卒論のための学習」（61ポイント）、「クラブ・サークル活動」（60ポイント）、「専門科目の学習」（49ポイント）が、前回2005年度に実施した調査と、今回2011年度に実施した調査において上位4項目としてあがっており、ゼミやクラブ・サークルを中心として良く学び良く遊ぶ一橋大学の学生文化をよく示しているだろう。
- 卒業年次別に見て注目すべきことは、「友人との交流」が減少傾向であるのに対して、「一般教養」，「外国語科目」などの学習項目が増加傾向を示していることである。これは、一連のカリキュラム改革によって学習への取組が向上した結果が現れていると考えられる。
- 「施設・設備等」についての評価では、若い世代の卒業生で「図書館が役に立った」という回答が大きく増加したことが注目できる。近年、増改築を行い、学習図書館機能を充実・強化したことの成果だと考えられる。
- 「進路支援」体制についての評価レベルは概して低いが、近年の卒業生においては「就職に関するセミナー，講習会が充実していた」に対する評価が急上昇したほか、「インターンシップ（企業研究）等の学外での職場体験する機会が充実していた」とあげる者も増加しており、キャリア支援体制についての学生の認知度・利用度は着実に改善されつつある。
- 卒業生の「教員」に対する評価は高く、特に「学問分野の専門家として優れた教員

が多かった」(66ポイント)、「個人的に魅力がある、または影響を受けた教員がいた」(65ポイント)、「熱意をもって授業やゼミに取り組む教員が多かった」(60ポイント)という項目は、いずれも高い評価が認められる。

- 教員について評価が低い項目としては、「授業評価など、学生の声を教育改善に取り入れる教員が多かった」(14ポイント)をあげることができる。一橋大学ではすでに授業評価アンケートが導入され定着しているが、必ずしもうまく活用されていない可能性が考えられる。
- もう一つ、学生の評価が意外に低い項目として、「授業以外でコミュニケーションがとれる教員が多かった」(28ポイント)をあげることができる。この項目については、直近の卒業年次(2009-2010年度)において、その前の年次と比較して評価が急落し、全体でも最低(22ポイント)となっている。
- 授業・教育システムに関しては、「友達から良い刺激を受けた」などの項目で高い評価を卒業生から受けている。これは、ゼミや少人数授業における討論・発表を中心とした一橋大学の授業・教育システムの良さを反映していると考えられる。
- 望ましくない変化として、近年の卒業生においては、「授業やゼミで教員と一体感が持てた」や「授業やゼミ等では、発表・説明の機会が多かった」についての評価が下がってきている。これは、教員の多忙化などの影響がゼミ運営にまで及んで、学生と教員、学生同士の交流の機会を減じさせている可能性を示唆している。
- 卒業生からの評価が高い項目としては、専門的で高度な授業や、視野を広げる多角的な授業科目に対する評価が高い一方で、「一般教養的な教育が充実していた」、「わかりやすい授業が多かった」の評価は相対的に低い。また、「英語教育」、「英語以外の外国語教育」の充実度に対する評価も相対的に低く、特に直近の2009-2010年度卒業生(英語12、英語以外10ポイント)の評価が低いことは気にかかる点である。

(2) 全学的教育事項に関する企業からの評価

- 企業が採用活動で重視している取組は、「その企業のみによる企業説明会」、「その企業のホームページによる告知」である。また、前回2005年度に実施した調査から「特定の大学での企業説明会」に対する重視の程度が高まり、「就職サイトを通じた募集活動」については低下して、両者の重視度がほぼ同じ程度になった。
- 企業が採用にあたって重視している学生の特性は、「コミュニケーション能力」、「熱意・意欲」、「行動力・実行力」、「協調性・バランス感覚」、「理解力・判断力」、「論理的思考力」、「状況への適応力」、「創造性・企画力」、「健康・体力」などの一般的で基礎的な能力である。これらと比べて「国際感覚」、「英語力」、「専門の知識や能力」など専門性の高い能力はそれほど重視されていない。さらに、「ボランティア活動の体験」、「インターンシップの経験」などについては、重視すると考えている企業はごくわずかである。

第1部 学部教育に対する評価と課題

1 本学における学部教育概要

一橋大学は、社会科学の総合大学として、リベラルな学風のもとに日本における政治経済社会の発展とその創造的推進者の育成に貢献してきた。創立以来、国内のみならず国際的に活躍する、多くの有為な人材を輩出している。

建学以来、一橋大学は高い志、豊かな教養及び高度な専門的能力を備えた人間を経済社会人の理想とし、“キャプテンズ・オブ・インダストリー”というキャッチ・フレーズのもとに、産業界をはじめとして多様な分野において国際社会のリーダーとなる人材を育てることを目標としている。この考え方は、現在、山内進学長の下、「一橋大学プラン135-『スマートで強靱なグローバル一橋』の確立を目指して-」として、一橋大学における基本的な運営方針とされている。

学部教育では、その目標を実現すべく、本学の伝統である少人数教育のゼミナール制度を軸として、急速に変化する複雑な現代の経済社会の諸課題を自らの頭で分析し、解決策を見出し、それを社会に対して説得的に提示しうる能力を、それぞれの学生が修得できるような教育を実践し開発する努力を続けている。

社会科学の総合大学としての一橋大学における学部教育には大きく二つの特徴がある。一つは学部間の垣根が低く、自由に他学部の授業が取れる教育体制をとってきたこと、もう一つはゼミナールを伝統的に重視し濃密な少人数教育を実践してきたことである。また、幅広い教養を身につけるためにも、人文科学・自然科学に対する知識・理解は重要である。そのため、他大学との単位互換制度の締結にも積極的に取り組んでいる。

(1) 学部を超えた教育体制

一橋大学は、社会科学の総合大学として、商学部・経済学部・法学部・社会学部という四つの学部から構成されている。ただ、これら4学部の垣根が低いことは他大学に見られない一橋大学の最大の特徴であると考えられる。より具体的にいえば、学部毎の建物を設けていないこと、一つのキャンパスを共有していること、さらに4学部の時間割が一つにまとめられていることなどがあげられる。こういった体制の中、学生は自由にそして容易に他学部の授業を選択することができるようになっており、大学（各学部）もそのような学部を超えた履修を積極的に勧めている。

また「副ゼミ制度」があり、他学部の学生であっても主ゼミとは別に一つのゼミに参加することが可能である。つまり、主ゼミの参加が決定した後、所属学部を含むすべての学部のゼミの中から副ゼミとして参加することが可能である。こうした制度を活用して、二つのゼミに学部を超えてゼミに参加する学生もいる。

もちろん各学部は独自のカリキュラムをもっている。4年一貫教育体制のもとで、導入→基礎→発展という授業科目を積み重ねていく教育システムがとられている。しかし、同時に一橋大学では、東京商科大学以来の伝統を引き継ぎ、学部教育における学部間の垣根を設けないようにし、学生の興味に従って自由に他学部の科目を学ぶことができる体制を維持してきた。一般に学部間の垣根の大きい大学が多く、他学部の科目を自由にとりにくいことが多い中、自らの学習計画に従って、多様な講義科目を選択できる一橋大学のスタイルは他の大学には見られない非常にユニークなシステムである。学生は社会科学の知の境界線を越えた冒険を自由に試みるのが可能となっているのである。

(2) 充実したゼミナール教育

一橋大学では、少人数教育の実践としてゼミナールによる教育を伝統的に重視し、充実させてきた。一橋大学においては、すべての学生が、学部後期2年間は同一のゼミナールに所属し、卒業論文を書かなければ卒業することができない。ゼミナールの履修（及び卒業論文の作成）を学生の選択とし、ゼミナール制度が形骸化している大学が少なくない中、一橋大学では、ゼミナール制度を学部教育の中核に据え、多くの教員・学生においてゼミ

ナールを学生生活の中心的存在とする共有認識ができあがっている。大人数講義では一方通行の形式になりがちであるが、少人数のゼミナールにおいては、学生が主体的に学びかつ議論する場として、双方向の教育を行うことが可能である。特定のテーマをもって共同で行うプロジェクト研究などが実施されることも多く、仲間とのグループ・ワークを通して得られる教育効果は大きい。

ゼミのスタイルとしては、伝統的には社会科学に関わる古典などの専門的書籍の輪読が行われており、現在でもそのような方式が一般的である。ただ、最近では、専門文献の輪読にとどまることなく、教員の指導のもと、現代の政治、経済、社会、企業、市場における諸課題について、学生自身が理論的・実証的に分析を行い、その成果を報告するということがも行われている。また、個人研究のみならず、グループ・ワークという知の共同創造作業が行われることも多くなっている。こういった様々なスタイルの教育を通して、学生は多様なものの見方、考え方が身につけていくことができる。一橋大学の学生は、ゼミナールという濃密な勉学環境の中で、問題を設定する能力、コンセプトを作り上げていく能力、情報を処理・編集・創造していく能力、そしてそれをプレゼンテーションする能力、他者に説得的に伝え議論していく能力といった多様な能力を身につけていくことが期待されている。

ゼミによっては、3年生、4年生が合同で行う場合もあるし、また、大学院生も参加する場合もあり、ヨコ・タテのコミュニケーションが図られている。さらに、シンポジウムや研究会などへの参加、国内外での調査、企業やNPOへのインターンシップなど学外との交流を積極的に進めているゼミも多くなっている。特に、旧三商大（神戸大学、大阪市立大学、一橋大学）の間で、ゼミ対抗のかたちで行われる討論会（三商大ゼミ）は、60年以上の伝統を持つユニークかつ有意義な行事といえる。

(3) 他大学との交流

社会科学の総合大学という本学の特徴は、他大学に比べて、人文科学や自然科学に関する教育機会が相対的に少ないという一面も持っている。そこで、一橋大学では、他大学との積極的な交流を通じて、社会科学のみならず、人文科学・自然科学といった領域においても学生が様々な知識を獲得できるよう、勉学の機会を増大させることを目指している。

2001年3月には東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京工業大学及び一橋大学の間で「四大学連合憲章」を締結し、1大学では提供できない教育プログラムを、2大学又は3大学又は4大学が、相互に提供する「複合領域コース」を設定し、これまでの高等教育機関が育てることのできなかった新しい人材を育成することをスタートさせた。「複合領域コース」を履修している学生に対し、関連した他大学への「編入学」の途を開く、あるいは関連する2大学の間で、「複合領域コース」を履修した学生に対する「複数学士号」の制度を創設し、これを組織的に推進している。

さらに、多摩地区国立5大学間（東京外国語大学、東京学芸大学、東京農工大学、電気通信大学及び一橋大学）並びに津田塾大学との間で、相互の交流と教育課程の充実を図ることを目的として単位互換協定も結ばれている。この単位互換協定は、本学にない各大学の特色あるカリキュラムの中から指定された授業科目（開放科目）を手続きに従って履修することができる。これにより修得した他大学の単位は、国内交流科目として扱い、卒業要件の単位としては、自由選択の科目に参入できる。さらに、2013年度からは、お茶の水女子大学との単位互換協定に基づく相互交流が始まる予定である。

また一橋大学は、海外の大学との交流も積極的に行っている。例えば、2013年1月現在、世界20か国・地域47大学と学生交流協定（大学間協定）を結んでおり、毎年90人近い学生の交流が可能となっている。学生交流協定では、授業料は相互不徴収が原則となっており、学生は留学先の大学に授業料を納める必要はない。また、学生交流協定を締結している外国の大学へ留学する本学の学部生は、そのすべてが、明治産業株式会社、明産株式会社及び本学の同窓会組織である如水会からの寄附を利用した奨学金の支給を受けている。このような奨学金を伴う派遣留学制度は、他大学にはない本学の大きな特徴である。さらに、

2013年度より、グローバルリーダー育成海外留学制度を開始し、オックスフォード大学セント・ピーターズ・カレッジ、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンス (LSE) 及びハーバード大学との間に締結された協定に基づき、毎年1人の学部学生を派遣するプログラムも始まることになっている。

(4) 近年のカリキュラム改革概要

① GPA制度の導入

2010年度入学者より、「2.00以上のGPA値（4年間の累積GPA）」が卒業要件として追加的に課されることになった（以下、GPA制度と呼ぶ。なお、当面の間、経過措置としてGPA卒業要件は1.80以上とされている）。

GPA (Grade Point Average) とは、個々の学生の学習到達度を測る指標となる数値で、5段階成績評価による科目の成績を点数化(A=4, B=3, C=2, D=1, F[不合格]=0)したうえで、履修した科目1単位あたりの成績平均点を求めたものである。

GPA制度の導入にあたり、以下のような準備的措置がとられてきた。

ア 履修撤回制度の導入

2008年度より、不合格であるが暫定的に欠席を表すとしていた「-」という成績記載を廃止し、期末試験の不受験、期末レポートの未提出等も含めてすべて「F」（不合格）に統一すると同時に、履修撤回制度「W」（Withdrawal）を導入した。これは、履修登録した科目を実際に受講していくうちに、履修を継続するのが困難と考えられる場合に履修登録を撤回できる制度である。本制度は、学生による履修行動及び学修行動の適正化を目指すGPA制度導入の準備として取り入れられたものである。

イ 上書き再履修制度の導入

上書き再履修とは、過去に履修した科目を一定条件の下で再度履修し総履修登録単位数を増やさずに当該科目の成績評価を上書きする制度である。GPA制度の対象となる2010年度入学者より適用されている制度である。

制度導入の目的は、①在学生の履修行動と学習行動を適正に保つこと、②卒業生の質を社会に対して保証すること、の2点である。本学では、GPA制度導入直後より、その成果を様々な面から検証する試みを行ってきており、その問題点・改善点も徐々に明らかとなってきている。今後、学生の自律的学修の促進のため、必要な改善について検討することが求められるであろう。

② 英語を使った教育の拡充

グローバル化への対応は、大学教育においても喫緊の課題である。一橋大学では、山内進学長(2010～)がプラン135として提唱した「スマートで強靱なグローバル一橋」の確立に向けて、教育面における取組を進めてきた。

大学全体の取組としては、2010年度より、HGP(Hitotsubashi University Global Education Program)を開始した。HGPは、社会科学における学際的な科目等を提供するものであり、一部を除き授業は英語で行われる。HGPの講義では、各国の協定校からの交換留学生及び正規留学生と日本人の学生が一緒に学んでおり、日本にいながらにして、国際的な視野を身につけることができる特徴的なプログラムとなっている。

また、各学部においても、英語を用いた教育が積極的に導入されている。商学部では、2012年度より、英語を母語とする外国人教員による英語コミュニケーションスキル科目(Practical Applications for Communicative English: PACE)の提供を開始した。この科目は、1年次の必修科目となっており、2012年度は冬学期週1回で開講された。2013年度以降は、1年次必修で、週2回通年として開講される。また、2年次

以降の学生に対して、選択科目としてPACE IIが開講されることになっている。経済学部では、2010年度より、英語で経済を学ぶ科目の提供が始められた。「Academic Writing」や「経済語学」といった科目では、英語によるレポートの書き方や英語で経済・社会について考え、自分の意見をまとめ・発表する方法に関するスキルが講義されている。また、経済学の諸分野の内容を英語で講義する授業も開設されている。法学部でも、2010年度より、専門的な内容を英語で解説する講義が始められている。また、社会学部でも、2011年度より、「Social Sciences in English」や「English Skills for Social Sciences」といった英語で専門分野を学ぶ講義が始められている。

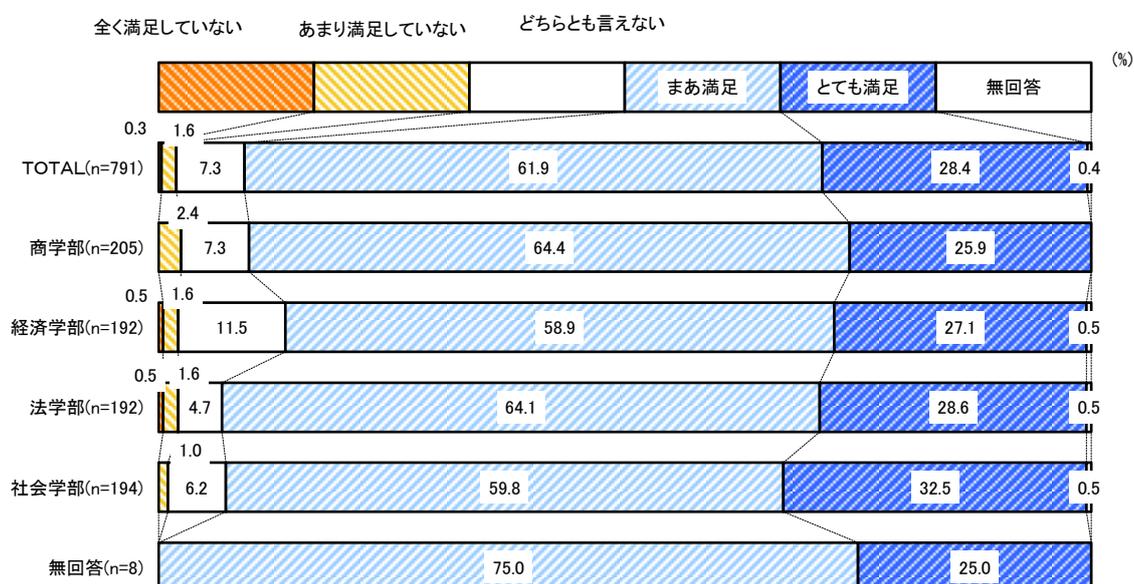
商学部及び経済学部においては、2012年度より、グローバル人材育成推進事業が始められた。これは、文部科学省及び日本学術振興会の重点的な財政支援により、大学教育のグローバル化を推進する取組を行うものである。2013年度以降、本格的な試行が行われる予定となっており、英語を用いた講義の充実、海外インターンシップの推進及び外国の大学への留学の促進に向けて、さらなる取組がなされていくことと期待されている。

2 学部教育に対する卒業生からの評価と課題

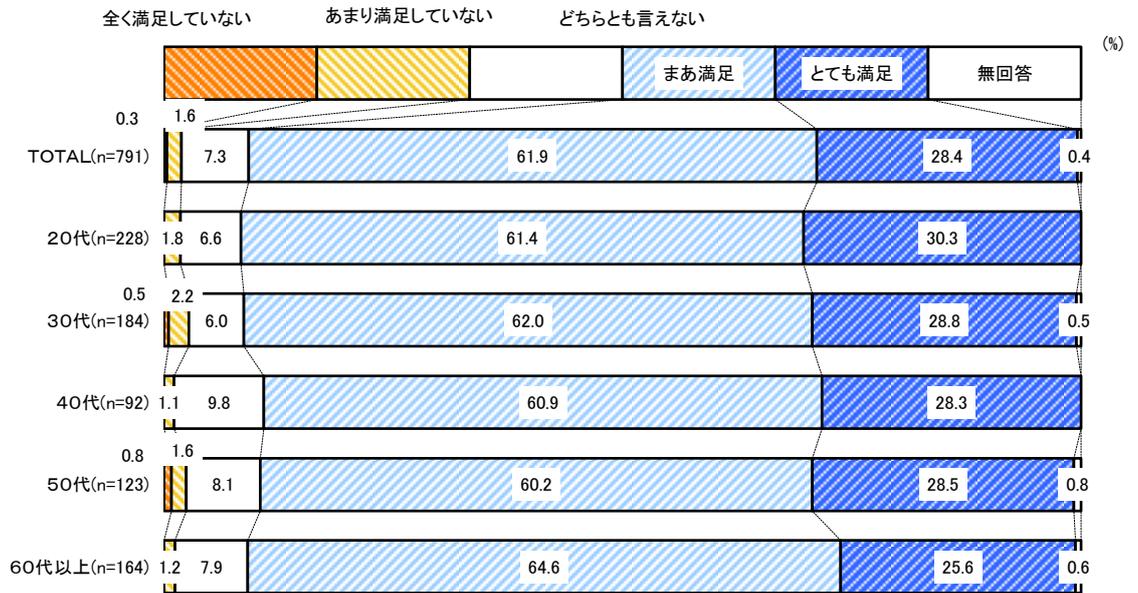
では、卒業生は学部教育についてどのように評価しているのだろうか。こうした点を検証するため、卒業生に対するアンケート調査を実施した。卒業生へのアンケートの中で、「あなたは総合的に見て、一橋大学の以下のこと（①施設・設備，②進路支援の体制，③教員，④授業・教育システム，⑤総合的に見て，のそれぞれ）にどの程度満足していますか」という問いを投げかけ、「とても満足，まあ満足，どちらともいえない，あまり満足していない，全く満足していない」の5段階で評価してもらった。以下では，アンケートの結果をもとに，卒業生による学部教育に対する評価をまとめよう。

総合的に見た一橋大学の満足度は，学部ごとに若干の相違があるものの，「とても満足している」が30%程度，「まあ満足」が60%程度と，全体の90%が満足しているという評価をしている。この傾向は，年代別で見ても大きな変化はない。また，性別で集計した場合，男性より女性の満足度の方がいくらか高い。

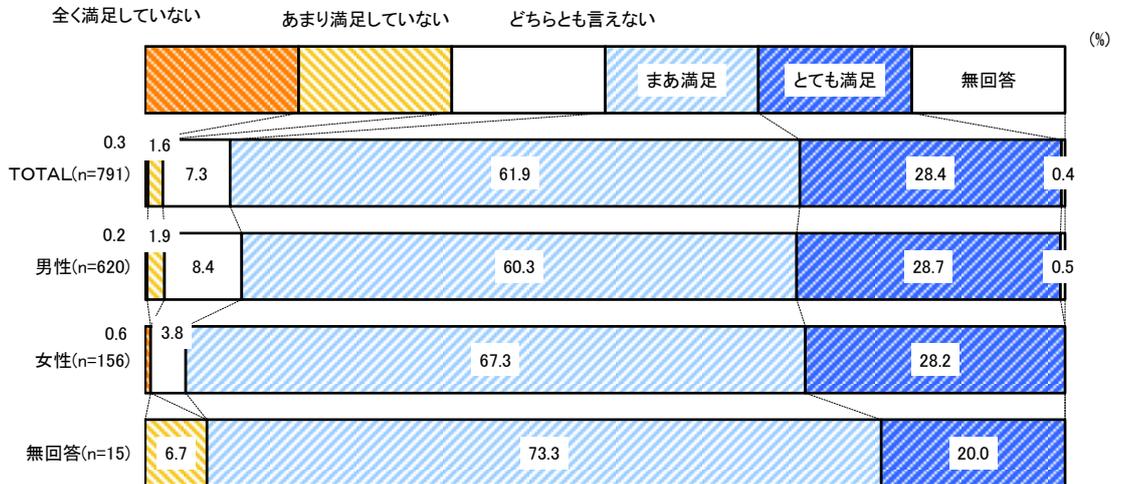
図II-2-1 一橋大学の満足度 総合的にみて
卒業学部



図II-2-2 一橋大学の満足度 総合的にみて
年代



図II-2-3 一橋大学の満足度 総合的にみて
性別

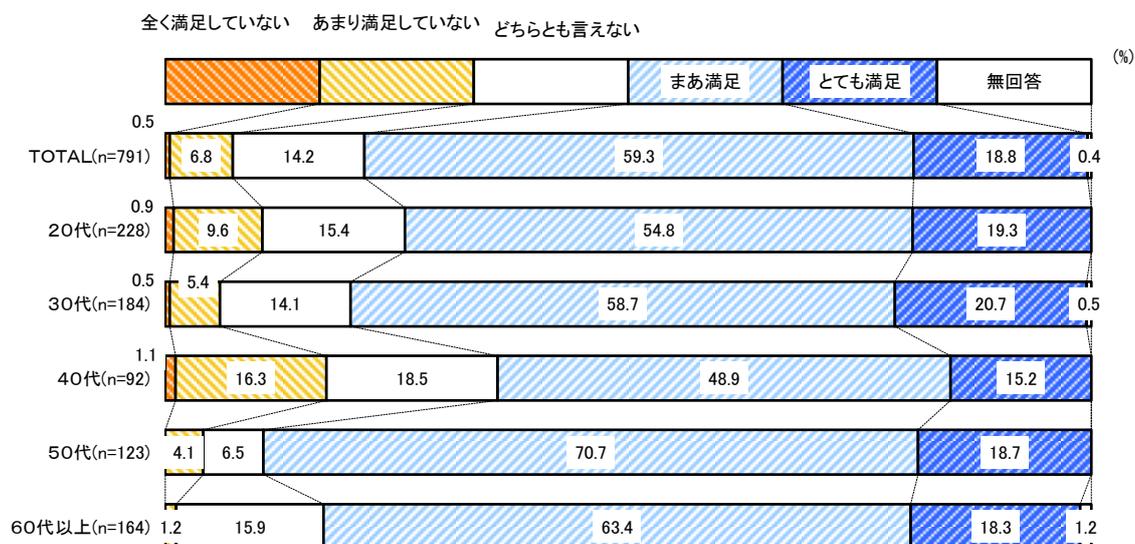


次に、項目ごとに、卒業生による大学への評価を見てみよう。各項目への評価は学部間でそれほど違いが認められなかった。また、各学部の評価報告の中で説明が行われるので、ここでは年代別と男女別の結果を示しながら報告する。

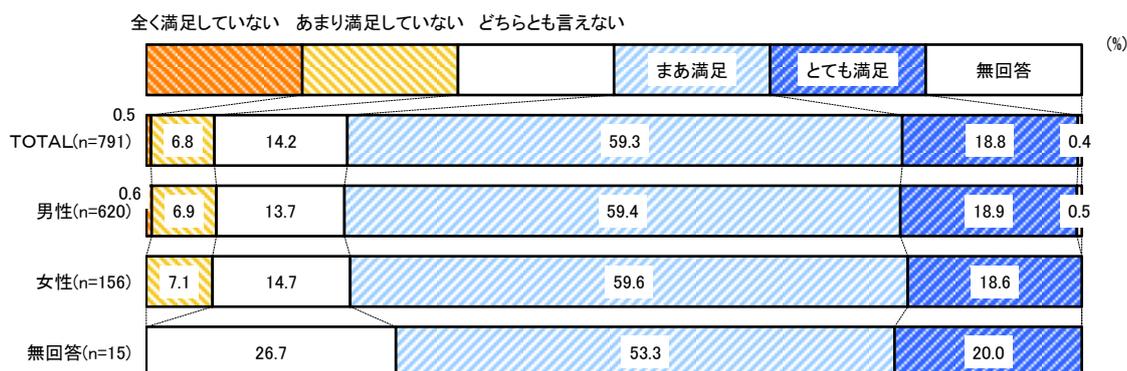
(1) 施設・設備

施設・設備全般については、卒業生の8割近くが満足しているという評価であった。回答者の属性別に見た場合、年代別では、1980年代後半から1990年代前半に卒業した現在40代に当たる卒業生からの評価が他に比べて低い点が特徴的である。他方、男女間では特筆すべき大きな差異があるとはいえない。

図II-2-7 一橋大学の満足度 施設・設備
年代



図II-2-8 一橋大学の満足度 施設・設備
性別

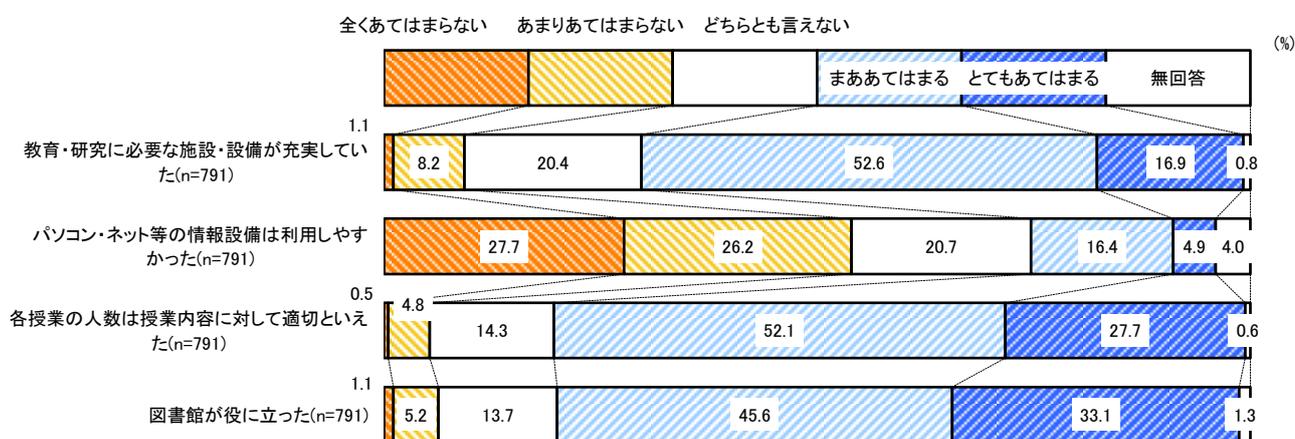


さらに、施設・設備については、「教育・研究に必要な施設・設備が充実していた」、「パソコン・インターネット等の情報設備は利用しやすかった」、「各授業の人数は授業内容に対して適切といえた」、「図書館が役に立った」という項目に分けてアンケートを行っている。これらの項目についての回答を見ると、「パソコン・インターネット環境」についての評価が低い一方、「授業人数」及び「図書館」に関する評価が高いことがわかる。

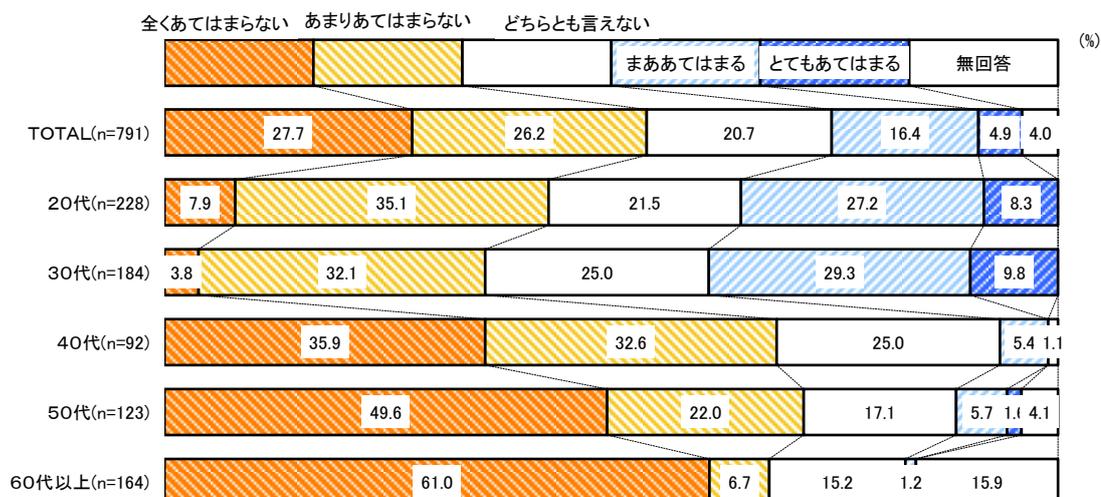
ただ、「パソコン・インターネット環境」については、年代によって評価が全く異なる。インターネットの利用が一般的となった30代以下の卒業生に限定して回答を見ると、好意的な回答が30代では38%程度、20代では36%である一方、評価の低い回答が30代では36%、20代では43%程度となっており、全体評価ほどは低くないものの、一橋大学の「パソコン・インターネット環境」は必ずしも評価の高い状況ではなかったことが理解できる。研究・教育両面において、インターネットの重要性がますます高まっている現代、インターネット環境をいかに充実したものとするかは、一橋大学にとって緊急かつ重要な課題であるといえる。

「授業人数」に関する評価は全般的に高いといえるが、60代の卒業生において好意的回答の比率が高い(85%程度)ことは特徴的である。また、「図書館」については、より若い卒業ほど評価が高くなっている点も、特徴としてあげられる。

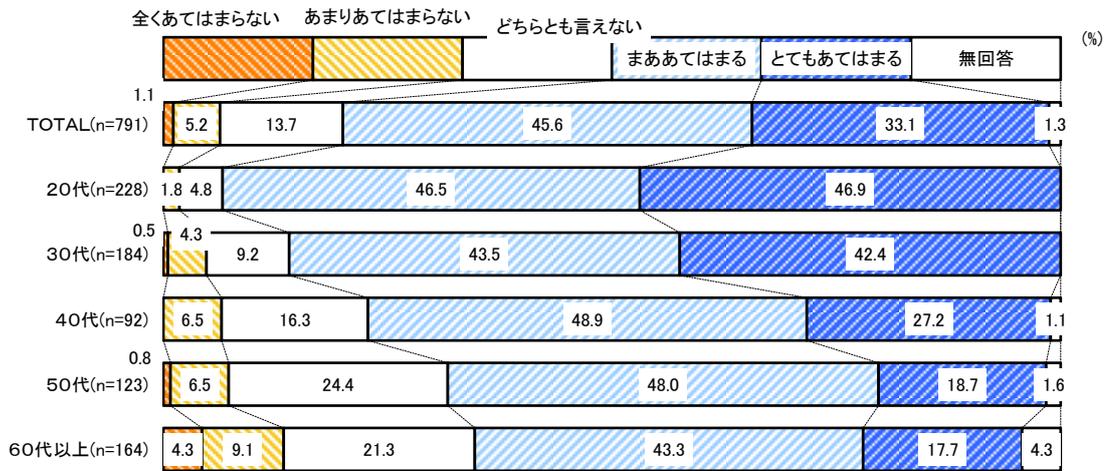
図II-2-9 在学時の一橋大学評価 A)施設・設備 等について



図II-2-10 在学時の一橋大学評価
A)施設・設備 等について パソコン・ネット等の情報設備は利用しやすかった年代



II-2-11 在学時の一橋大学評価
A) 施設・設備 等について 図書館が役に立った
年代

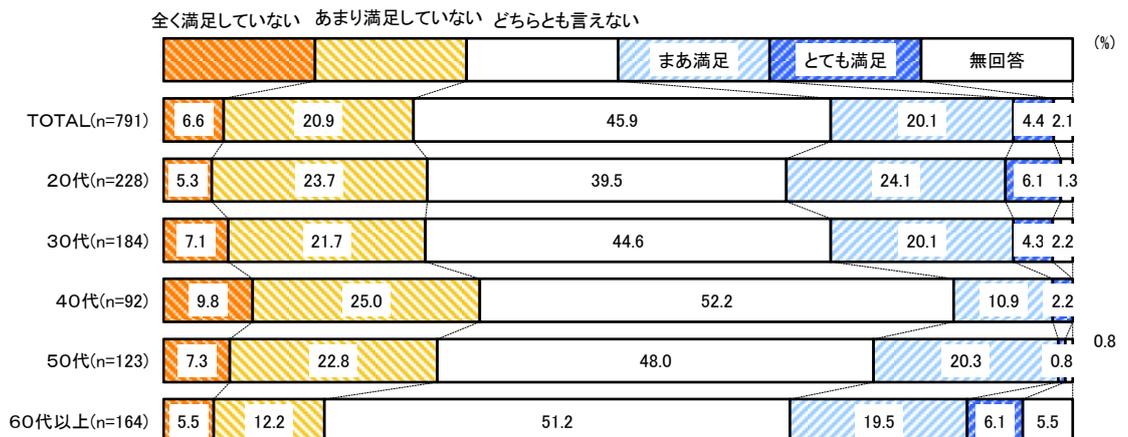


(2) 進路支援

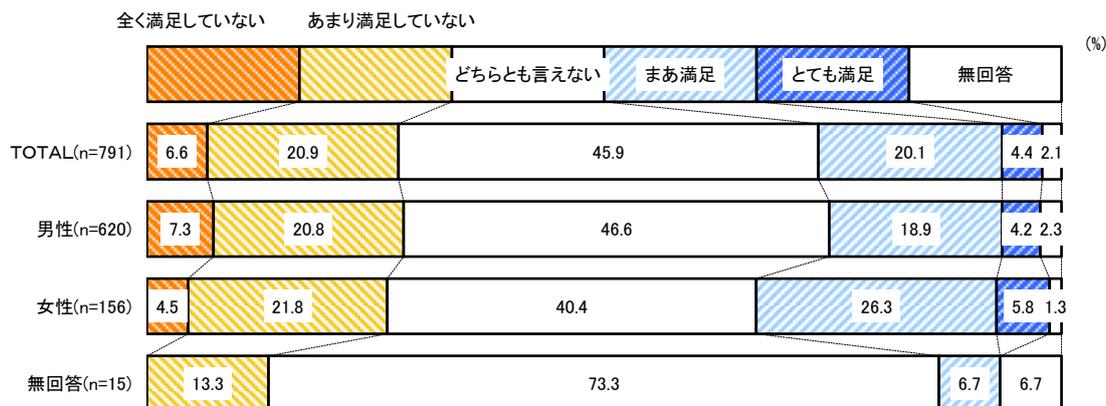
進路支援については、卒業生の約4分の1しか肯定的な評価をしておらず、2006年度まで満足できる状況ではなかった。年代・年齢別では、1980年代後半から1990年代前半に卒業した40代の卒業生の満足度が極端に低い点が特徴的であり、これがキャリア支援室を2006年度に設立した動機であった。40代の卒業生の満足度は8ポイントであったが、その後の30代は14ポイント、20代は18ポイントに上昇しており、近年では進路支援体制への満足度がかなり回復している。さらに男女別では、女性の方が本学の進路支援体制に満足していることがわかる。また、進路支援の具体的な点については、「就職に関するセミナー、講習会が充実していた」と評価する意見が、1990年代以降に卒業した30代以降の卒業生に多くみられた。

相対的に就職環境に恵まれている本学ではあるが、進路支援は、引き続き今後真剣に取り組むべき課題であると考えられる。

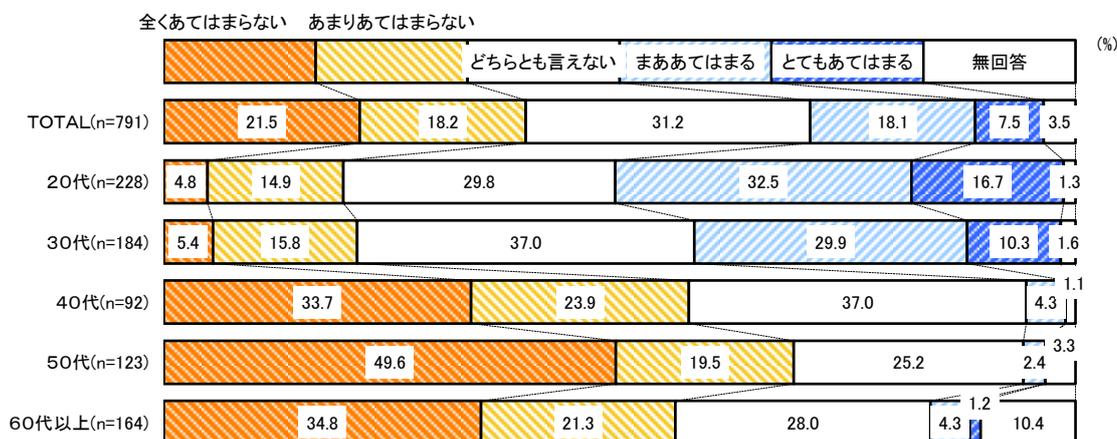
図II-2-14 一橋大学の満足度 進路支援の体制
年代



図II-2-15 一橋大学の満足度 進路支援の体制
性別



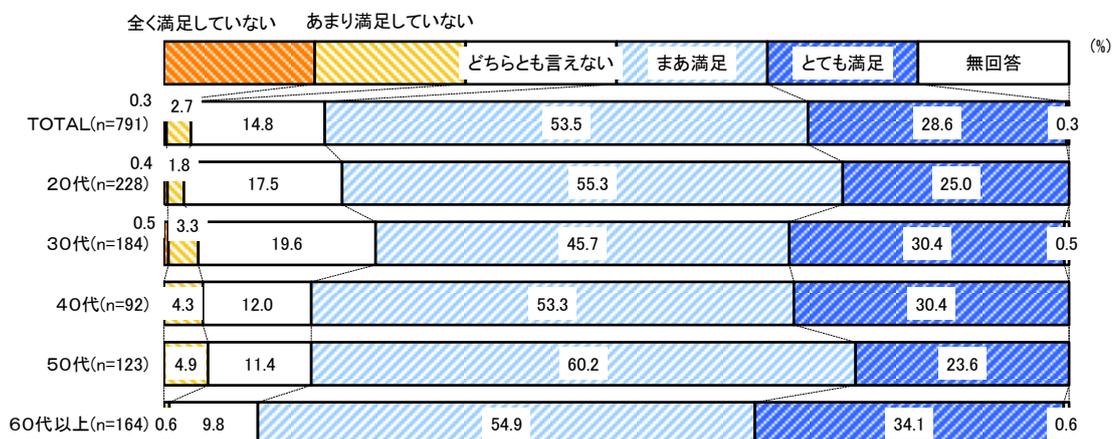
図II-2-17 在学時の一橋大学評価 B)進路支援の体制について 就職に関するセミナー、講習会が充実していた年代



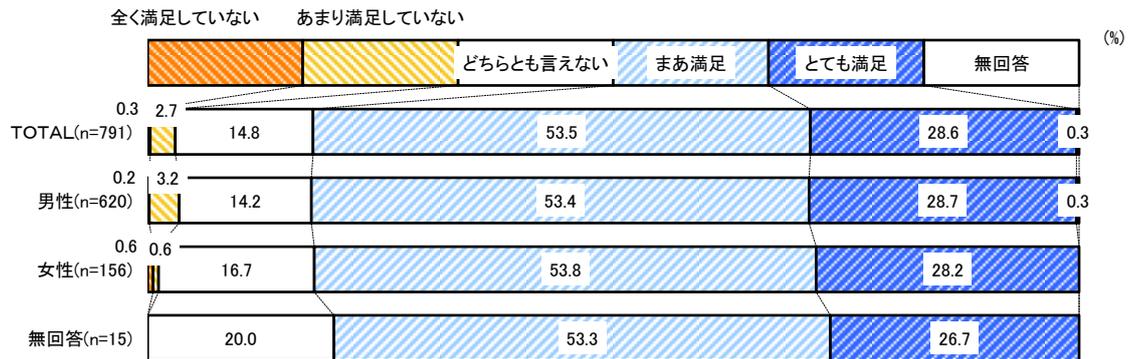
(3) 教員

教員については、卒業生全体の8割強が満足という好評価をしている。男女別ではさほどの違いはないが、卒業年次・年齢別では、1972年以前に卒業した60代以上の卒業生が教員を高く評価している一方で、1990年代に卒業した30代の評価が低い。

図II-2-20 一橋大学の満足度 教員
年代



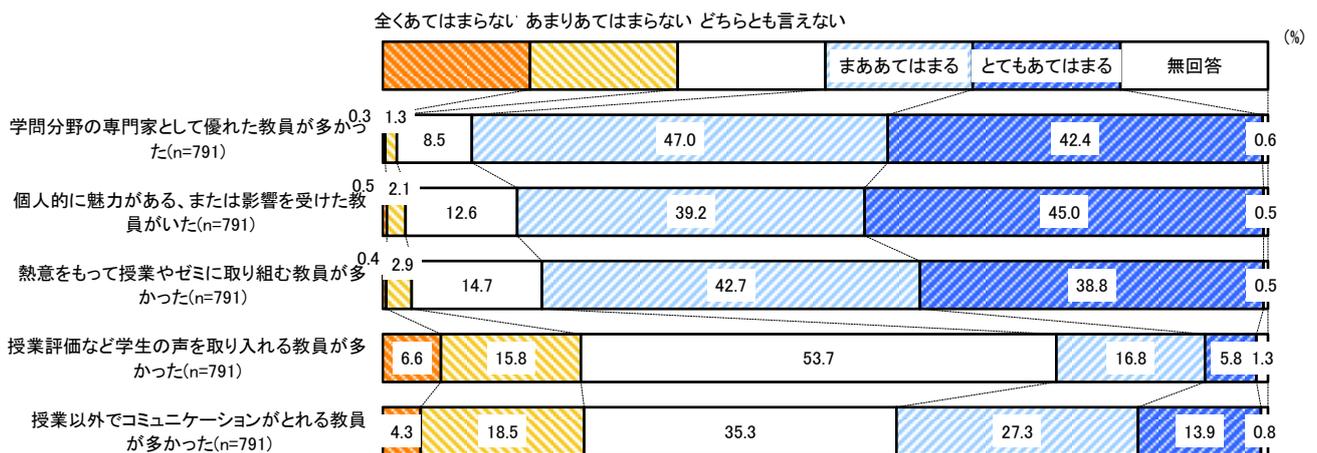
図II-2-21 一橋大学の満足度 教員
性別



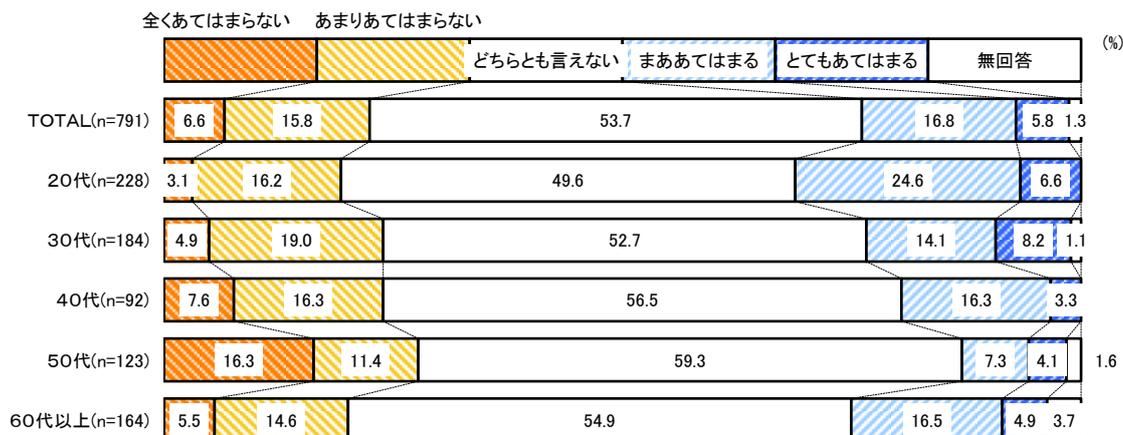
教員については、「学問分野の専門家として優れた教員が多かった」、「個人的に魅力がある、又は影響を受けた教員がいた」、「熱意を持って授業やゼミに取り組む教員が多かった」、「授業評価など、学生的心声を教育改善に取り入れる教員が多かった」、「授業以外でコミュニケーションがとれる教員が多かった」といった項目についてもアンケートをとった。その結果、教員の研究・教育能力の高さを評価する意見が多かった一方で、学生とのコミュニケーションという点で教員を評価する意見は少なかった。

教員の研究・教育能力の高さに対する評価については、多少のばらつきはあるものの、学部間・年代間・男女間でそれほど大きな相違はみられなかった。他方、学生とのコミュニケーションという点では、学部間・男女間での差異は大きくなかった一方で、年代間で多少の差がみられた。具体的には、「授業評価など、学生的心声を教育改善に取り入れる教員が多かった」という点では20代の卒業生の評価が高く、「授業以外でコミュニケーションがとれる教員が多かった」という項目では60代以上の卒業生の評価が高かった。

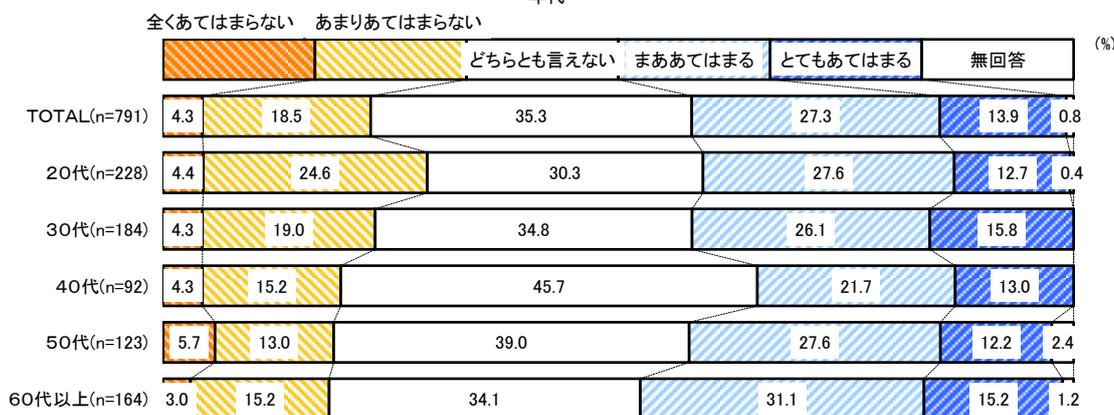
図II-2-22 在学時の一橋大学評価 C)教員について



図II-2-23 在学時の一橋大学評価 C)教員について 授業評価など学生の声を取り入れる教員が多かった年代



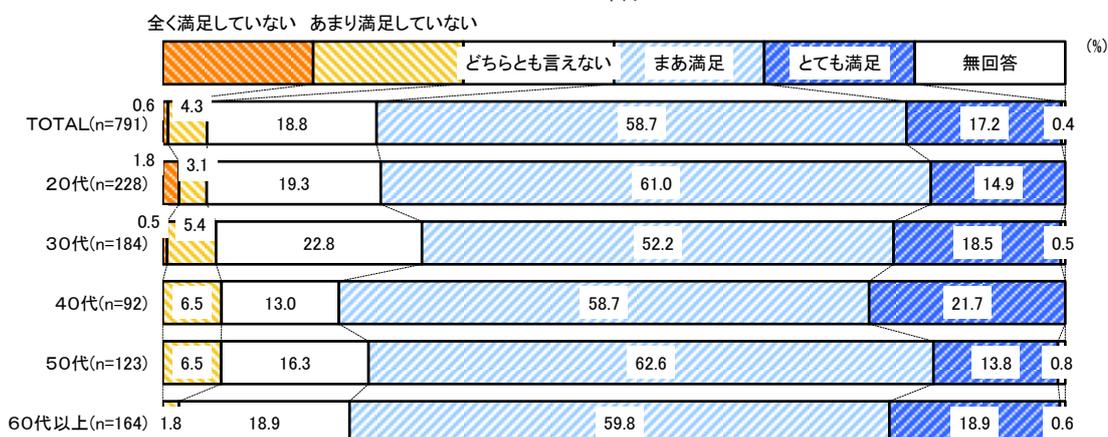
図II-2-24 在学時の一橋大学評価 C)教員について 授業以外でコミュニケーションがとれる教員が多かった年代



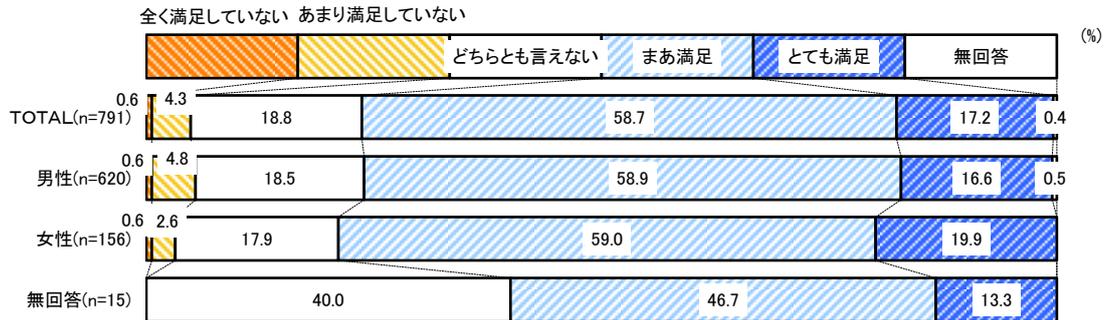
(4) 授業・教育システム

授業・教育システムについては、卒業生の4分の3以上が満足しているという評価であった。回答者の属性別では、学部間・男女間での差異はあまりみられなかった。他方、年代でみると、1992年以前に卒業した40代以上の卒業の方が、授業・教育面での評価が高いという傾向が見られる。

図II-2-27 一橋大学の満足度 授業・教育システム年代



図II-2-28 一橋大学の満足度 授業・教育システム
性別

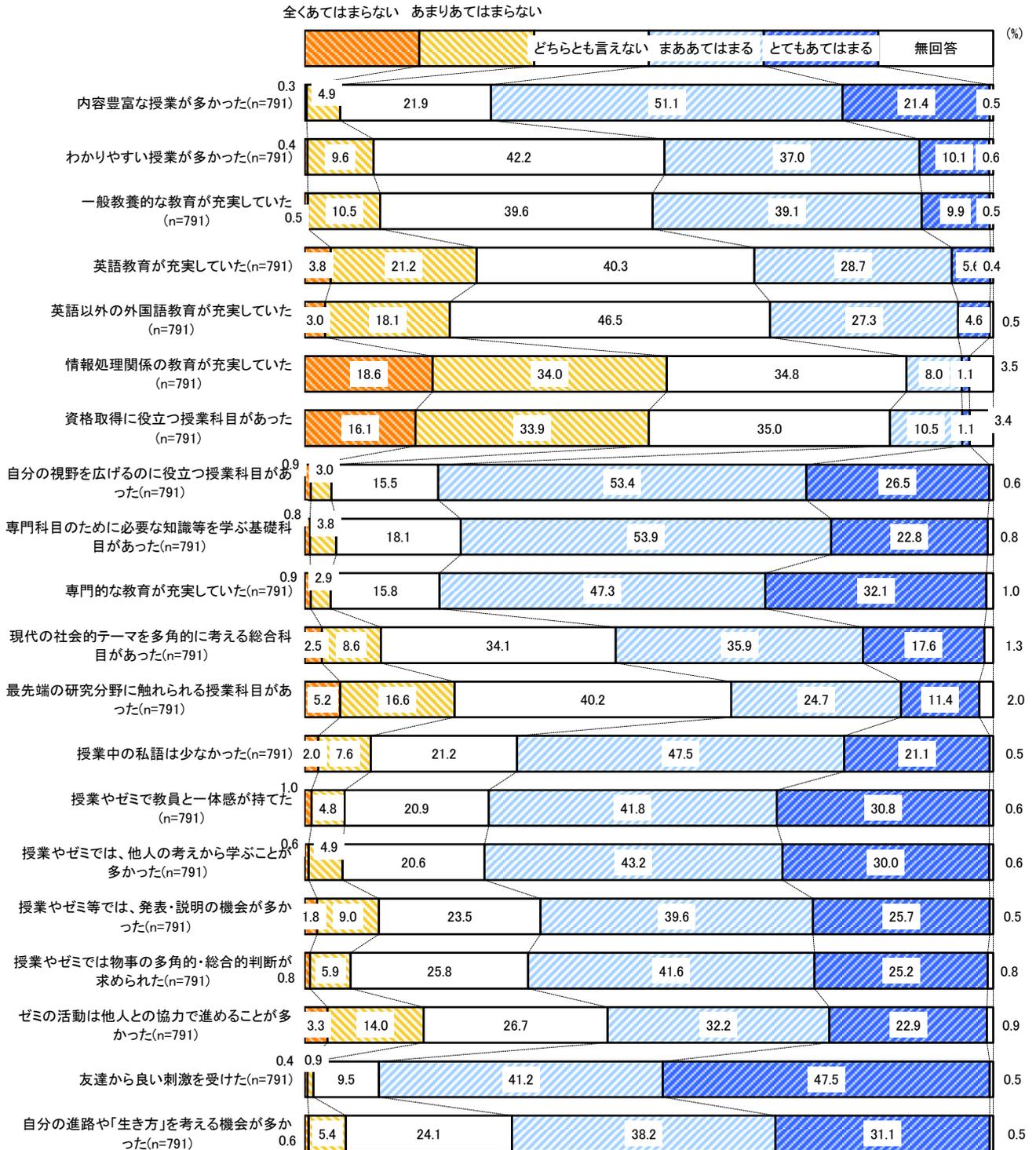


授業・教育システムに関して、さらに細かい内容についてアンケートをとったところ、専門分野を中心に多様な分野に関して充実した教育がなされている点への評価が高いことがわかった。さらに、優秀な友人から学ぶ機会が多くあったことも評価ポイントとしてあげられた。他方、語学教育、情報処理教育及び資格取得に役立つ科目提供といった点で評価が低いことも見いだせた。各項目への評価について、学部間・男女間では目立った相違はみられなかったといえる。

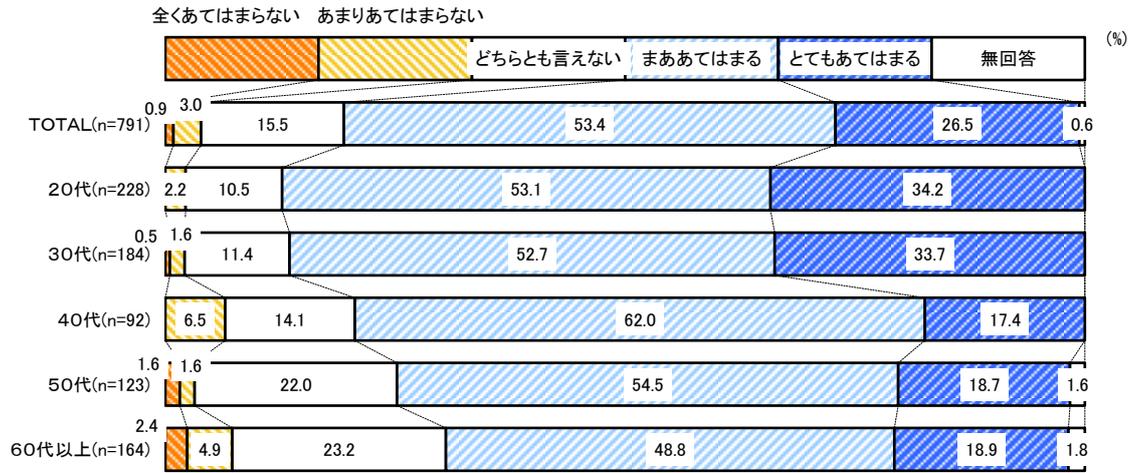
年代間では、いくつかの項目について特徴がみられた。第一に、英語教育については、50代以上の卒業生からの評価は、それ以下の世代に比べて高かった(40代の評価は最低)。第二に、自分の視野を広げるのに役立つ授業科目という点では、30代以下の若い世代の評価が高かった。第三に、授業の受講態度という点では、50代以上の世代の方が、授業中の私語が少ないという点で、よりよい授業環境であったという評価が多かった。

本学は、かつて「語学(英語)の一橋」と称されていた時代もあったといわれている。英語教育に対する世代間の評価の違いは、そのような称号が、必ずしも現代には当てはまっていないことを示しているのかもしれない。グローバル化がますます進んでいる現代において、英語コミュニケーションスキルの向上を図る教育の必要性・重要性を、このアンケート結果は示しているのではないだろうか。

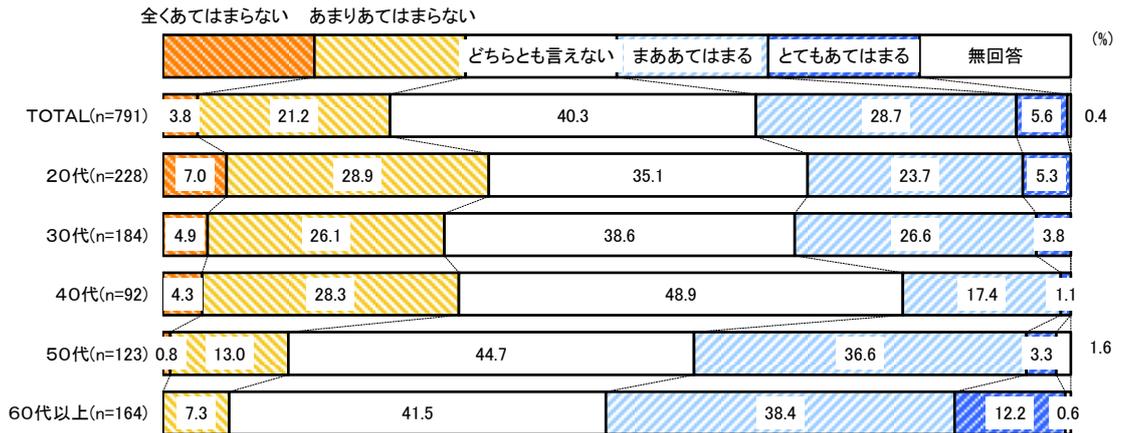
図II-2-29 在学時の一橋大学評価 D) 授業・教育システムについて



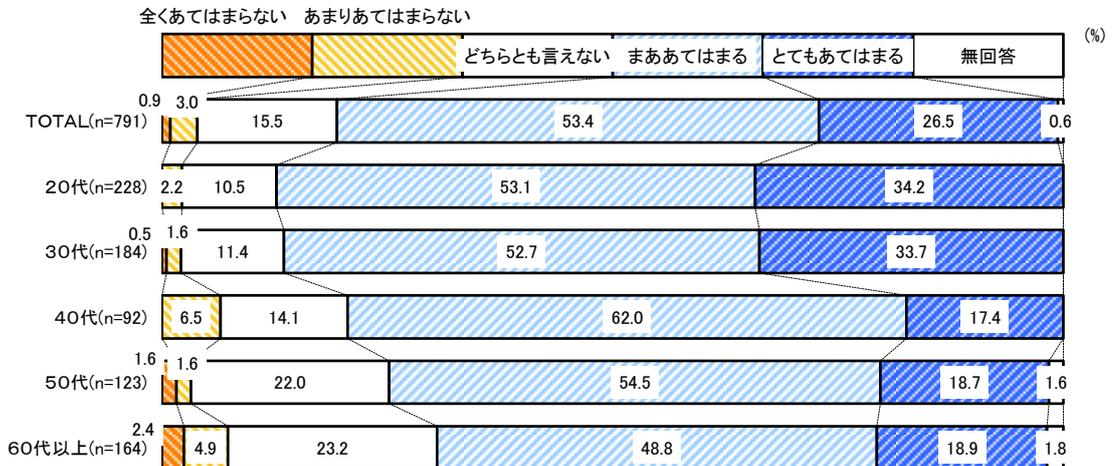
図II-2-31 在学時の一橋大学評価 D) 授業・教育システムについて 自分の視野を広げるのに役立つ授業科目があった年代



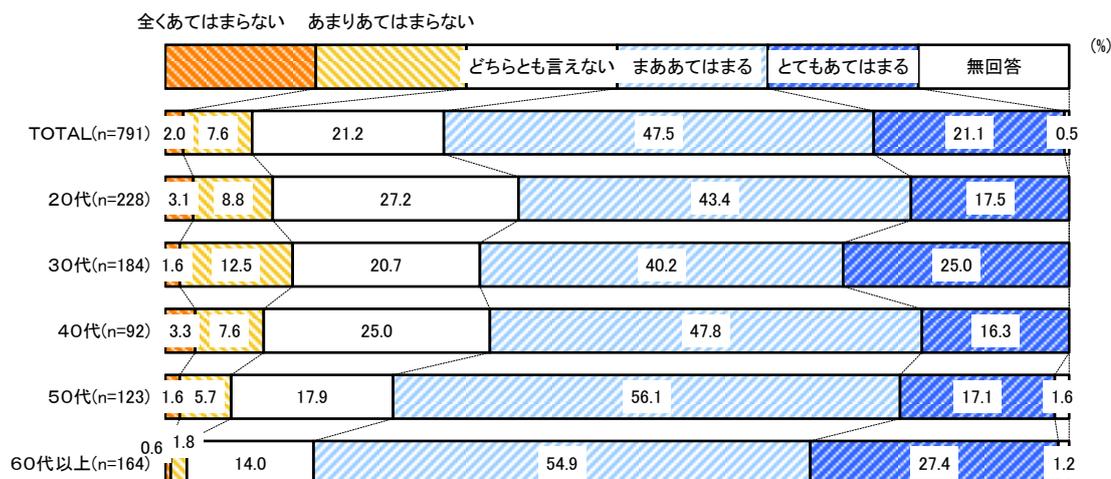
図II-2-30 在学時の一橋大学評価 D) 授業・教育システムについて 英語教育が充実していた年代



図II-2-31 在学時の一橋大学評価 D) 授業・教育システムについて 自分の視野を広げるのに役立つ授業科目があった年代



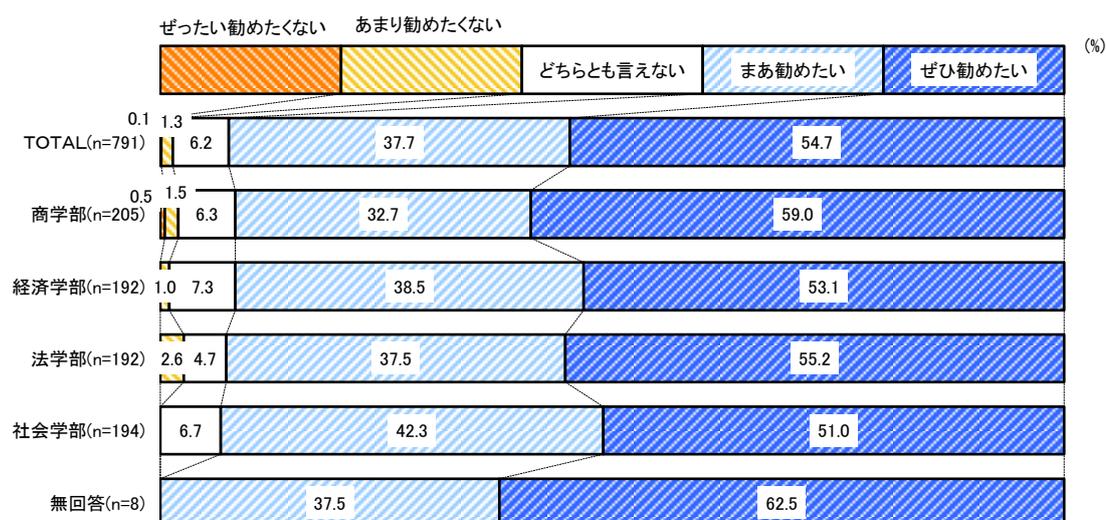
図II-2-32 在学時の一橋大学評価 D)授業・教育システムについて 授業中の私語は少なかつた年代



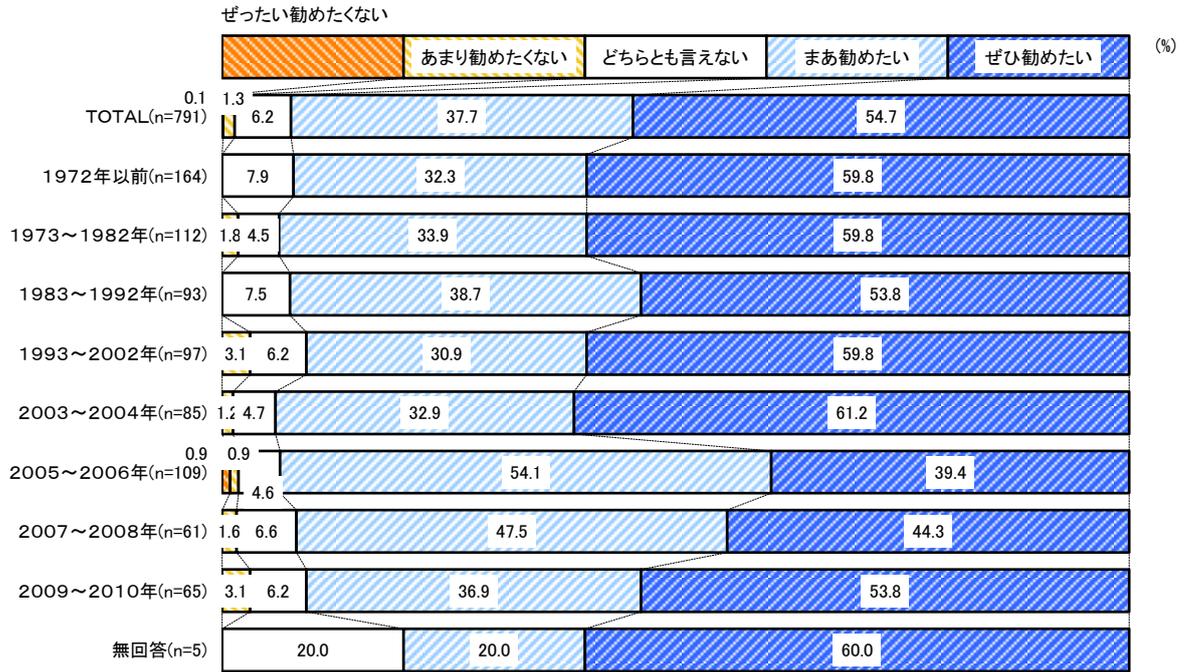
以上、卒業生が、自らの学生時代を振り返って、大学をどのように評価しているかを見てきた。その結果、いくつかの点で必ずしも満足することができない点がありはしたものの、総じて自身の大学生活に対して満足している様子を理解することができた。

では、卒業生たちは、現時点において、一橋大学を、自身の知人・家族に進学を推奨するに値する大学として評価しているのだろうか。一橋大学の他者推薦度をたずねたアンケート結果によると、90%を超える卒業生が、一橋大学を他人に推薦できると回答している。このような傾向は、学部・卒業年次・年代及び男女の如何によらず、一般的に見られるものである。ただ、女性よりも男性が、若い世代よりより年齢の高い世代の方が、より強い推薦意向度を有しているように思われる。

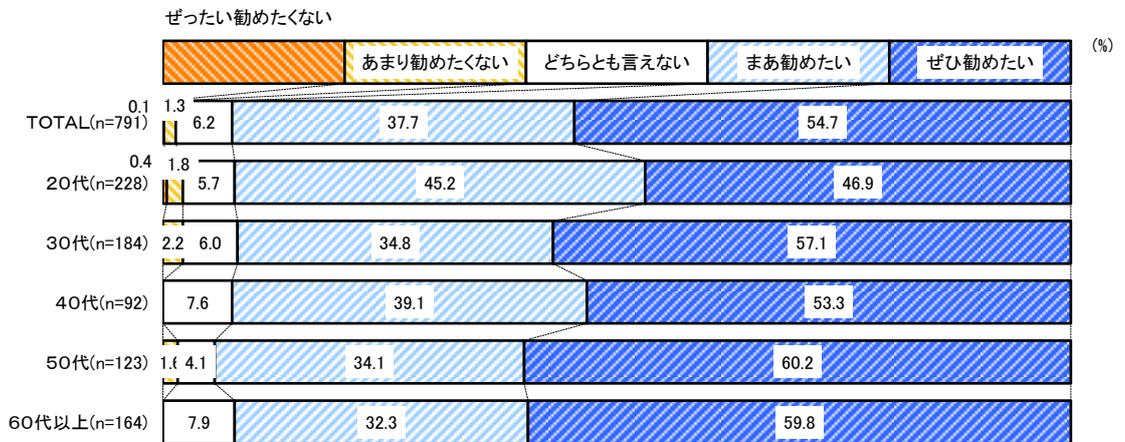
図II-2-33 一橋大学推薦意向度 卒業学部



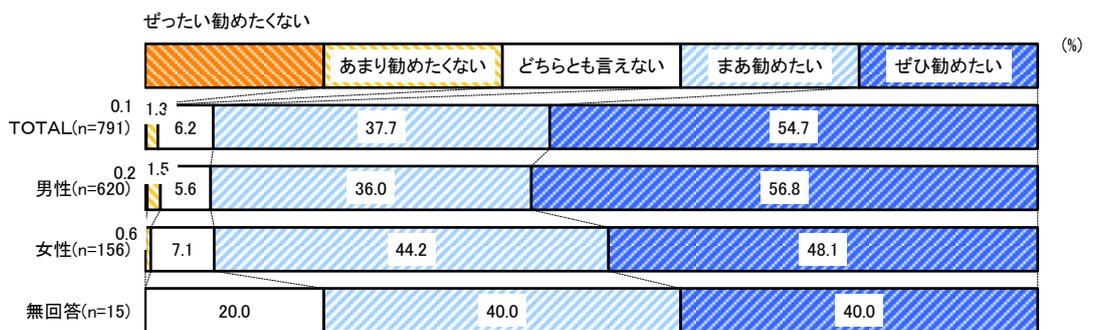
図II-2-34 一橋大学推薦意向度
卒業年次



図II-2-35 一橋大学推薦意向度
年代



図II-2-36 一橋大学推薦意向度
性別



3 各学部における学部教育に対する評価と課題

(1) 商学部

① 学部教育概要

1875年（明治8年）、「商法」（商業の方法）を学ぶ場として「商法講習所」が、渋沢栄一や森有礼などにより東京の銀座尾張町に開設され、日本経済にとって、企業経営・商業を体系的に学ぶことが重要であるという認識の下に、本学が成立した。

商学部は、経営学科及び商学科の2学科から成るが、その伝統を受け継ぎ、この重要な使命を果たすべく日々努力を重ねてきている。

情報技術の発達や国際分業の進展、科学技術と産業界の密接な結びつきなど、今日の産業社会はますます複雑化し、高度な知識社会化を経験している。このような複雑化・知識社会化が進む世界の中で、わが国の経済が発展し、また、アジアや世界経済の発展に貢献していくためには、熱い使命感のみならず、客観的な分析力と深い思考力を兼ね備えた人材が必要である。商学部は、世界経済の発展に貢献しようという熱い使命感をもつ人々に対して、冷徹な分析力と深い思考力を重視した教育を提供している。

また、商学部においては、そのような人々に提供する知識を常に新たに生み出すための研究を活発に行っている。複雑化する知識社会の中で、その本質を解明する高度な研究と、その研究成果を基盤に置いた高度な教育を両輪として回して、日本と世界に貢献することを進めている。

商学部は、経営学、会計学、ビジネス・エコノミクス、マーケティング、金融論、イノベーション、産業文化、経営基礎科学の八つの講座から構成されている。

このうち、商学部の専門教育課程における教育プログラムの中核を構成するのは、「ア 経営学」、「イ 会計学」、「ウ マーケティング」、「エ 金融論」の四つの領域である。

ア 経営学

経営学は、企業を直接的な対象として、その活動を考察する領域である。ここでは、「望ましい成果を生み出す企業経営とは、どのようなものなのか」、「社会において企業はどのような存在であり、経営者や企業はどのように行動すべきか」といったことが、基本的な問いとなる。学部教育専門科目としては、企業経営を全体的な視点から考察する「経営戦略論」、「経営組織論」、「企業社会論」や、各企業における特定の機能について考察する「財務管理論」、「生産システム論」、「労務管理論」、「イノベーション・マネジメント」、企業を歴史的な観点から考察する「経営史」、専門的な研究・調査方法を学ぶ「ビジネス・リサーチ」などが開講されている。

イ 会計学

会計は、企業の活動を「資本」の側面から捕捉し、財務諸表をはじめとする情報に集約し、企業内外の情報利用者に対して伝達するという一連のプロセスで構成されており、いわばビジネスの共通言語としての機能を果たしている。会計学では、「利用者のニーズに適合した情報とはどのようなものか、また、それをどのように作成するのか」、「金額的に表現された会計数値を通して、その背後にある企業活動をどのように読み取るのか」、「会計情報は、どのような経済的帰結をもたらさうのか」といった課題を扱う。学部教育専門科目として、会計情報の作成やそのためのルールを学ぶ「簿記システム論」、「財務会計論」、「原価計算」、会計情報の利用や経済的帰結、それらを支える補完的な仕組みなどを学ぶ「財務諸表分析」、「監査」、「管理会計論」などが開講されている。

ウ マーケティング

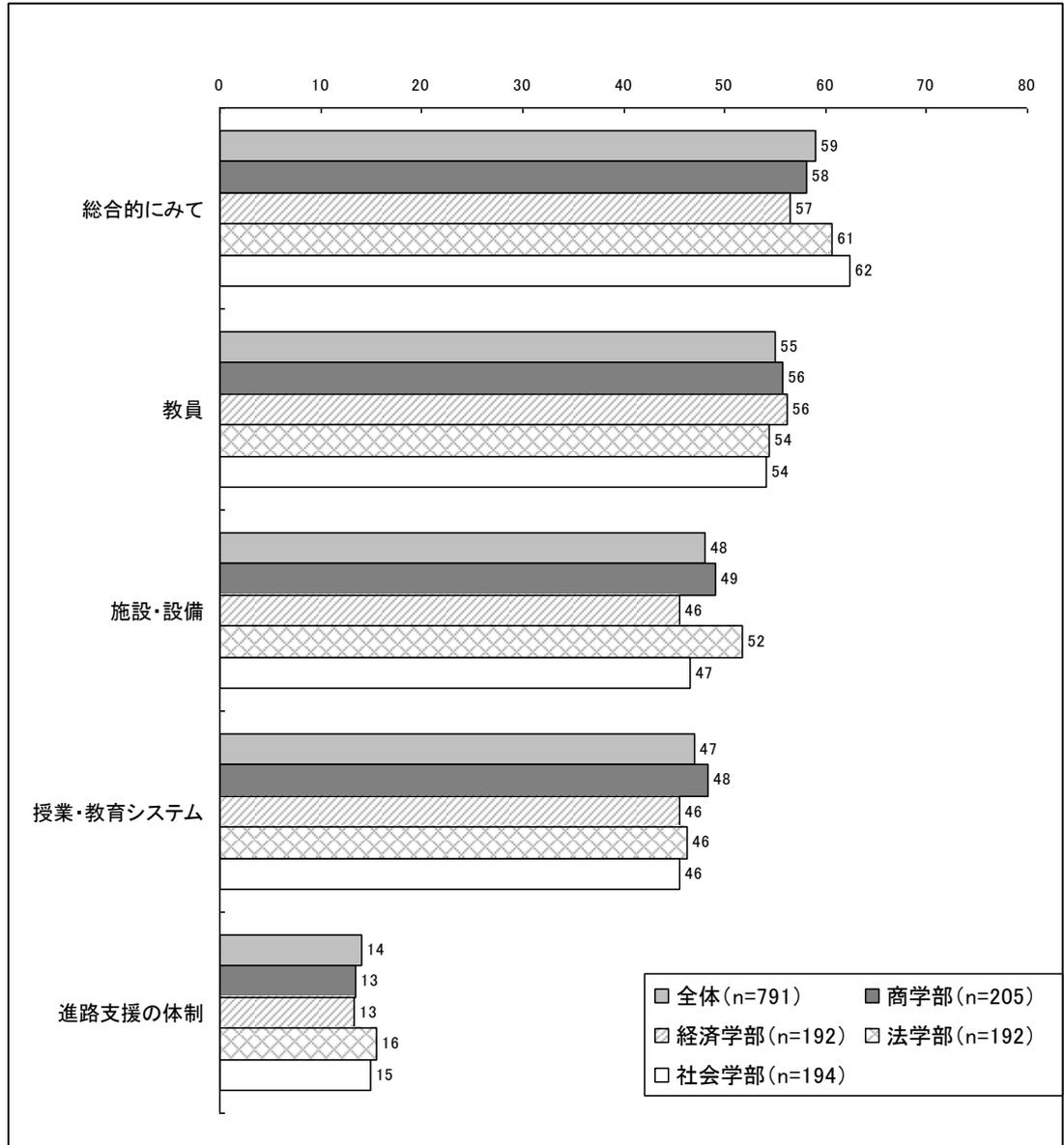
マーケティングは、企業の活動を、「顧客」の側面から捉える。企業の生み出す製品やサービスが顧客にとって価値のあるものとなるよう、顧客ニーズを知るための情報を集め、分析し、ニーズにあった製品やサービスを作り、その魅力を知らせ、顧客のもとに届ける一連のプロセスに関する学問である。「顧客のニーズを知るための情報をいかに収集して分析したらよいか」、「多様なニーズを持つ異なった顧客のうち、どのようにしてターゲットを定めたらよいか」、「競合する他社に対して自社の製品・サービスの魅力を訴求するにはどうしたらいいのか」、「様々な市場の違いをどのように分析したらよいか」といった問題を取り扱う。

エ 金融論

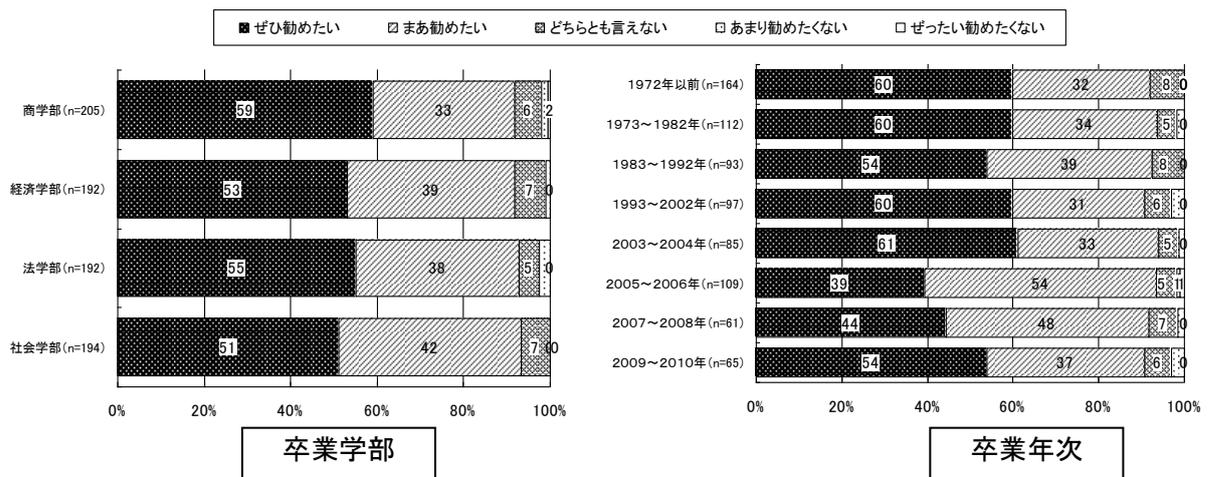
金融論は、個人・企業・政府・金融機関等、あらゆる経済主体の活動を、資金循環という視点から分析し、自由化と国際化が進む金融・資本市場の制度や政策を研究対象とする。

② 大学全般に対する総合満足度と他者推奨度

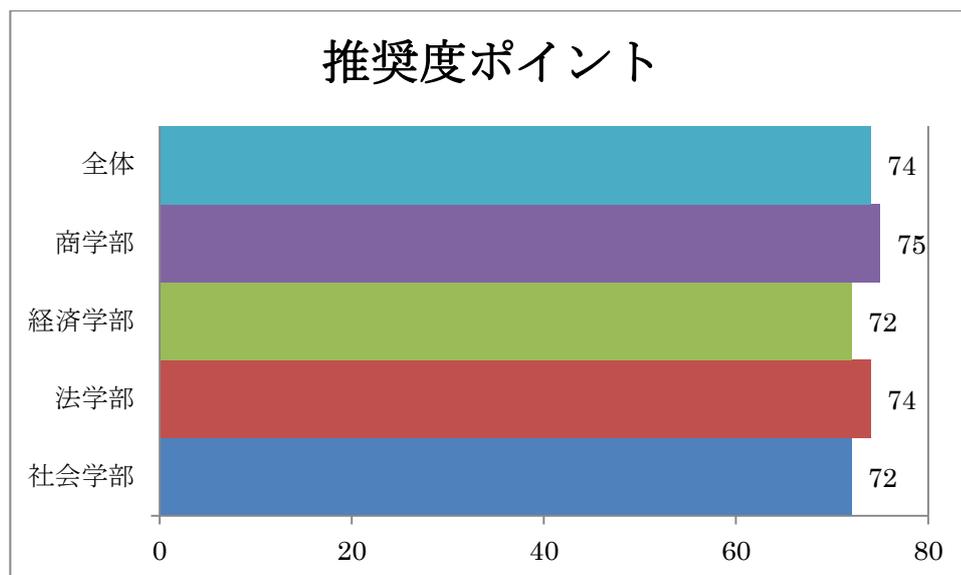
<卒業学部別>



卒業生の大学に対する総合的な満足度を見ると、商学部の学生は、全学部の平均とほぼ同じ傾向が見て取れる。その内容を見ても、「教員」に対する満足度、「施設・設備」に対する満足度、「授業・教育システム」に対する満足度、「進路支援の体制」に対する満足度のいずれも、全学平均と1ポイント以内の違いである。しいて言えば、「授業・教育システム」に関しての満足度は、全学部の中でも特に高い。他方で、進路支援体制については若干不満があるだろう。

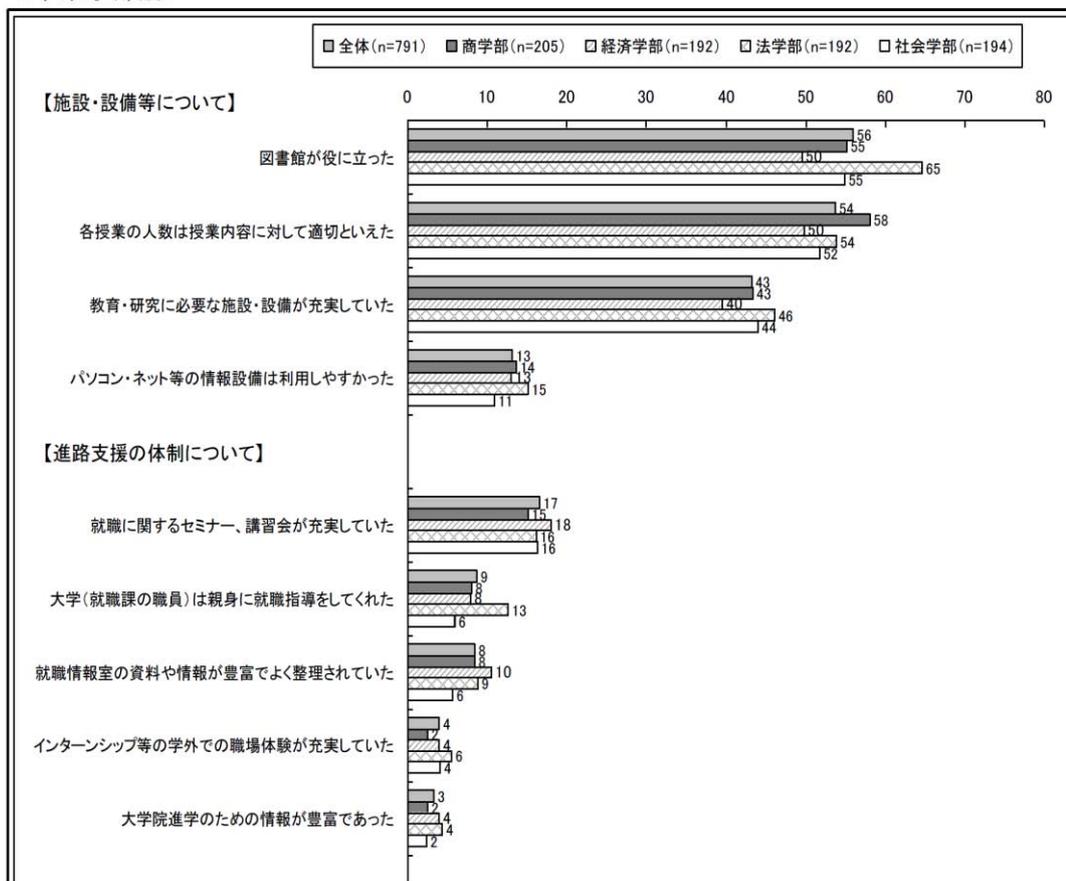


後輩や友人の姉妹，子どもに対して「一橋大学への進学を勧めたいか」どうかたずねた質問の回答を見ると，いずれの学部の卒業生でも非常に多くの方が勧めたいと答えている（平均73ポイント）が，商学部では75ポイントに達して，全学の中でもっとも勧めたい程度が高い。



③ 教育と授業・教育システムに対する満足度
次のグラフを見ていただきたい。

<卒業学部別>



「設備・施設等について」

まず、「図書館が役に立った」という意見は法学部の卒業生が突出して多く、商学部はそれに次いで高く評価していて、全学平均とほぼ同じ結果である。

「各授業の人数は授業内容に対して適切といえた」については、商学部の卒業生の満足度が他学部と比べて高い。数年前から全商学部教員の授業負担を増やす形での改革が進められているが、こういった商学部の教育改革の方針とこの結果は無関係ではないと思われる。

一方、「教育・研究に必要な施設・設備が充実していた」、並びに「パソコン・インターネット等の情報設備は利用しやすかった」についての商学部の卒業生の評価は、全学平均とほぼ同程度である。

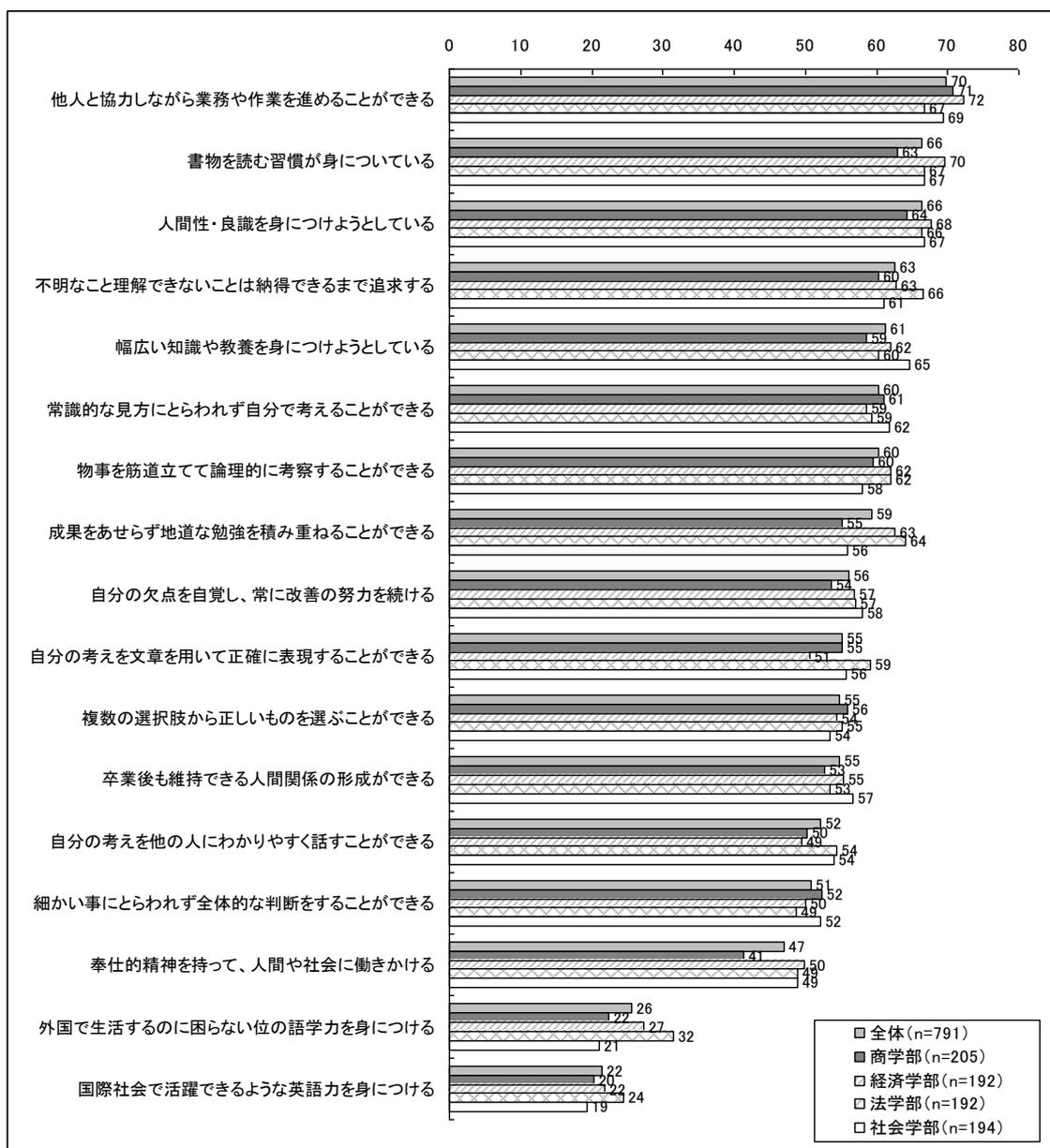
「進路支援の体制について」

この点については、商学部においてあまり芳しい結果であったとはいえない。グラフを見ていただければわかるように、「就職情報室の資料や情報が豊富でよく整理されていた」ことについての満足度が全学平均とほぼ同じであるだけで、それ以外の項目、例えば「就職に関するセミナー、講演会が充実していた」、「インターンシップ（企業研修）等の学外での職場体験する機会が充実していた」については全学平均を下回っている。その意味において、商学部では進路支援体制についてもう少し充実を図ったらよいと思う。

④ 学習への取組状況

この点は、次の能力修得度についての評価から見てみることにしよう。講義，ゼミ等から習得したものが大きければ大きいほど熱心に学習に取り組んだといえることができると考えられるからである。

<卒業学部別 能力習得度>



卒業生の自己評価としては、「他人と協力しながら業務や作業を進めることができる」、「常識的な見方にとらわれず自分で考えることができる」、「複数の選択肢から正しいものを選ぶことができる」、「細かいことにとらわれず全体的な判断をすることができる」という項目について、全学平均を上回った。これらの項目は、主にゼミナールを通じての学習によって身につくものについての評価が高かったということを示すものである。したがって、商学部の学生はゼミナールに積極的に取り組んだといえることがいえるように思う。

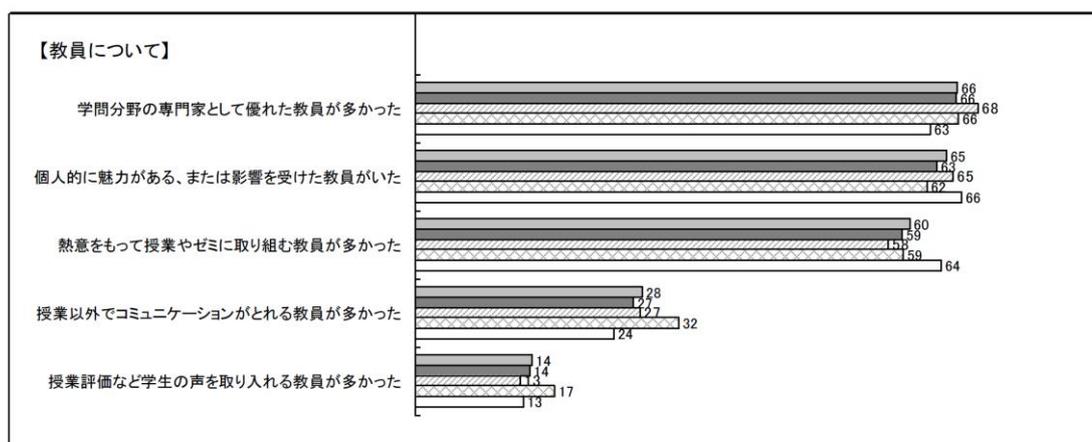
一方、「書物を読む習慣が身についている」はあまり身につけていないようであり、「人間性・良識を身につけようとしている」態度、「不明なこと、理解できないことは

納得できるまで追求する」という考え方、「幅広い知識や教養を身につけようとしている」態度などは他学部の卒業生ほどには身につけていない、という自己評価である。学習への取組方として、すぐに役に立つとは限らないものも身につけようとする態度、心構えが必要であるといえるのではないかと。

なお、外国で生活するのに困らないくらいの語学力、あるいは国際社会で活躍できるような英語力について、商学部の卒業生はあまり習得できていない、という結果も得られており、語学に対する取組方については問題点がある可能性がある。しかし、この点については数年前から改善を図っており、商学部の学部2年生に必修の前期ゼミ4単位を課している。この前期ゼミでは1年間にわたり英書講読を行っているため、この問題点の改善が期待できるだろう。

⑤ 教員に対する評価

<卒業学部別>

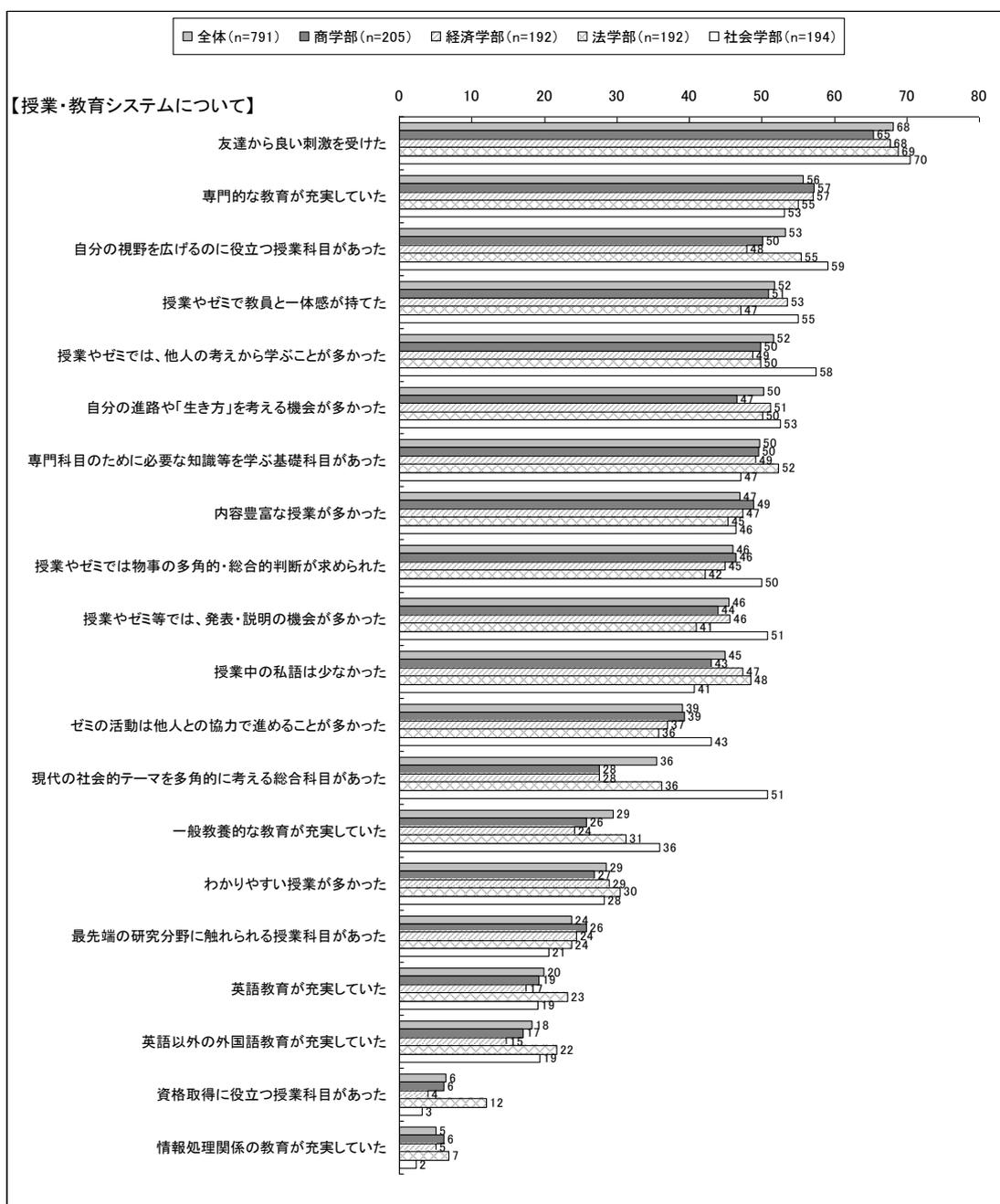


「教員について」

全学平均に比べ、2項目についてはほぼ同程度の評価であり、三つの項目については1ポイントほど全学平均を下回っている。しいて考察すれば、下回っている3項目は、主に教員と学生との個人的なコミュニケーションが増えることにより改善される項目であるため、そうした点の改善をどのようにはかるか、という点が今後の検討課題かもしれない。

⑥ 授業・教育システムなどに対する評価

授業・教育システムについての結果を見ると、商学部の卒業生の大きな特徴は、「友達から良い刺激を受けた」という回答が他学部と比べて少ない、という点であろう。



「専門的な教育が充実していた」、「内容豊富な授業が多かった」、「最先端の研究分野に触れられる授業科目があった」、「情報処理関係の教育が充実していた」という項目については全学平均と比較して、少しであるが高い評価を得られている。商学部においては、教員の専門的な授業内容についての評価が高い、ということがいえるであろう。

一方、「専門科目のために必要な知識等を学ぶ基礎科目があった」、「ゼミの活動で、他人との協力ですすめることが多かった」、「授業やゼミでは物事の多角的・総合的判断が求められた」、「資格取得に役立つ授業科目があった」という項目では全学平均とあまり変わらない評価であり、それ以外の項目では、全学平均をいくらか下回っている。

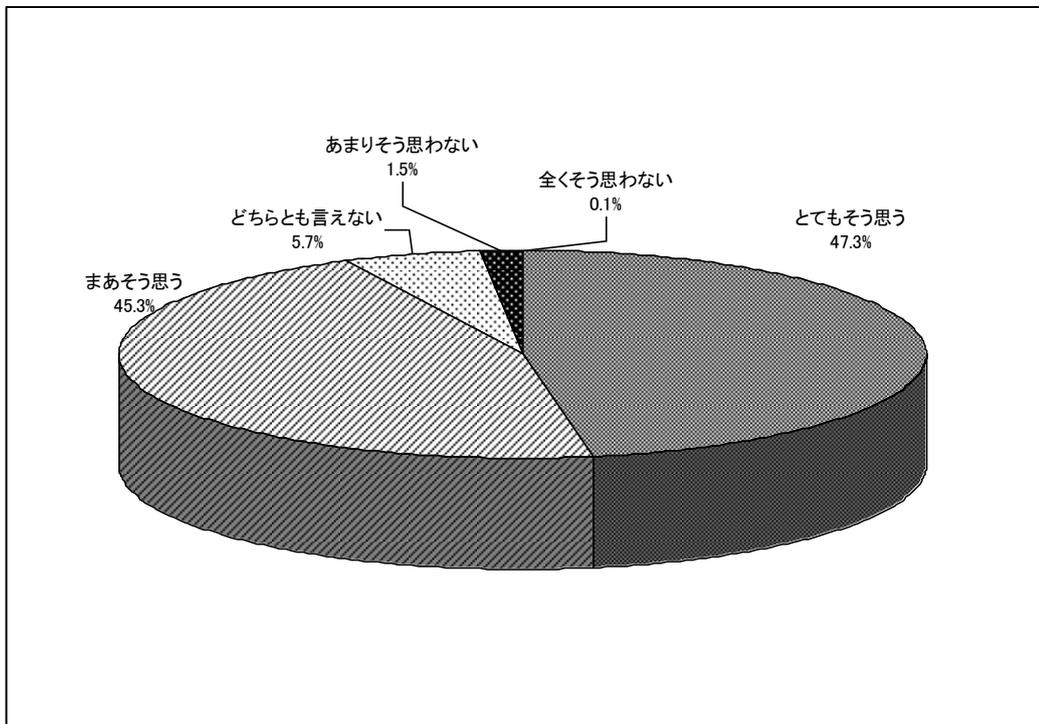
る。

全体として、自分自身を人間的に向上させたり、他人との学問的なコミュニケーションを通じて大学生らしい充実感を得るといった点について、学生が求めている部分が十分には得られてない、ということになる。

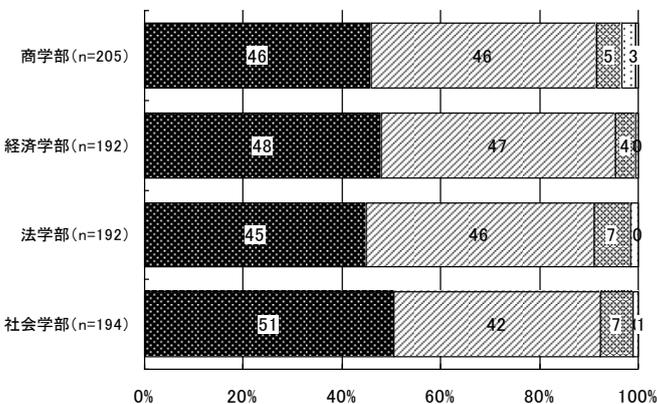
この平均を下回っている諸項目について、大学・教員サイドの努力によって改善できる点も数多くあると思われる。例えば、授業での発表の機会を増やす、授業中の私語をもっと厳しく禁止する、一般教養や英語やその他の語学の授業をさらに充実させる、わかりやすい授業を増やす等である。しかし、学生自身の努力によって解決できる点も含まれており、そうした点を自分で発見・解決できるための教育というものを教員サイドは意識するべきであろう。

⑦ 大学生生活で身についたこと

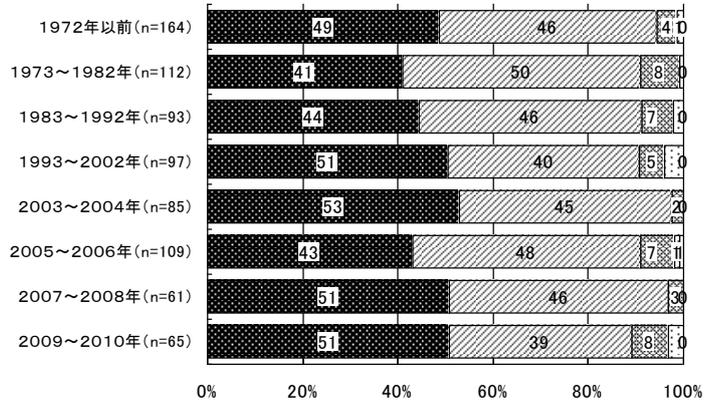
<全体>



■ とてもそう思う □ まあそう思う ▨ どちらとも言えない □ あまりそう思わない □ 全くそう思わない



卒業学部

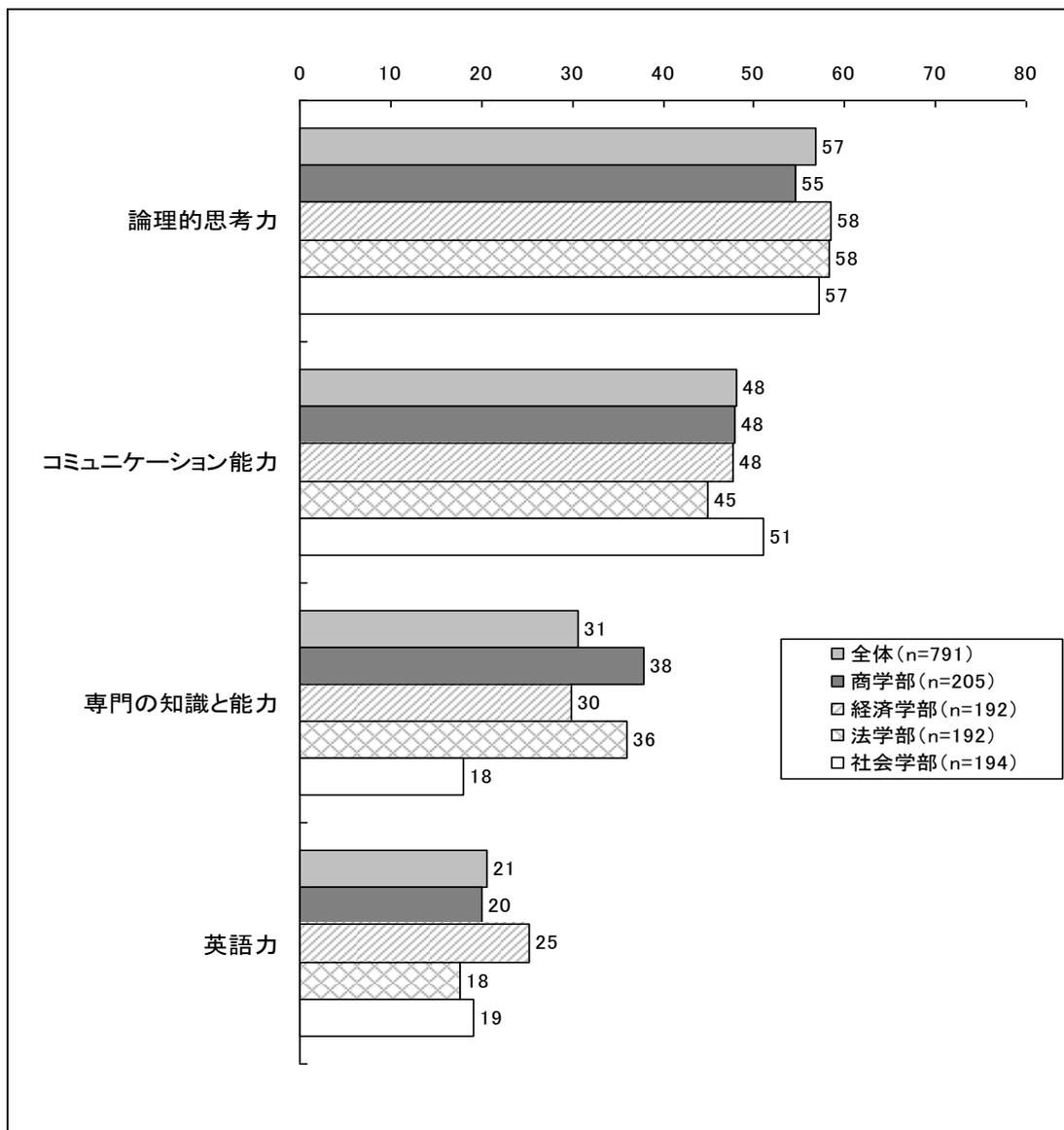


卒業年次

卒業生の「一橋大学での学びによる人間的な成長」について見てみると、人間的な成長が得られたかどうかについて「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせると92%に達しており、その意味で人間的な幅、資質が身についたという自己評価が得られているものと考えられる。

「④ 学習への取組状況」で述べたように、いくつかの点では自己評価が低い側面があるかもしれないが、全体としては「一橋大学での学びによる人間的な成長」を肯定的に評価しているのであろう。

<卒業学部別>



「現在の仕事を遂行する上で、在学中に獲得した知識や技能をどのくらい使っているか」という質問への回答では、「論理的思考力」、「英語力」については全学平均に比べやや低い結果となっており、「コミュニケーション能力」は全学平均と同程度活用するという評価が得られている。「論理的思考力」、「英語力」を在学中にさらに身につけるような教育が望まれる。

なお、「専門の知識と能力」については、他学部と比較しても活用しているという評価が突出して高いようである。卒業生は、大学生活で身につけた専門の知識と能力を現在活用している、という評価であった。

(2) 経済学部

① 学部教育概要

経済学部では、講義とゼミナールを通じて、学生が人と社会について経済学的な見方・考え方を身につけられることを教育の目的とする。

経済学は、数学や統計学を基礎として、社会現象の本質を経済的な側面に着目しながら理論化し、また、データや資料でその理論を検証する。アプローチや手法も体系化されているため、基礎から着実に学習をすすめていくことができる。したがって、経済学部の講義科目は授業内容のレベルにより、100番台入門科目、200番台基礎科目、300番台発展科目、400番台大学院科目に分類されている。100番台と200番台には必修コア科目を設定し、経済学部の学生として習得すべき必須知識を必修科目の履修を通じて、学べるようにしている。

100番台コア科目には、経済学入門、経済思想入門、統計学入門、経済史入門の四つがあり、すべて必修。その後200番台の基礎科目へと進んでいく。300番台及び400番台科目では、理論、統計、応用、歴史などの幅広い専門分野について多様な科目が提供されている。

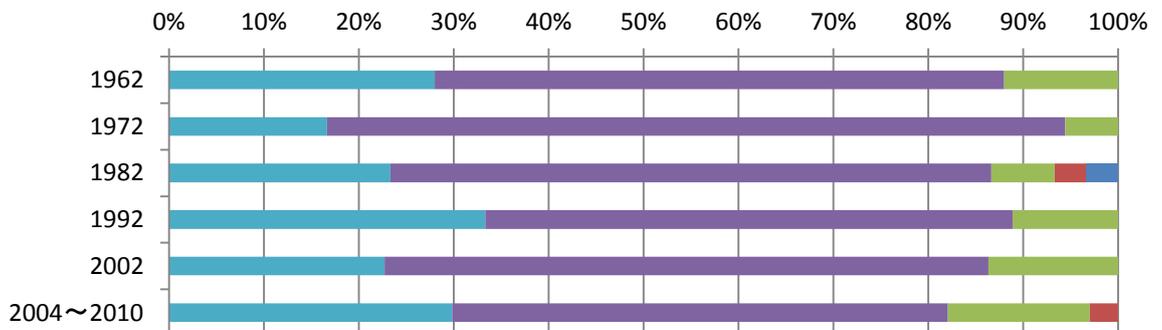
カリキュラム編成にあたっては、経済学部を出て仕事をするのではなく、経済学を使って仕事をしようという学部・研究科から学生へのメッセージがこめられている。

② 大学全般に対する総合満足度と他者推奨度

卒業生の本学への総合満足度は以下のグラフにあるとおり、概ね良好な評価が得られていることが伺われる。ただし、本アンケート調査の回答率も鑑みながら、肯定的な評価をもっている卒業生が積極的に調査に回答し、そうでない卒業生の声をうまくくみとれていない可能性にも注意したい。

満足度の傾向は、他学部と比較しても、有意な差はみられなかった。

経済学部卒業生 卒業年次別 大学全般に対する総合満足度

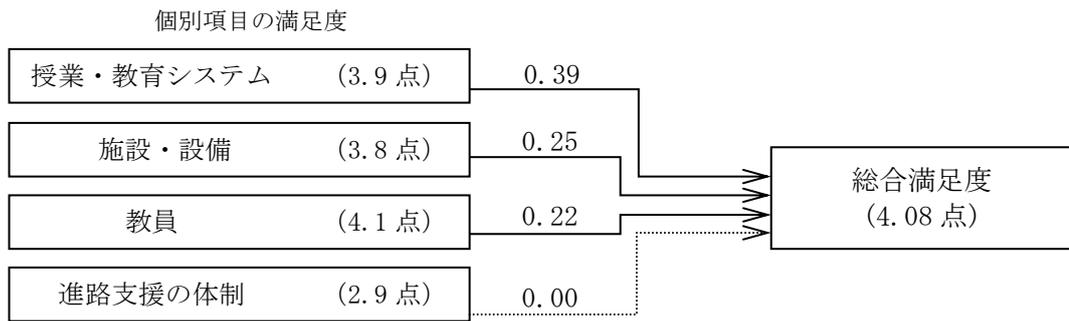


■ とても満足 ■ まあ満足 ■ どちらとも言えない ■ あまり満足していない ■ 全く満足していない

アンケートでは満足度を次の5項目にわたって、それぞれ5段階でたずねている。

- 1) 施設・設備
- 2) 進路支援の体制
- 3) 教員
- 4) 授業・教育システム
- 5) 総合的にみて

そこで、5番目の「総合的にみて」の満足度が、その他四つの個別項目の満足度に依存するとみなして、線形回帰（重回帰）をすると下図のような結果となった。なお、順序型プロビットがより適しているが、係数解釈のわかりやすさを考え線形回帰とした。矢印の上にならされている数字は回帰係数で、その個別項目（1～5）の評価が1点高くなるとそれが総合満足度（1～5）を平均的に何点押し上げる効果があるかを示している（ $N=186$, 修正 $R^2=0.558$ ）。各質問文末のカッコ内の数字は、その評価項目への満足度の平均点である。

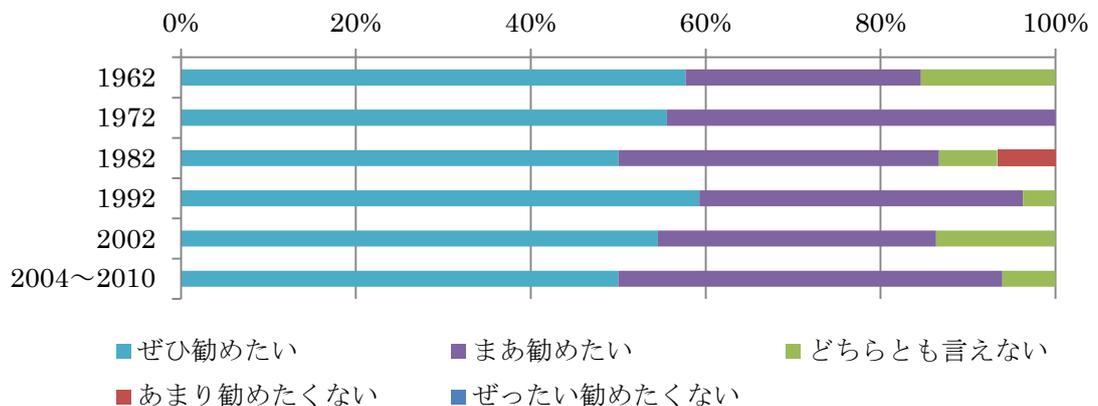


係数の大小では、授業・教育システム>施設・設備>教員と並んだ（いずれのp値も0.001未満で統計的に有意）。また、進路支援の体制と総合満足度との間に統計的に有意な関係はみられなかった。これは、進路支援体制が充実してきた近年の卒業生を対象にしても同様であるが、他学部の卒業生で同様の分析をしたところ、進路支援体制の満足度と総合満足度との間に統計的に有意な関係がみられた。ただし、これ以上の進路支援体制の拡充が経済学部卒業生の総合満足度に結び付かないということではなく、あくまで現状分析である点には留意したい。

また、授業・教育システムへの満足度が3.9点にすぎず改善の余地がある。しかも、それが総合満足度に与える影響も大きいことから、授業・教育システムの満足度をあげることで総合満足度を高める施策が有効であろう。各個別項目については以下で改めて詳しくみる。

次に、「一橋大学に進学することを他人に勧めたいと思うかどうか」という質問への回答状況「他者推薦度」を概観する。

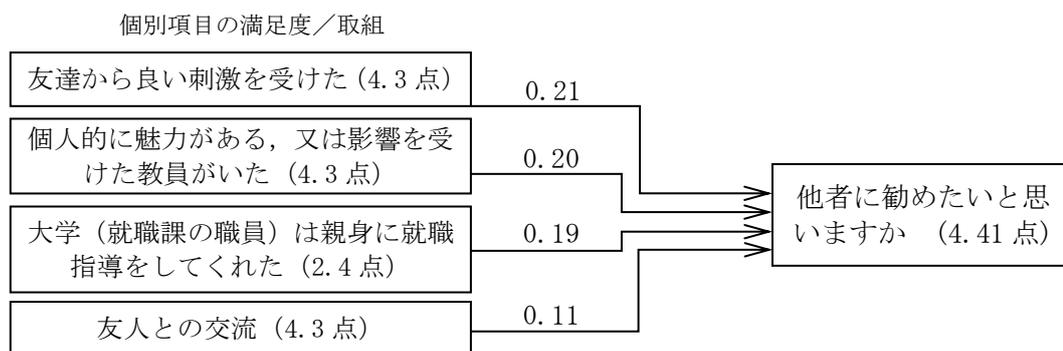
経済学部卒業生 卒業年次別 他者推薦度



ここでは、「一橋大学で取り組んだこと」11項目のなかから推薦度を左右する要因を探した（質問内容は以下の④の図に掲載）。有意水準5%のステップワイズで変数を追加したところ、「友人との交流」及び「資格取得のための学習」が選ばれた（順序プロビットでも同様の結果を得た）。線形回帰式での係数はそれぞれ、0.21及び0.087であり、大学時代に取り組んだこととして「友人との交流」を記憶する卒業生ほど一橋大学を他者に勧める度合いが強くなる傾向がある。

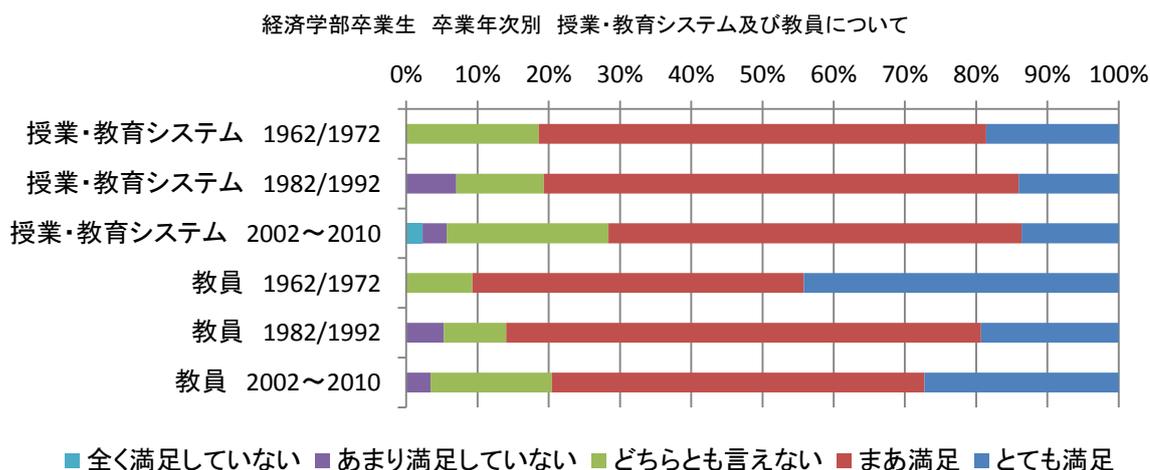
同様に、「一橋大学を卒業生のあなたの目で評価してください」にある34項目のなかから推薦度と関係の高い評価項目を探した（有意水準5%）ところ、次の3項目が有意であった。係数の大きい順に、「友達から良い刺激を受けた」、「個人的に魅力がある、又は影響を受けた教員がいた」、「大学（就職課の職員）は親身に就職指導をしてくれ

た」である。ここから読み取れるのは、大学時代によい人間関係をもったと記憶している卒業生ほど、一橋大学のことを他者（友人の弟妹やお子さん）にも勧めたいと思う傾向である。その思いは、必ずしも施設・設備や授業カリキュラムに左右されるわけではなく、むしろ、良い人間関係---友人、職員、教員との関係---が決め手となっていると考えられる。したがって、施設・設備や授業カリキュラムの改善は満足度にポジティブに影響するかもしれないが、それによって培われる人間関係があつてこそ大学の魅力につながる可能性も視野にいれる必要がある。4項目を説明変数にした回帰式の係数を下図に示す（N=167, 修正R²=0.284）。



③ 教育と授業・教育システムに対する満足度

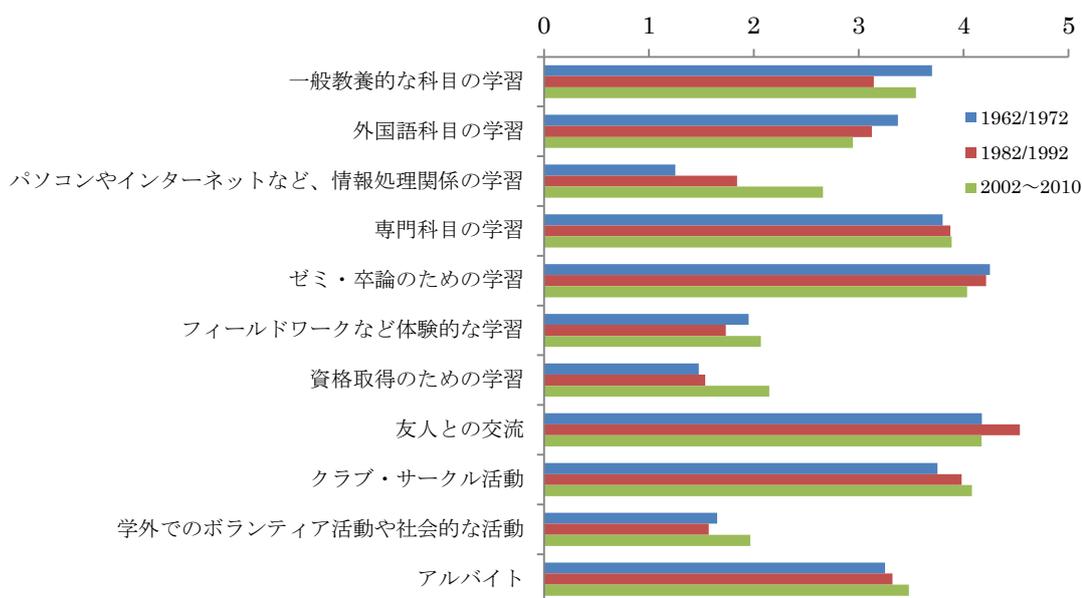
授業・教育システム及び教員に対する満足度は下図のようになる。回答者には特に不満をいだく人はいないものの、授業・教育システムについて「とても満足」と答えた回答者は15%に満たない。その一方で、教員についてはとても満足を選択した回答者の割合は27%にのぼる。教員への満足度は高いので、制度的枠組みの改善を続けることで、授業・教育システムへの満足度を引き上げる余地はあろう。以下の⑥で関連した評価項目を検討する。



④ 学習への取組状況

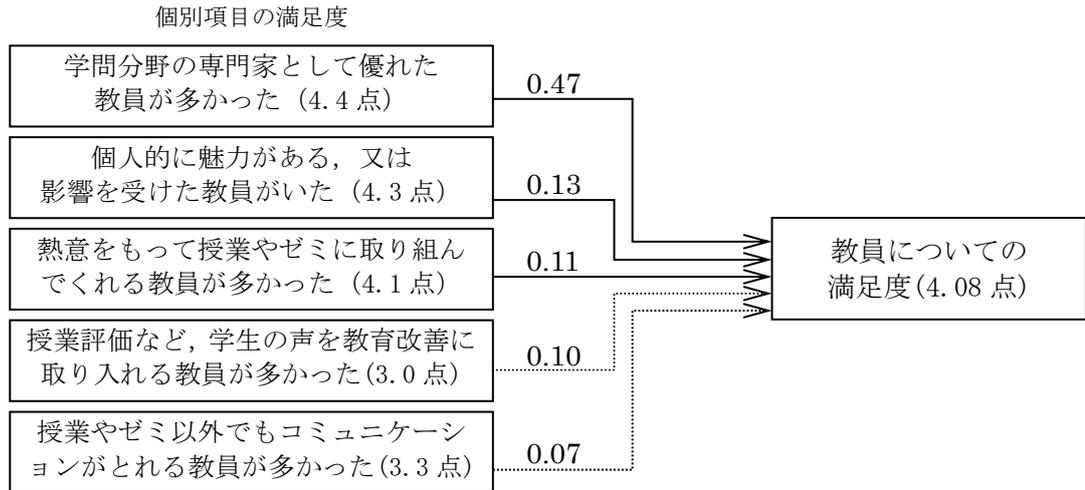
学生時代に取り組んでいたことをたずねている。質問内容は、下図にあるように、学習に関して7項目、課外活動に関して4項目の計11項目である。「とてもよく取り組んだ」を5点として5段階評価で回答していただいた。下図は各項目の平均評価を表している。取り組んだことの上位にあがるのは、「友人との交流」4.3点、「ゼミ・卒論のための学習」4.1点、「クラブ・サークル活動」4.0点、「専門科目の学習」3.9点である。学習への取組は、ゼミや専門科目の学習に関して高い。卒業年代による違いが見られる項目としては、「パソコンやインターネットなど、情報処理関係の学習」と「資格取得のための学習」の2項目であり、2000年度以降の卒業生の両項目への取組度合いが高くなっている。

他学部との違いがみられたのは、「フィールドワークなど体験的な学習」と「資格取得のための学習」である（順位和検定及び中央値検定でそれぞれ有意水準5%）。体験的な学習への取組について、経済学部の卒業生は1.95点（選択肢「あまり取り組まなかった」＝2点に相当）と評価しており、4学部のなかで一番低い。社会学部の卒業生は2.7点、商学部の卒業生は2.4点、法学部の卒業生は2.0点である。また、資格取得の学習への取組について、経済学部の卒業生は1.8点で他学部との差があるが、これは法学部の卒業生の2.7点が高いため、商学部・社会学部との違いはあまりない。



⑤ 教員に対する評価

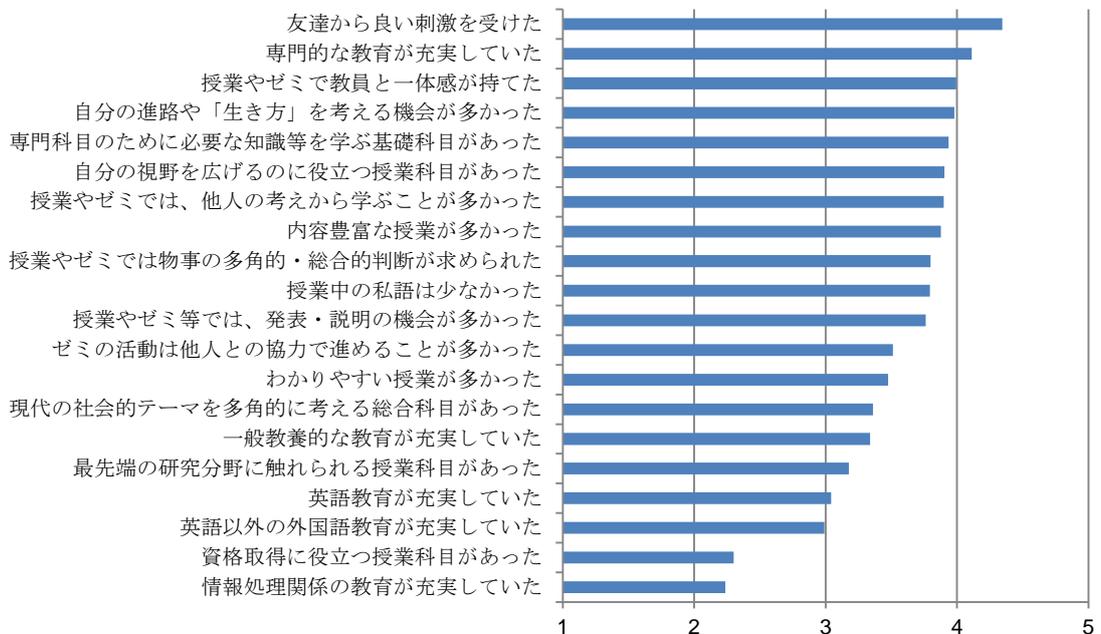
教員についての満足度は、③でみたように5段階評価の平均4.08点で、概ね満足しているという回答を得た。そのほかに、アンケートでは教員について5項目にわたって詳しくたずねている。質問内容は、以下の図の左側に書かれている。教員についての満足度が、それら五つの個別項目の満足度に依存するとみなして、線形回帰をすると下図のような結果となった。矢印の上には書かれている数字は回帰係数で、その個別項目の評価が1点高くなるとそれが総合満足度を平均的に何点押し上げる効果があるかを示している (N=184, 修正R²=0.439)。最後の質問文末のカッコ内の数字はその質問への回答の平均値である。5項目のうち、図中の4番目と5番目の項目の係数は5%水準で統計的に有意でない (p値はそれぞれ0.094及び0.132)。



教員が研究者・専門家として優れていることが、教員についての高い満足度につながっていると伺われる。また、教員についての満足度向上に直結するかは定かでないものの、「授業評価など、学生の声を教育改善に取り入れる教員が多かった」の評価が平均3.0点（選択肢「どちらとも言えない」に相当）にとどまっており、今後の改善の余地がある。

⑥ 授業・教育システムなどに対する評価

本調査票では、「授業・教育システムなどに対する評価」を、大学満足度のなかの個別項目として、また、大学を評価する項目として、2か所でたずねている。後者では、授業・教育システムについて20項目にわたって5段階評価を求めている。経済学部卒業生から得られた回答の平均値が図に示されている。

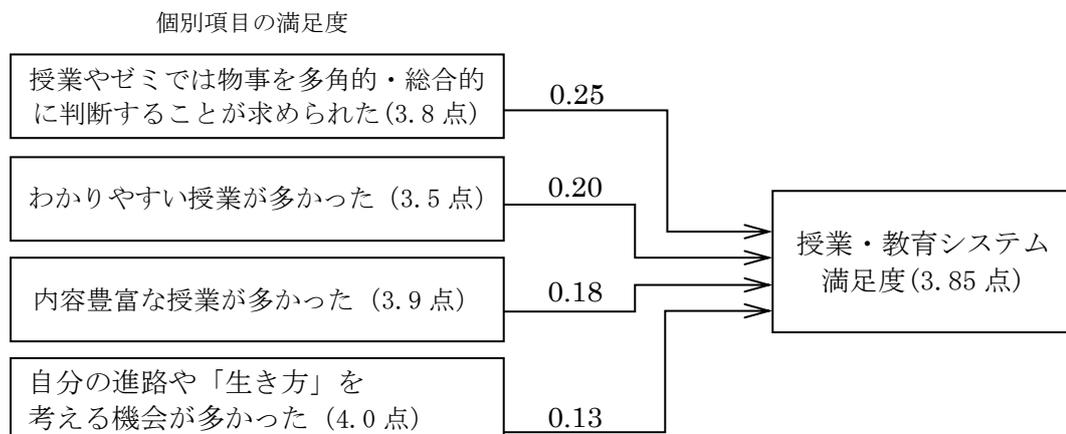


他学部と比較して統計的に有意な差異がみられたのは、それら20項目中4項目あり(中央値検定有意水準5%),いずれの項目でも経済学部卒業生の評価は低かった。他の項目の平均評価は、他学部とほとんど差がなかった。

	経済学部	他学部
一般教養的な教育が充実していた	3.34	3.51
英語以外の外国語教育が充実していた	2.99	3.16
自分の視野を広げるのに役立つ授業科目があった	3.90	4.06
現代の社会的テーマを多角的に考える総合科目があった	3.36	3.65

4項目にあげられている一般教養教育や外国語教育などは全学共通教育科目として学部の垣根なく提供されているので、それらへの取組が低かったというのは、経済学部生の履修傾向を反映したものと考えられる。また、平均評価で他学部との差がもっとも大きかったのが「現代の社会的テーマを多角的に考える総合科目があった」という項目であり、そして、「自分の視野を広げるのに役立つ授業科目があった」についても卒業生からの評価が低かったことには注意が必要だ。「社会科学の総合大学」を謳う本学の教育理念に照らせば、卒業生には身につけるべきなのは、経済学の知識にとどまらず、幅広い視野をもって現代社会の問題を多角的に考えることのできる教養である。今後のカリキュラムや授業内容の編成にあたっては、この2項目の評価値が他学部に比べ低いことに留意する必要がある。

次に、授業・教育システムについて個別にたずねた20項目の評価と、授業・教育システムの満足度との関係を調べた(これまでと同様に線形回帰式を前提として、有意水準5%としてステップワイズに変数を追加)。その結果、下図にあげた4項目が統計的に有意であることがわかった(N=184, 修正R²=0.388)。そこから読み取れるのは、授業がわかりやすく、そして内容豊富であるという、教育機関としての基本が授業・教育システムの満足度に大きく影響する点である。また、授業やゼミでの学習を通じて、物事を多角的・総合的に判断することが求められたという評価も重要である。この2点は教員が常日頃から念頭においており、FD活動などを通じて教員は教育方法・手法の向上に努めている。今後もこれらの活動を継続し、授業・教育システムの満足度を高めていくことの重要性が本調査からも再確認できる。



⑦ 大学生活で身についたこと

本調査では、業務遂行や大学教育に関連性のあるスキルとして17項目をとりあげ、それぞれについて、現在の業務を遂行していく上で必要か(絶対に必要である=3点, 必要である=2点,それほど必要ではない=1点),また,大学卒業時に身につけてい

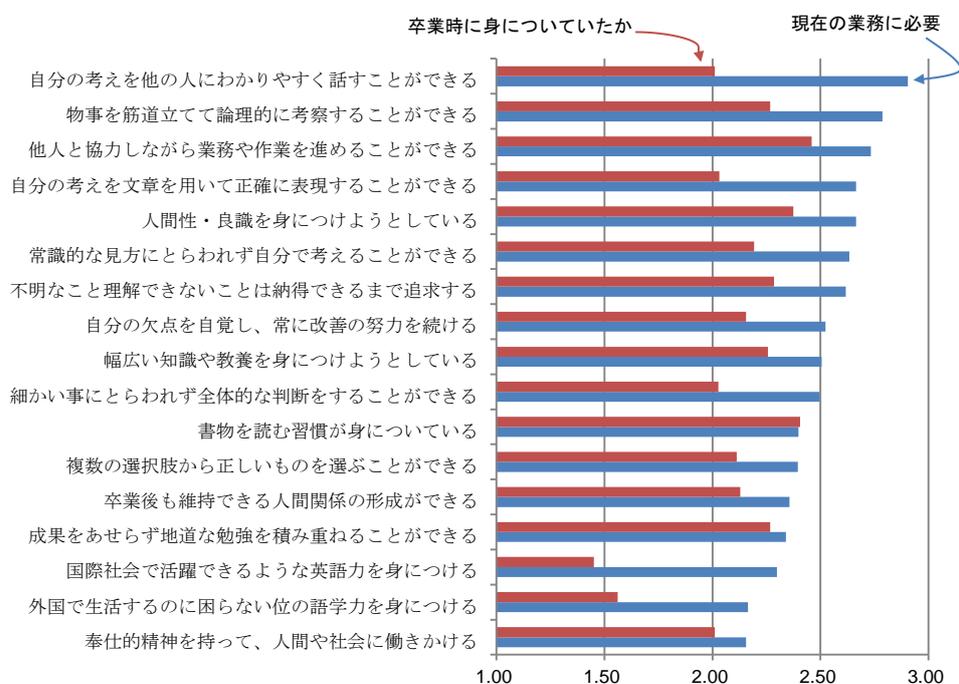
たか（身についていた＝3点，どちらも言えない＝2点，身につけていなかった＝1点）をたずねた。経済学部卒業生の回答の平均値が以下のグラフに示されている。なお，業務遂行に必要なだとされた順に質問項目を並び替えた。

自分の考えを他人にわかりやすく話す（2.9点），物事を論理的に考察する（2.8点），他人と協力しながら業務を進める（2.7点），自分の考えを文章で正確に表現する（2.7点）といった項目を，現在の業務遂行にとって「絶対に必要である（3点相当）」とした回答者が多く，これらが上位にあがった。

ところが，そうしたスキルが「卒業時に身についていた」とはいえないと回答者自身は感じている。特に，自分の考えを話したり書いたりして他人に伝えるスキルが卒業時に身についていたかという質問への回答は，それぞれ平均値で2.0点であり，「どちらも言えない（2点相当）」と回答者の多くは感じている。身についていた順に17項目を並べると，語学力についての2項目が最下位に並び，自分の考えをわかりやすく話すスキルは15位である。自分の考えをわかりやすく話すことは業務遂行にあたって最も必要であるにもかかわらず，大学卒業時には最も身につけていなかったスキルの一つにあがってしまっている。こうしたスキルは，大学のゼミや卒論のための学習を通じて培われうるものだが，必ずしも卒業時に満足のいくレベルに達していない可能性が大きい。ここでたずねた習得具合はあくまでも主観的評価であるので，必ずしも他人からの評価に一致するわけではない。だが，今後の授業・カリキュラムを編成するにあたって，業務遂行に絶対必要でありながら，習得具合が低いスキルの一つが話すスキルであることにも注意する必要がある。

一方，他人と協力しながら業務を進めるためのスキルは，卒業時にある程度は身につけていた（回答平均2.5点）とみなしてもよいだろう。

また，他学部と習得具合を比較すると（順位と検定有意水準5%），1項目だけ有意な差が認められた。それは，自分の考えを文章を用いて正確に表現できるスキルの習得具合であり，他学部の卒業生の平均2.2点に対して，経済学部の卒業生は2.0点と低い。



次にこれらのスキルと，学生時代に「一橋大学で取り組んだこと」の関係を探りたい。身につけていた程度を被説明変数にし，取り組んだことの各項目を説明変数にし

て順序プロビットモデルで係数を推計した。水準5%で統計的に有意な変数を以下の表にまとめてある。表の左列には、業務に必要とされるスキルの上位5項目を並べた。

この表の見方は、例えば、「自分の考えを他の人にわかりやすく話すことができる」の行では、右列にある「専門科目の学習」や「友人との交流」に取り組んだ度合いが高いと回答した卒業生の方が、卒業時に「自分の考えを…わかりやすく話す」スキルが身につけていたと回答する傾向を意味している。

卒業時の身につけていた 「習得具合」	← 「習得具合」に影響している 「大学時代に取り組んだこと」項目
<input type="checkbox"/> 自分の考えを他の人にわかりやすく話すことができる	専門科目の学習、友人との交流。
<input type="checkbox"/> 物事を筋道立てて論理的に考察することができる	ゼミ・卒論のための学習。
<input type="checkbox"/> 他人と協力しながら業務や作業を進めることができる	友人との交流、クラブ・サークル活動、外国語科目の学習。
<input type="checkbox"/> 自分の考えを文章を用いて正確に表現することができる	(なし*)
<input type="checkbox"/> 人間性・良識を身につけようとしている	クラブ・サークル活動、一般教養的な科目の学習。

* ただし、他学部の卒業生の回答では、「一般教養的な科目の学習」への取組度合いが、自分の考えを文章を用いて正確に表現するスキル習得と関連がある。

これらのスキルについて、その習得具合と大学時代に取り組んだこととの間にわかりやすい対応関係がみられる。例えば、ゼミ・卒論のための学習に取り組んでいたと答えた卒業生ほど、論理的に考察するスキルが身につけていたと自覚している。同様に、大学時代には友人との交流によく取り組んだとする卒業生は、他人と協力しながら業務遂行するスキルは身につけていたと答えている。なお、下表左列の「習得具合」の質問は調査票の5頁目に、右列の「取り組んだこと」の質問は調査票の2頁目に記載されており、回答者自身が下表にみられるような対応関係を意識していたわけではないだろう。むしろ、大学時代に取り組んだことが、結果的に、その活動に関連深いスキルの習得に（あるいは習得したという実感に）つながったとも考えられる。

この表から読み取れるもう一つ重要な点は、「自分の考えを文章を用いて正確に表現する」スキルの習得に関連する活動がないことだ。全部で7項目ある学習への取組のいずれも、この“文章表現スキル”の習得に結びついていない。ただし、他学部の卒業生の回答では、「一般教養的な科目の学習」への取組度合いが、文章表現スキルの習得につながっている。すでにみたように、回答者自身の主観的な評価ではあるものの、経済学部生の文章表現スキルの習得具合は他学部の卒業生に比べてやや低い。その理由は定かではないが、他学部の学生に比べて、経済学部の学生は文章を書く課題をこなす頻度や機会が少ないのかもしれないし、あるいは文献精読の質や量に差があるのかもしれない。この点も、今後のカリキュラム編成にあたって参考にすべきである。

(3) 法学部

① 学部教育概要

法学部では、「法律学・国際関係学における基礎的な専門知識・能力を有するとともに、高度な素養と判断力を持つ人材を育成する」ことを教育目標としている。この目標を実現するため、以下のような特色を備えた教育を実施している。

第1に、従来から第一課程（公法）、第二課程（私法）、第三課程（国際関係）の3課程制が採られ、法律学と国際関係の交流が常に意識されてきた。課程ごとに必要な単位数は決まっているが、科目の選択は比較的自由である。3課程制は、1996年の大学院重点化に伴い、経済関係法コース、公共関係法コース、国際関係コースの3コース制に改められ、さらに、2004年の法科大学院開設に伴い、法学コース、国際関係コースの2コース制に整理されている。学生は後期進学段階で、いずれかのコースを選択する。比較的自由に科目を選択でき、充実した科目の中から学生の問題関心に応じて系統的に科目選択ができる点に変更はない。

第2に、学部横断的な履修が可能であり、また推奨されている。「社会科学の総合大学」という本学の理念に基づき、学生の選択で関連社会科学と結合した法律学・国際関係の履修が可能になっている。また2004年度からは、経済学副専攻プログラムという任意のプログラムを導入し、科目選択の自由度を阻害しない形で、経済学の基礎を体系的に習得できるようになっている。

第3に、1996年度以降の4年一貫教育体制の中で、全学共通教育科目と学部教育科目にまたがって4年間にわたって学生が体系的、段階的に履修することができるようになっている。学部教育科目においては、学部導入科目、学部基礎科目、学部発展科目という形で、積み上げ方式の学習が可能になっている。2004年度からは、法科大学院開設に伴い、高度に先端的な科目及び実務的科目は法科大学院での教育に委ね、法学部では、より基礎的な学力の増進に力点を置いて開講科目を見直し、効率的かつ体系的な形で学部教育の実施に力を注いでいる。

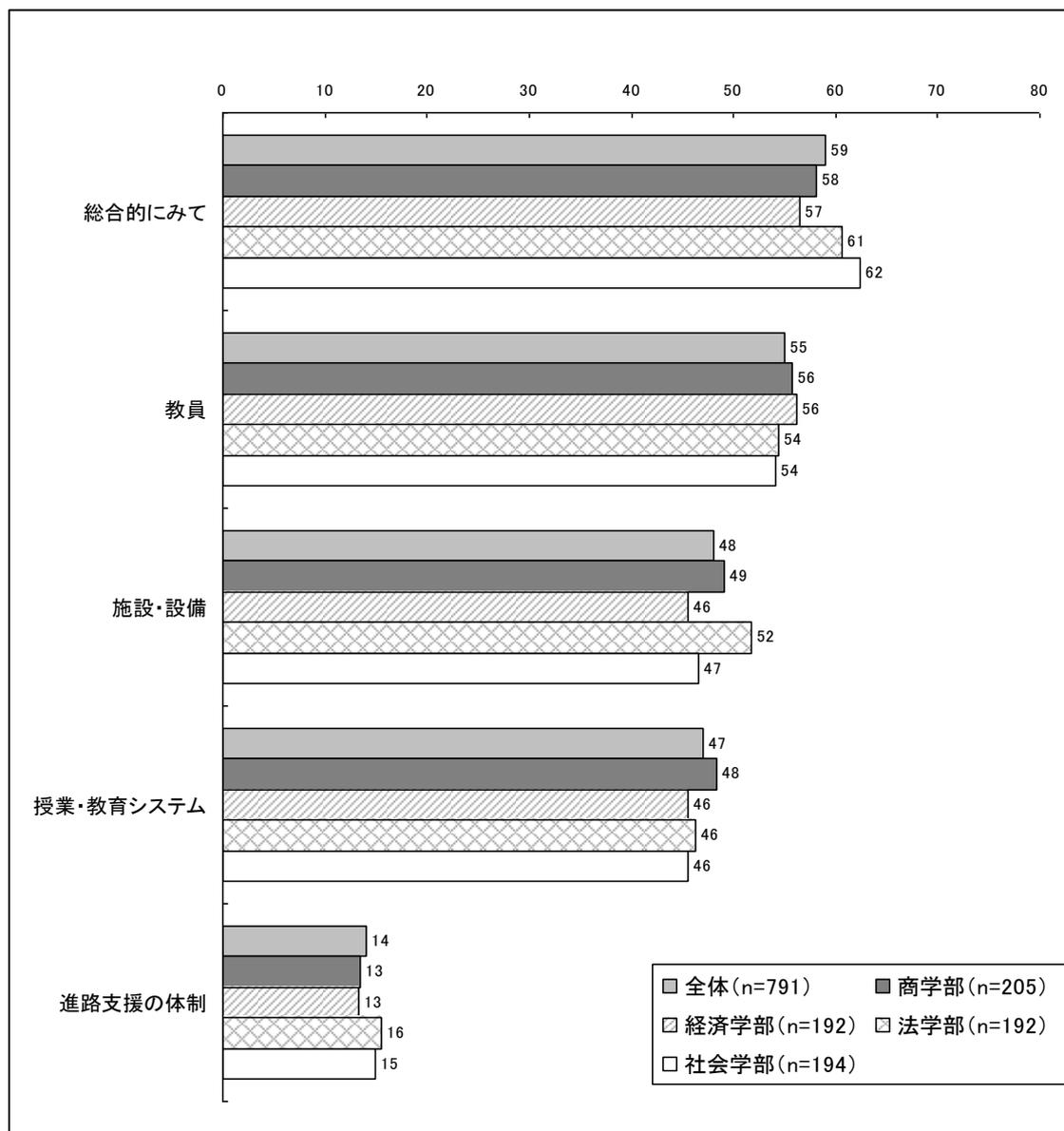
第4に、本学に伝統的な必修ゼミナール制度に基づく少人数教育が行われている。最近の法学部では、1ゼミナールの平均的な学生数は6人程度であり、3・4年連続したゼミナールで教員と学生の対話のなかで丁寧な教育が行われてきた。ゼミナール制度の下で卒業論文の作成が求められており、これも他大学の法学部には見られない特徴である。卒業論文に積極的、主体的に取り組むことにより、学生は飛躍的に学力を伸ばしている。ゼミナール・卒業論文制度については、法科大学院開設後も基本的な変更はない。

このような教育を受けた卒業生は、経済界で指導的役割を果たすとともに、法曹界、官界、さらに国際社会など多方面で活躍している。

以下では、こうした法学部における学部教育に対する評価を項目ごとに、前回報告書（2007年度）をも参考に見ていくこととする。

② 大学全般に対する総合満足度と他者推奨度

<卒業学部別>



法学部の卒業生による大学全般への総合的満足度は、社会学部の卒業生と並んで高く、「教員」満足度も高い。「施設・設備」について、他学部の卒業生に比して満足度が高い。「進路支援の体制」についても、他学部の卒業生よりも高くなっている。しかし、この項目は、他の項目に比べると、全体的に（4学部とも）低く、進路決定は、各自の個人的な努力におう傾向が伺われるが、卒業年次別の推移（全学部）をみると、年々満足度が増加しており、2009－2010年の直近の卒業生がもっとも高く評価している。

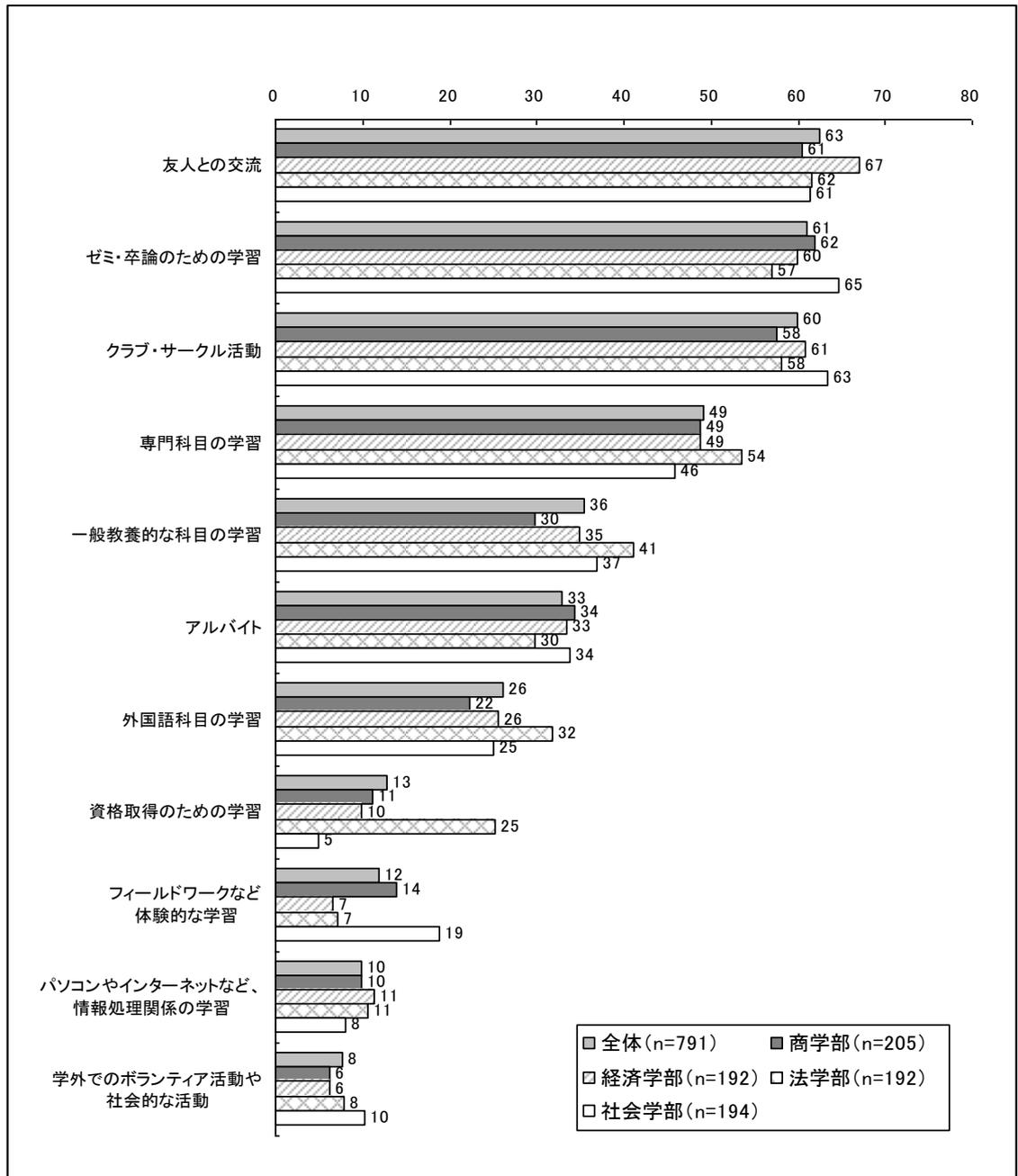
前回報告で指摘された教員及び授業・教育システムに対する満足度の上昇の傾向は、今回も維持されていると思われる。今回もみられた満足度の高さは、継続的な授業改善の成果であろう。

③ 教育と授業・教育システムに対する満足度

この項目は、卒業生全体より法学部の卒業生の満足度が低く、進路支援の体制と並んで、50%を切っている。ただし、授業・教育システムに対する満足度は、46%で、全学部の47%をわずかに下回る程度であるが、前回の2007年度の報告書と比較すると、そこでは、「満足」と「まあ満足」の合計が、60.8%であった。分析方法が一致していないことはあるものの、否定的な評価が増加していることが危惧される。もっとも、このような結果には、近時のロースクール制度全般に端を発する社会の否定的評価が、学部にも影響している結果と推察される。

④ 学習への取組状況

<卒業学部別>



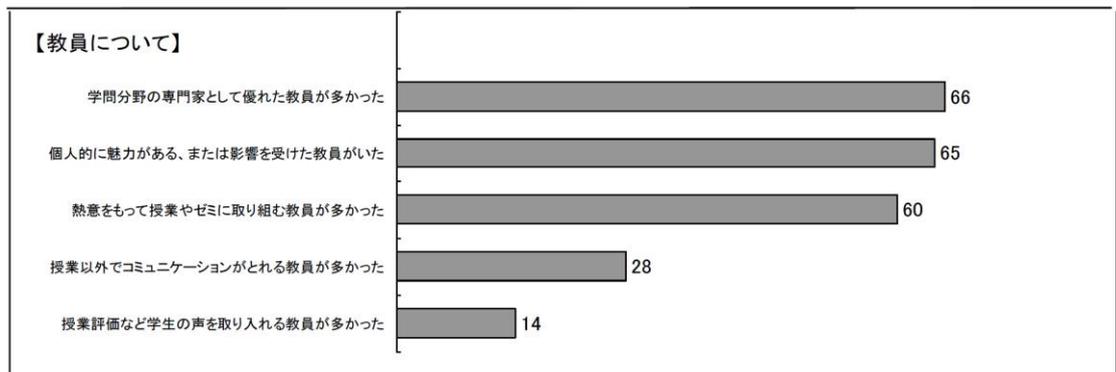
大学生活で取り組んだことについては、やや他学部と異なる様子が伺われる。「資格取得のための学習」が、卒業生全体よりも高いのは、法学部の特性であり、専門化の意識が学部段階から高いものと思われる。「専門科目の学習」に熱心なのも同様の意識からであろう。同時に、「一般教養的な科目の学習」、「外国語科目の学習」にも熱心であり、学習全般に対する積極的な姿勢が伺える。

他方、「ゼミ・卒論のための学習」は、その差は少ないものの、4学部中最低であり、「クラブ・サークル活動」も低調である。ロースクール入試やそのための各種の試験に追われている様子が伺える。法学部の教育目標からしても、ゼミ・卒論は本学の生命線であり、改善を要するが、反面では、学生が講義科目をより重視するようになったこと、ロースクールなど各種試験の重圧などもあり、根本的な対策には困難な問題を含んでいる。二兎を追う結果とならないことが必要である。「学外でのボランティア活動や社会的な活動」にも、あまり熱心ではない。資格や試験対策は、全社会的な要因とはいえ、それだけでは、やや物足りない面が残る。

もっとも、「友達から良い刺激を受けた」との意見が多いことから、図書館に閉じこもって勉強するというよりも、活発に議論する法学部生という姿もみえる。これを活かし、学生の活動と、本学の特色ともいえるゼミナール教育を中心としたよりきめ細かい指導と関連づける工夫が必要であろう。また、低学年次から教員と身近に接するようになれば学生の主体的な取組をより一層促進していくことが考えられる。このような対策によって「細かいことにとらわれず全体的な判断をすることができる」、「奉仕的精神をもって、人間や社会に働きかける」など相対的に低く評価されている能力の育成にもつながることが期待される。

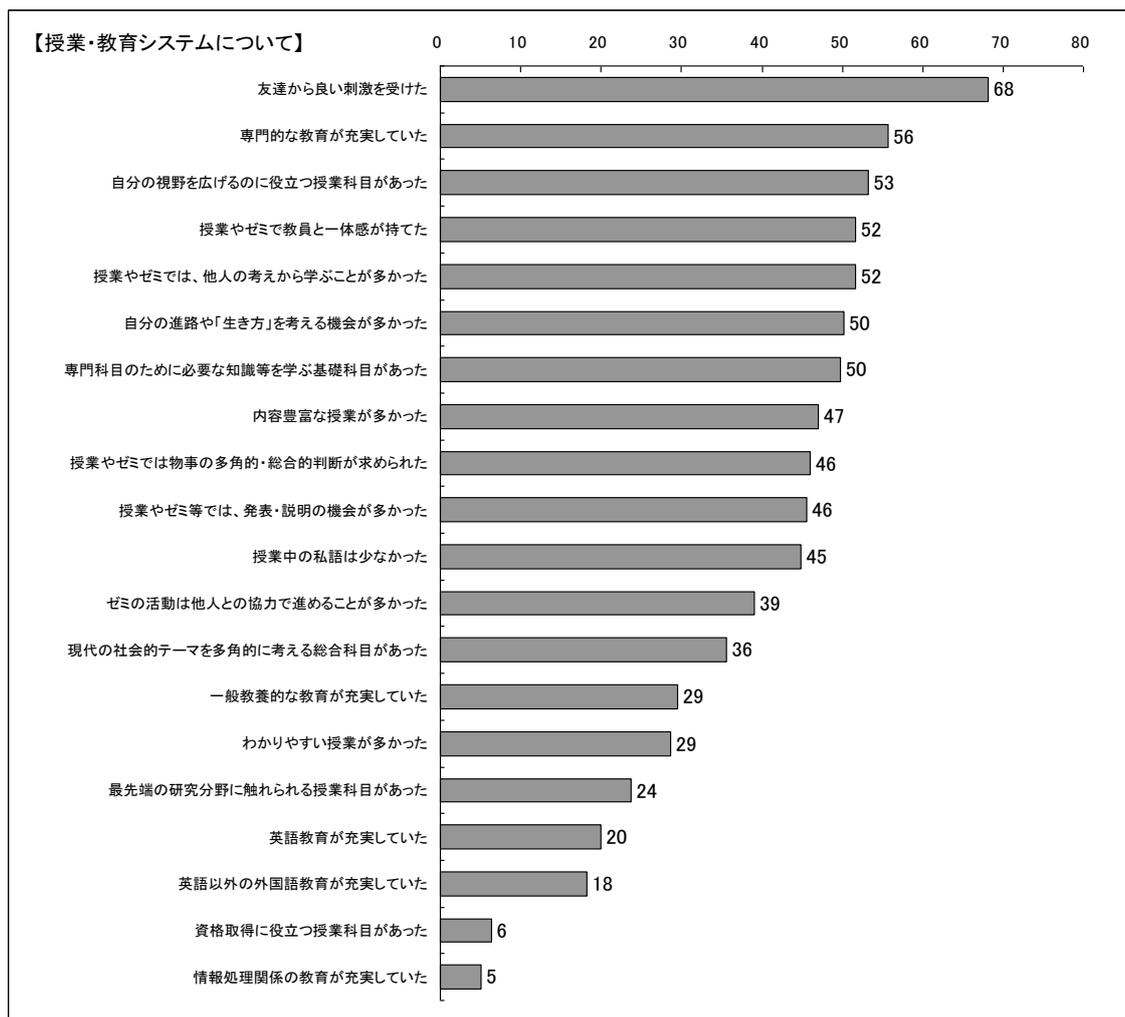
⑤ 教員に対する評価

<全体>



「教員」については、他学部の卒業生と同様に評価は高いが、個別にみると、「授業以外でコミュニケーションがとれる教員が多かった」、「授業評価など、学生の声を取り入れる教員が多かった」の項目で、他学部の卒業生と比べて高い評価がみられた。他方、「個人的に魅力がある、又は影響を受けた教員がいた」は、全体に対し3ポイント低い(65に対する62)。実定法科目など、内容に定型性のある科目の特徴によって影響されていると思われるが、若干気になる点がある。④とあわせ考えると、学習の重圧が影響していると思われる。④でも指摘したように、低学年次から教員と身近に接するようにして、学生の主体的な取組をより一層促進していくことが考えられる。

⑥ 授業・教育システムなどに対する評価

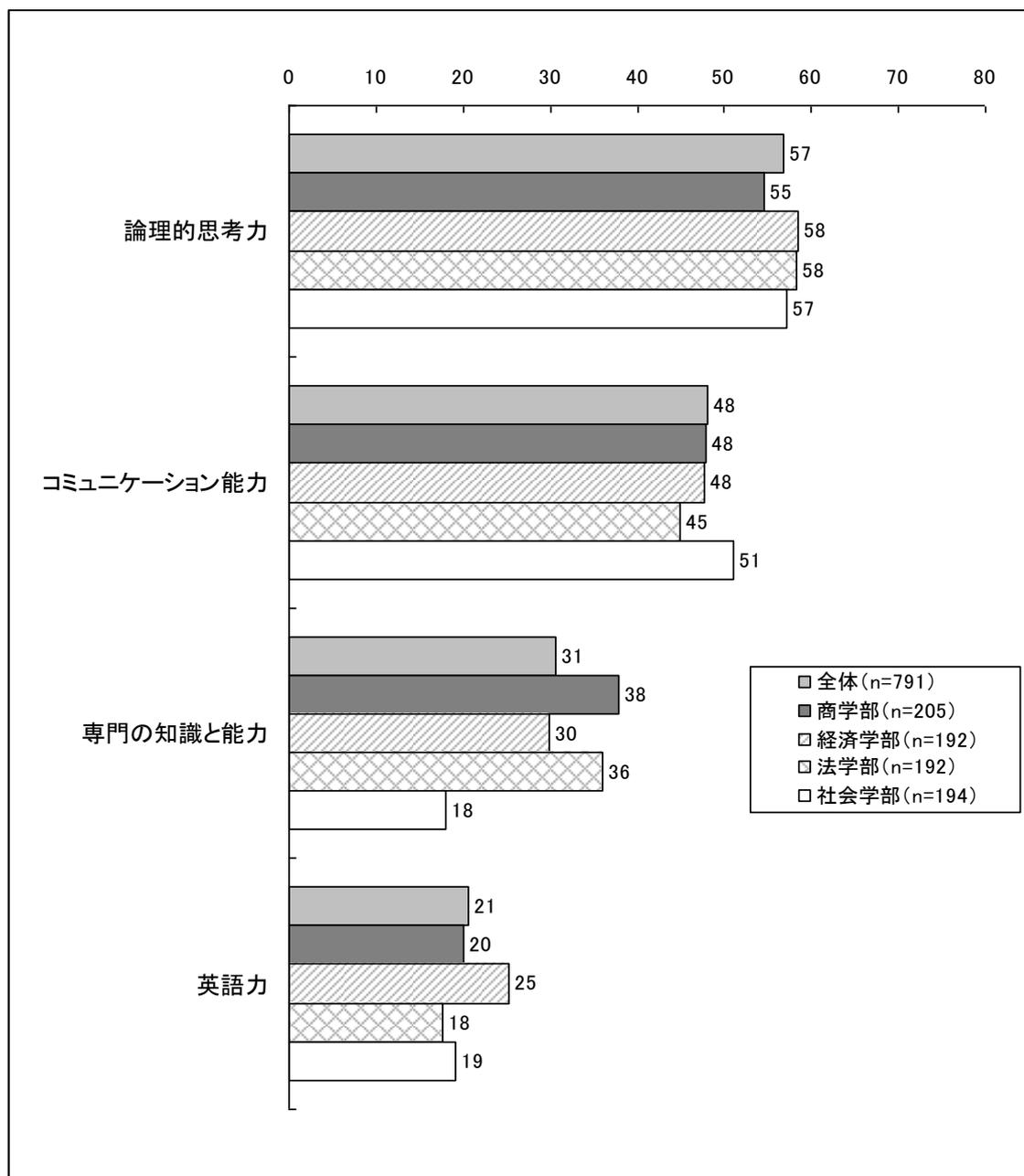


卒業生の「授業・教育システム」に対する評価では、「友達から良い刺激を受けた」との回答がもっとも多い。「専門科目のために必要な知識等を学ぶ基礎科目があった」、「授業やゼミで教員と一体感が持てた」、「授業やゼミでは、他人の考えから学ぶことが多かった」、「自分の進路や「生き方」を考える機会が多かった」などが相対的に多いが、「英語教育が充実していた」や、「英語以外の外国語教育が充実していた」、「資格取得に役立つ授業科目があった」、「情報処理関係の教育が充実していた」などは、相対的に少ない。

学部別の詳細は不明であるが、法学部では、実定法科目など定型的な授業が多い学部の特徴を反映したと思われる。それにもかかわらず、基礎科目や外国語教育の充実を評価するものも多い。

施設・設備に関しては、「図書館が役に立った」との回答が高く、「教育・研究に必要な施設・設備が充実していた」ことも評価されている。学問の特質から、文献の充実が不可欠なことから、図書館が評価されたものと思われる。ただし、法学文献も、近時はデータベース化が著しいことから、一層の努力が必要となる。

⑦ 大学生活で身についたこと



在学中に獲得した知識・技能の活用度では、「論理的思考力」と「コミュニケーション能力」の活用度が、いずれの学部でも高いが、法学部では、後者は他学部を下回る。「専門の知識と能力」は、法学部の卒業生で高いが、英語力の活用度では、他学部を下回る。理由は、必ずしも明確ではないが、専門を活かす職域に比して、語学を活かす職域につくことが相対的に少ないのかと思われる。

(4) 社会学部

① 学部教育概要

社会科学の多様性とその総合とを最大の特色とする社会学部では、学生一人ひとりがそれぞれの問題関心を大切にしながら、4年間で計画的に過ごしていくことが求められる。また、そうした学生の幅広い興味と奥の深い探究心に応えるため、自然と社会と人間を対象とする広範な専門科目が開講されている。

社会学部の学部教育は、1999年度までは、社会理論、社会問題・政策、地域社会の三つの課程に分かれ、学生は後期進学時の申告によりそれぞれの課程に所属することになっていた。2000年度以降は社会学科1学科となり、社会動態研究、社会文化研究、人間行動研究、人間・社会形成研究、総合政策研究、歴史社会研究の六つの科目群が設けられている。学生は特にどの研究分野に所属するかを申告する必要はなく、これらの科目群から履修規則に従って自由に履修科目を選ぶことができるようになっている。そこで、学生が関心をもつ専門分野の学習と、それを支える幅広い学修とを並行して進めていけるようにとの配慮から、各自が自分に合った適切な履修計画を策定する助けとして2006年度から全50頁余の履修ガイド「社会学部で何を学ぶのか いかにかに学ぶのか?」を全学部生に配付している。

学部教育科目は、4年一貫教育体制の下で学部導入科目、学部基礎科目、学部発展科目の三つの水準から構成されている。学部導入科目は社会科学研究の基礎的態度・方法の修得を目的とする「社会科学概論」と、社会学部で提供される各専門領域の理解をめざして開講される「社会研究の世界」及び「社会研究入門ゼミ」の3科目のみから構成される。学部基礎科目では、主として各科目区分の基礎に関わる一般理論、それぞれの学問の課題と対象、方法と枠組み、理論形成史などを学ぶ。学部発展科目では、専門性を発展させた応用部門や個別研究を扱う講義、より高度な理論水準を要求する講義などが開かれる。各年次にこうした科目を履修しつつ、最終学年の4年次では、大学での学習の成果を卒業論文(学士論文)としてまとめることになる。

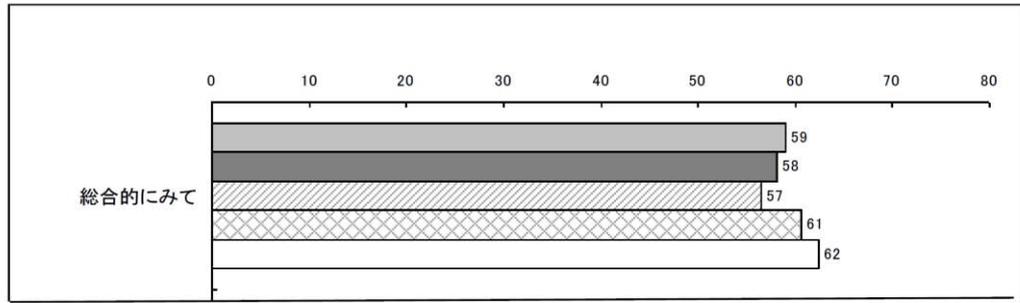
すでに述べたように、学生の自主的選択の余地を拡げ、また学際的テーマへの柔軟な対応を可能にするため、社会学部における履修規則は自由度が高く設定されている。学生は、自分自身の問題関心や卒業後の進路などを踏まえて、一つの専門領域に打ち込むこともできれば、またいくつかの領域を横断して問題を追究することもできる。各自が前述の履修ガイドを参考に自分の問題意識や問題関心に沿った履修計画を立案し、いわば主体的な学修を行うことにより個性を伸ばすことが期待される体制となっている。

なお、2011年度学部入学生から、一定のGPA値(当面は1.8)を卒業要件とする措置が全学で導入されたことに伴い、社会学部でも、学部教育専門委員及び学生委員が協力して入学時以降の学生の履修状況や成績をチェックして、GPAの低い学生に対する個人指導を行うなど、従来にないきめ細かな履修指導を行う体制で臨んでいる。

② 大学全般に対する総合満足度と他者推奨度

大学満足度

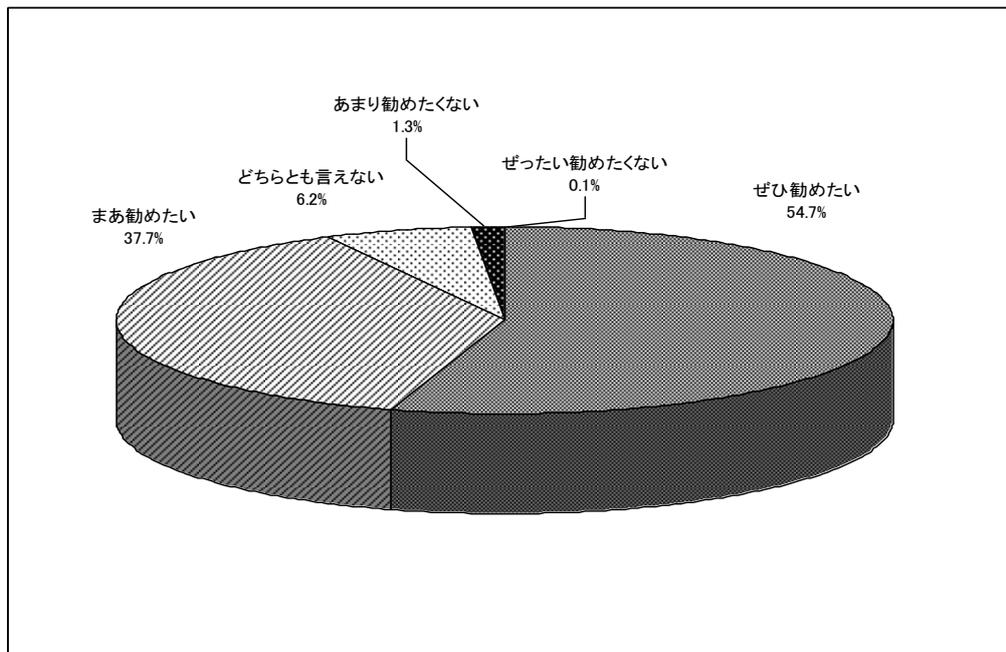
<全体>



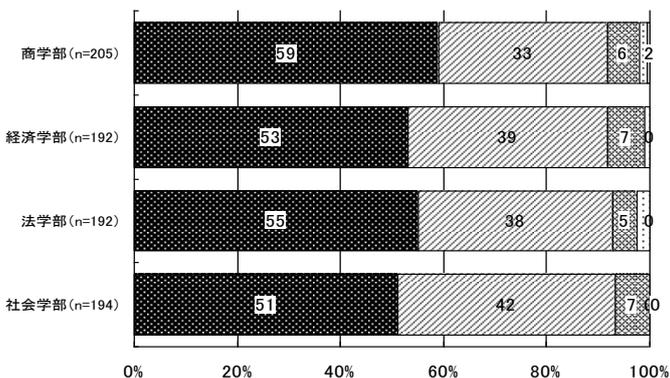
■ 全体 (n=791) ■ 商学部 (n=205)
 □ 経済学部 (n=192) □ 法学部 (n=192)
 □ 社会学部 (n=194)

推薦意向

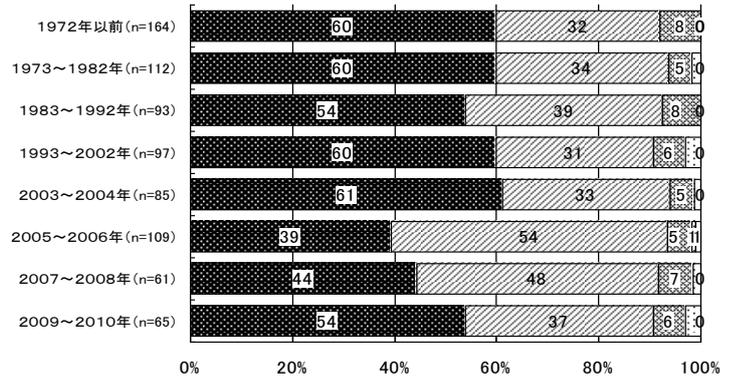
<全体>



■ ぜひ勧めたい ■ まあ勧めたい ■ どちらとも言えない □ あまり勧めたくない □ ぜったい勧めたくない



卒業学部



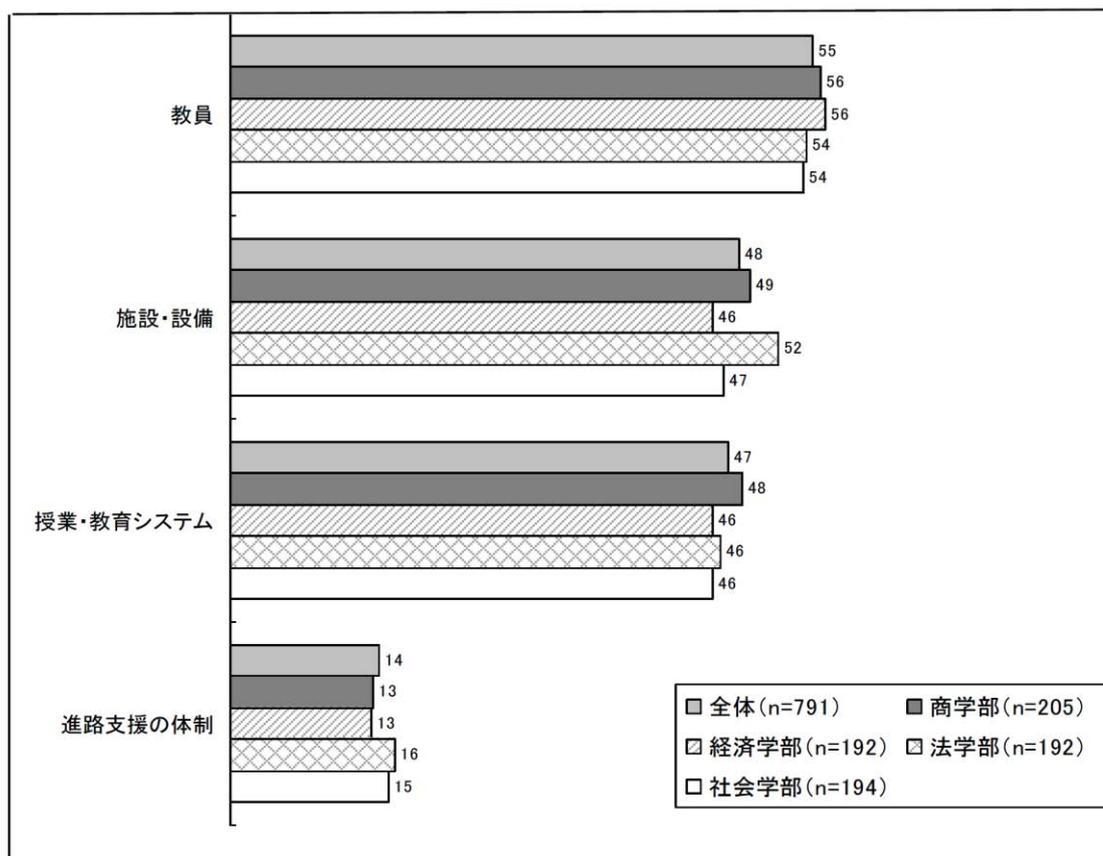
卒業年次

社会学部の卒業生は、一橋大学に対する総合的満足度が平均（59ポイント）であるのに対して、学部間の差が少ないなかで第1位（62ポイント）となっている。これは「とても満足」（32.5%）が全学平均（28.4%）をかなり上回っていることによるものである。その一方、「とても満足」、「まあ満足」を単純に合算した数字（92.3%）は全学平均（90.3%）とあまり変わらない。また、この数字を2005年度に実施した調査と比較すると全学・社会学部（いずれも97%）ともに、非常に高いレベルの範囲ではあるが満足度が若干低下した結果となっている。

他者への推奨度という点では「ぜひ勧めたい」が1位の商学部（59%）、平均（54.7%）に対してかなり低めで最下位（51%）となっている。ただし、「ぜひ勧めたい」、「まあ勧めたい」を合算すると92～95%（社会学部93%）となり、学部間差はほとんどない。また、この結果は、2005年度に実施した調査（95～96%、社会学部96%）ともほとんど変化がない。

③ 教育と授業・教育システムに対する満足度

大学満足度
＜全体＞

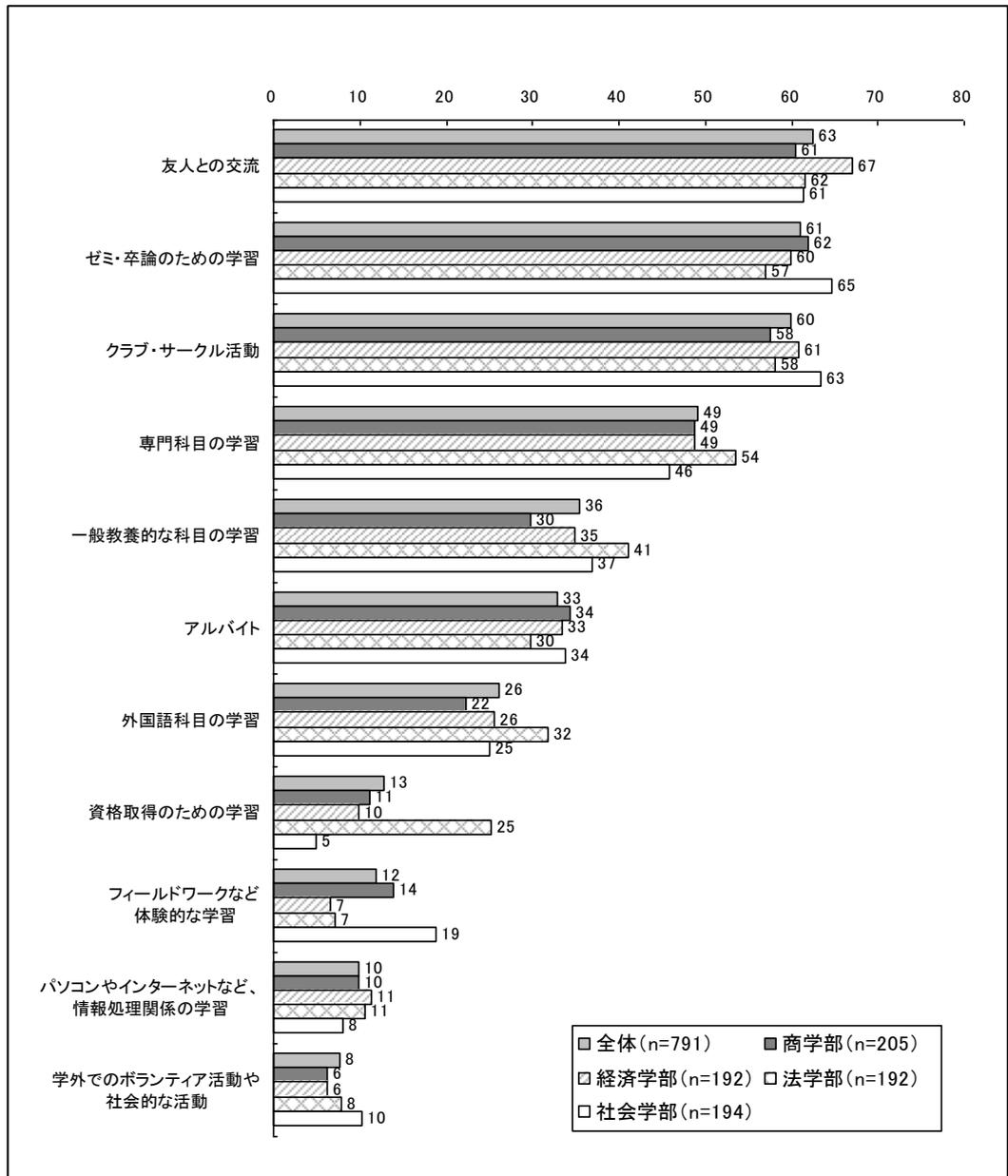


個別項目に対する満足度では、「教員」（54ポイント、全学55ポイント）、「施設・設備等」（47ポイント、全学48ポイント）、「授業・教育システム」（46ポイント、全学47ポイント）、「進路支援の体制」（15ポイント、全学14ポイント）など、社会学部の卒業生の満足度には全学平均との大きな差は認められない。あえて言うならば、「教員」、「施設・設備等」、「授業・教育システム」に対する満足度はやや低めであり、「進路支援の体制」に対する満足度は低いレベルのなかでやや高めである。なお、「教員」、「施設・設備等」、「授業・教育システム」、「進路支援の体制」のより具体的な項目に対する評価の分析については⑤で詳述する。

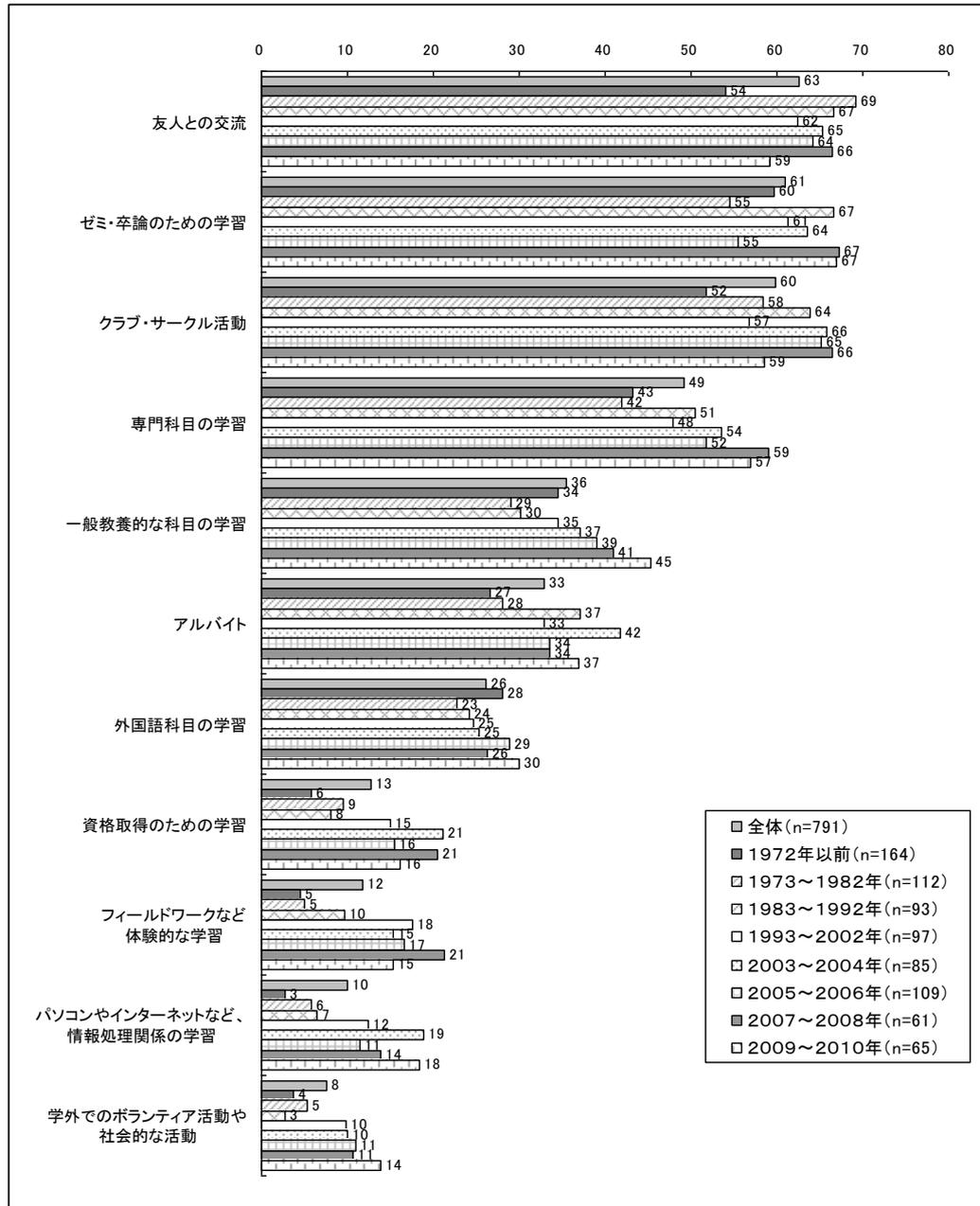
④ 学習への取組状況

2. 大学生活で取り組んだこと

<卒業学部別>



< 卒業年次別 >

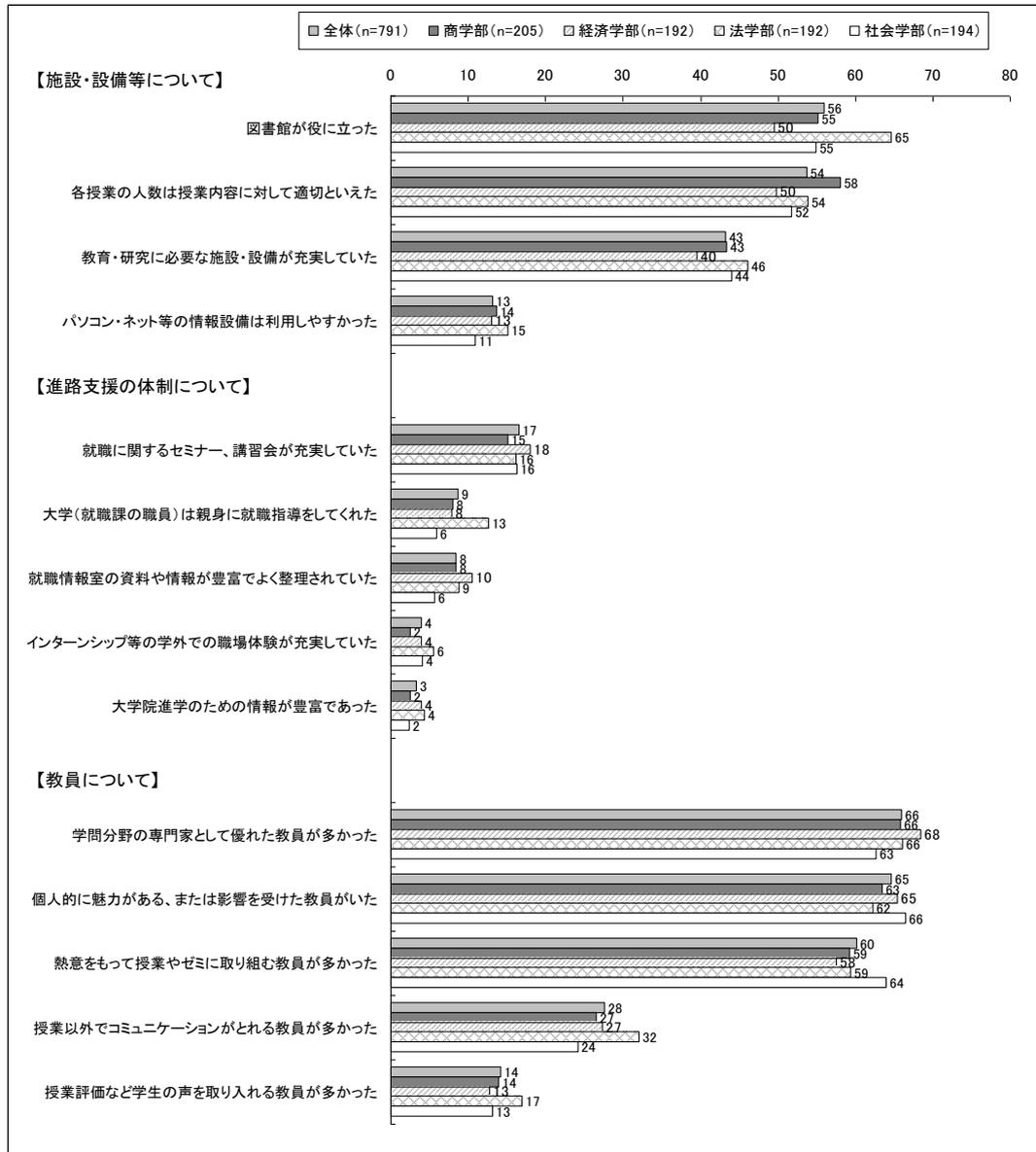


「大学生活で取り組んだこと」という設問に対する回答のなかでは、卒業生全体として高い回答率を示した上位3項目「友人との交流」(63ポイント)、「ゼミ・卒論のための学習」(61ポイント)、「クラブ・サークル活動」(60ポイント)のうち、社会学部は「ゼミ・卒論のための学習」(65ポイント)、「クラブ・サークル活動」(63ポイント)の2項目で第1位となっており、一橋大学生らしく活発にゼミやクラブ活動に取り組んだという卒業生の評価を伺うことができる。また、全体として回答率が低い項目のなかで「フィールドワークなど体験的な学習」(平均12ポイント、社会19ポイント)、「学外でのボランティア活動や社会的な活動」(平均8ポイント、社会10ポイント)で高い回答率を示していることも指摘できる。これに対して、他学部と比較してやや低い回答率を示している項目としては、「専門科目の学習」(平均49ポイント、社会46ポイント)、「資格取得のための学習」(平均13ポイント、社会5ポイント)をあげることができ、社会学部の特徴を反映していると考えられる。

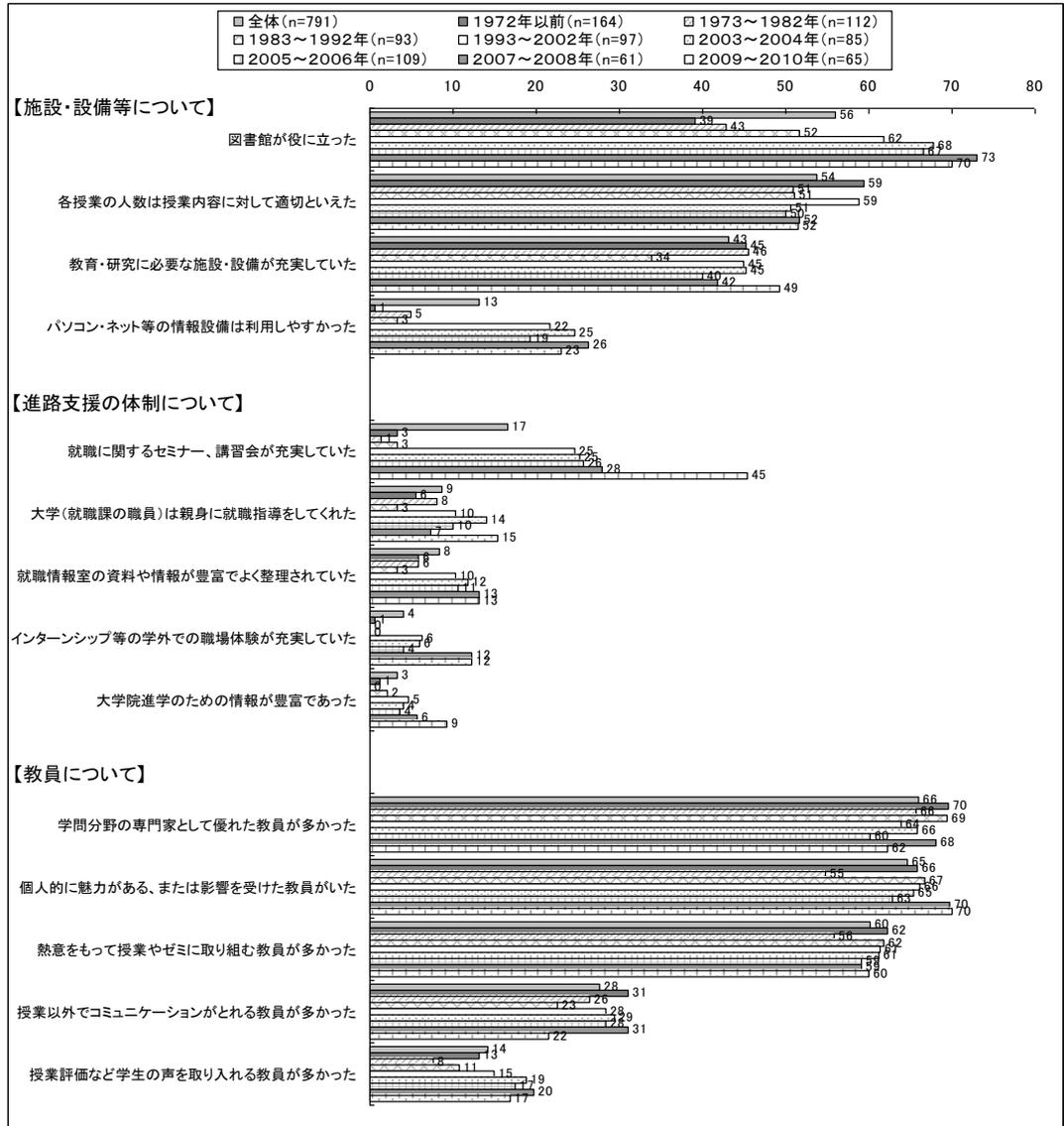
⑤ 教員に対する評価

卒業生からの評価

<卒業学部別>



< 卒業年次別 >



「施設・設備等」についての具体的な項目に関する卒業生の評価では、卒業年次別（全体）で見たとき、近年の卒業生の間で「図書館が役に立った」という評価が上昇していることが目立つ一方、「パソコン・インターネット等の情報設備は利用しやすかったか」についての評価が低くとどまっている。特に、図書館の利用が学習上高いと思われる法学部の卒業生の間では「図書館」の評価が高い(65ポイント)が、社会学部の卒業生の「図書館」評価は、商学部の卒業生と同じ(55ポイント)であり、「パソコン・インターネット等の情報設備」についての評価は全学部で最も低い(11ポイント)。

「進路支援の体制」についての具体的な項目に関する卒業生の評価では、卒業年次別（全体）のなかで近年の卒業生の間で「就職に関するセミナー、講習会が充実していた」という評価が急上昇していることが目立つ。また、「大学院進学のための情報が豊富であった」の評価も、低いレベルのなかではあるが着実に上昇している。各項目についての社会学部の卒業生の評価は他学部の卒業生とあまり差はなく、あえて言えばやや低めである。

以上から、他学部も同様であると考えられるが、IT化に応じた施設・設備の改善及び進路支援体制のさらなる充実が社会学部の課題であることを指摘できるだろう。

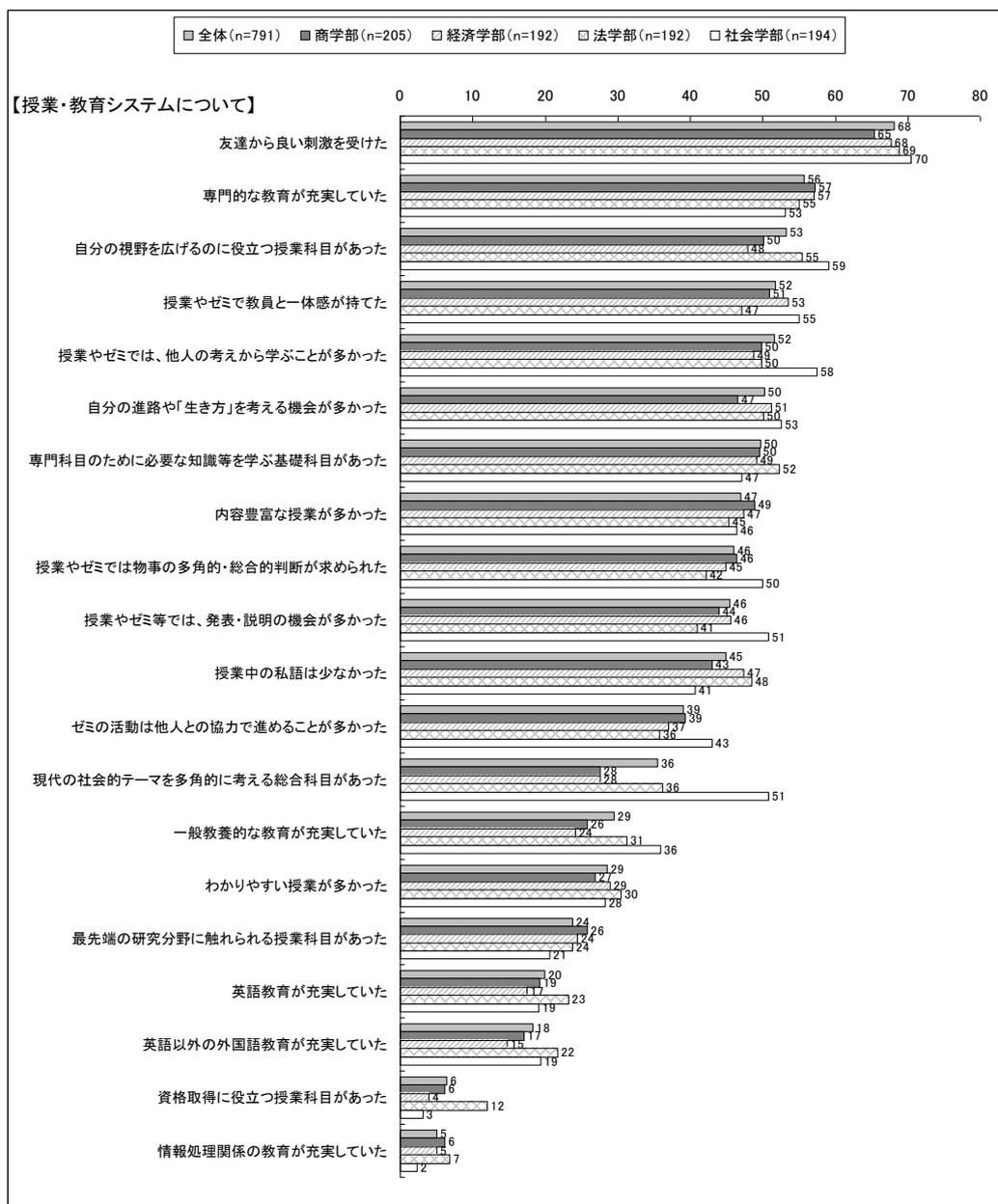
「教員」に対する卒業生の評価は、卒業年次にかかわらず、いずれの学部の卒業生も「学問分野の専門家として優れた教員が多かった」、「個人的に魅力がある、または

影響を受けた教員がいた」,「熱意をもって授業やゼミに取り組む教員が多かった」の3点について高い。一方,「授業以外でコミュニケーションがとれる教員が多かった」,「授業評価など,学生の声を教育改善に取り入れる教員が多かった」の2点について卒業生の評価は低めで,「コミュニケーション」については評価がやや低下し,「学生の声」については授業評価の導入に伴い,近年の卒業生の間で上昇している。こうした傾向について社会学部は特に他学部と大きな違いはないが,「熱意をもって授業やゼミに取り組む教員が多かった」(平均60ポイント,社会64ポイント),「個人的に魅力がある,または影響を受けた教員がいた」(平均65ポイント,社会66ポイント)で平均より高く評価されている一方で,「学問分野の専門家」と「授業以外のコミュニケーションがとれる教員が多かった」で他学部よりやや低めの結果となっている。

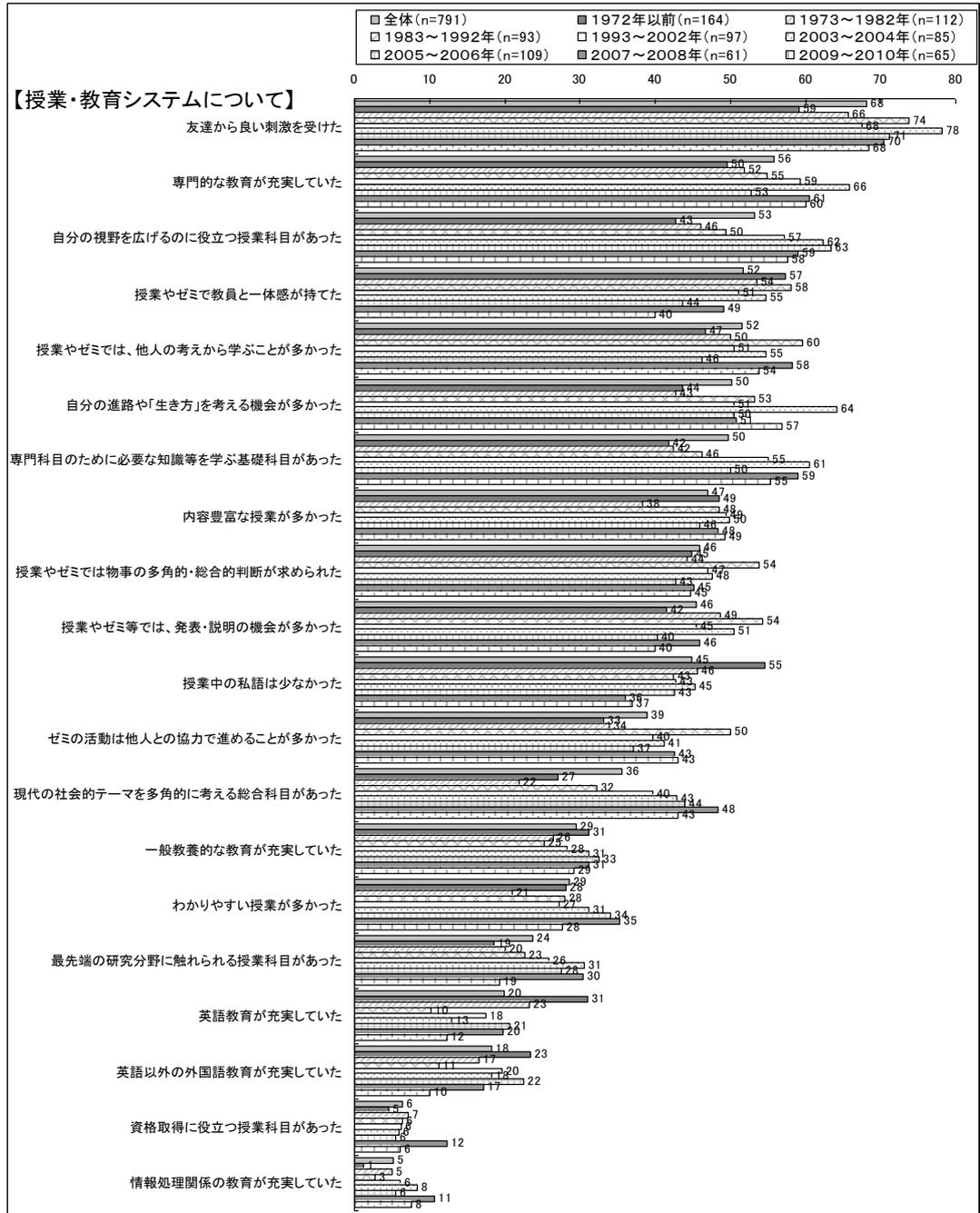
⑥ 授業・教育システムなどに対する評価

卒業生からの評価

<卒業学部別>



< 卒業年次別 >



「授業・教育システム」についての学部卒業生による計20項目にわたる評価項目で、全学平均のなかで社会学部の卒業生が高い評価を得た項目としては、「友達から良い刺激を受けた」（平均68ポイント，社会70ポイント）、「自分の視野を広げるのに役立つ授業科目があった」（平均53ポイント，社会59ポイント）、「授業やゼミで教員と一体感が持てた」（平均52ポイント，社会55ポイント）、「授業やゼミでは、他人の考えから学ぶことが多かった」（平均52ポイント，社会58ポイント）、「授業やゼミでは、物事を多角的・総合的判断が求められた」（平均46ポイント，社会50ポイント）、「授業やゼミ等では、発表・説明の機会が多かった」（平均46ポイント，社会51ポイント）のほか、特に「現代の社会的テーマを多角的に考える総合科目があった」（平均36ポイント，社会51ポイント）、「一般教養的な教育が充実していた」（平均29ポイント，社会36ポイント）をあげることができる。逆に、全学平均と比較して評価度が低い項目としては、「専門

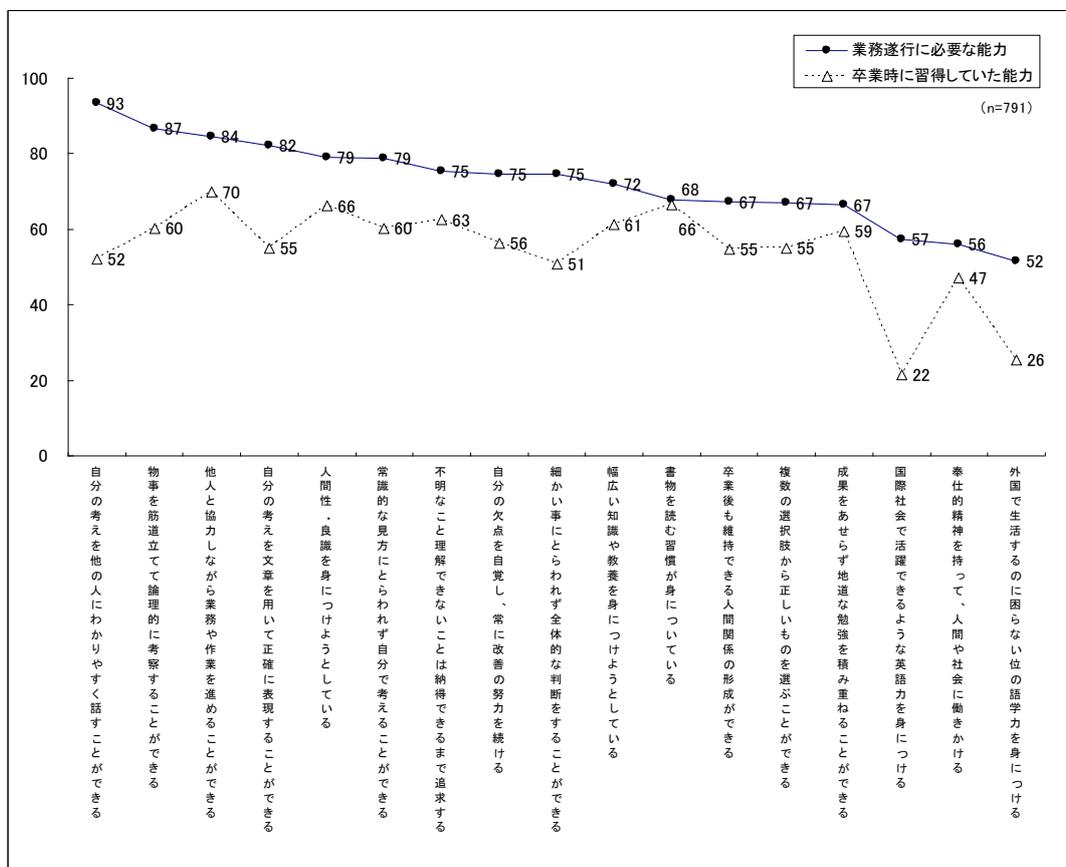
的な教育が充実していた」(平均56ポイント, 社会53ポイント), 「専門科目のために必要な知識等を学ぶ基礎科目があった」(平均50ポイント, 社会47ポイント), 「授業中の私語は少なかった」(平均45ポイント, 社会41ポイント), 「最先端の研究分野に触れられる授業科目があった」(平均24ポイント, 社会21ポイント), 「資格取得に役立つ授業科目があった」(平均6ポイント, 社会3ポイント), 「情報処理関係の教育が充実していた」(平均5ポイント, 社会2ポイント)などがあげられる。

全体として, 全人的教養教育としての充実度を評価される一方で専門教育についてはやや評価が低めに出ているといえるだろう。

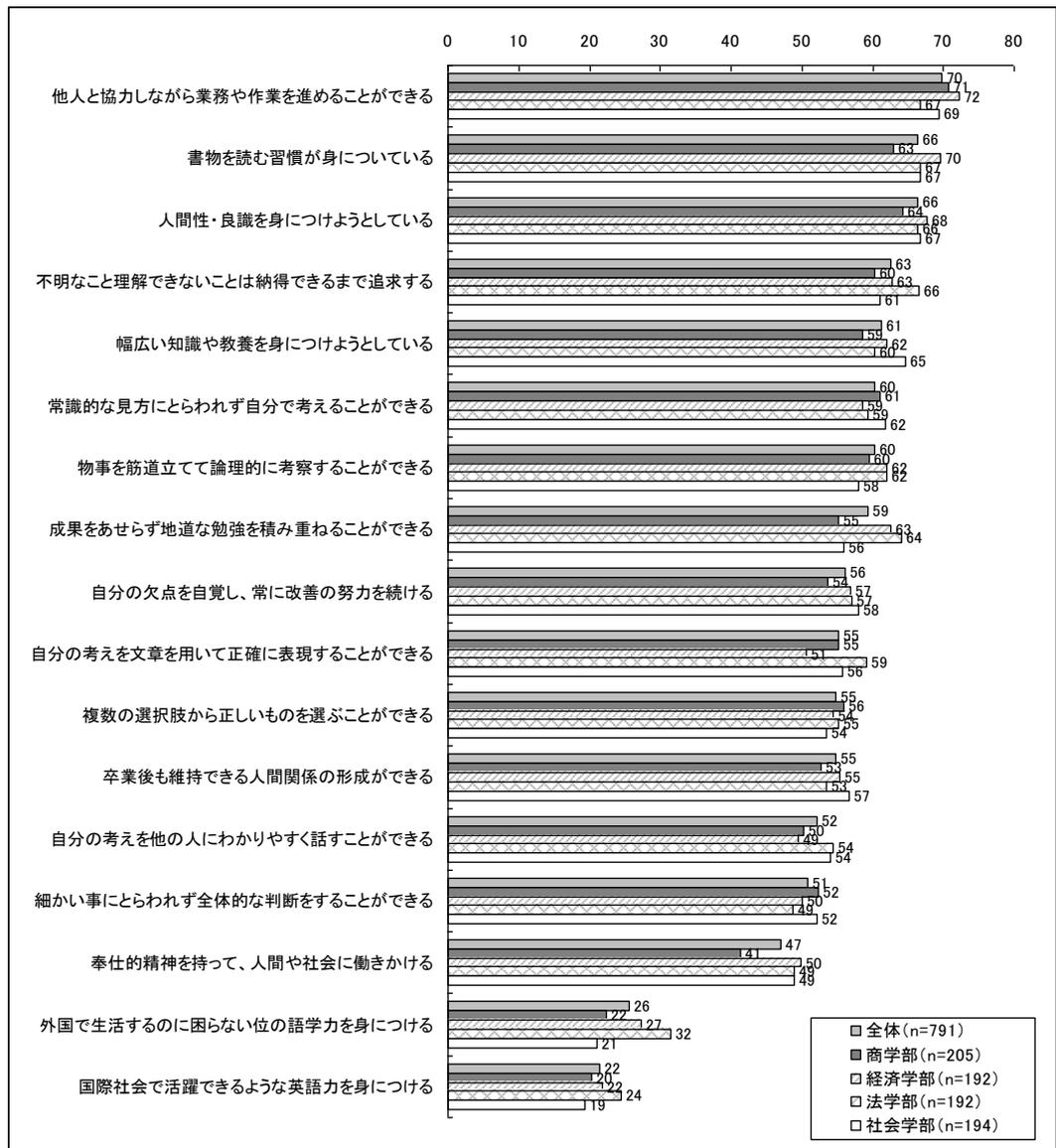
⑦ 大学生活で身についたこと

能力・資質の必要度と習得度

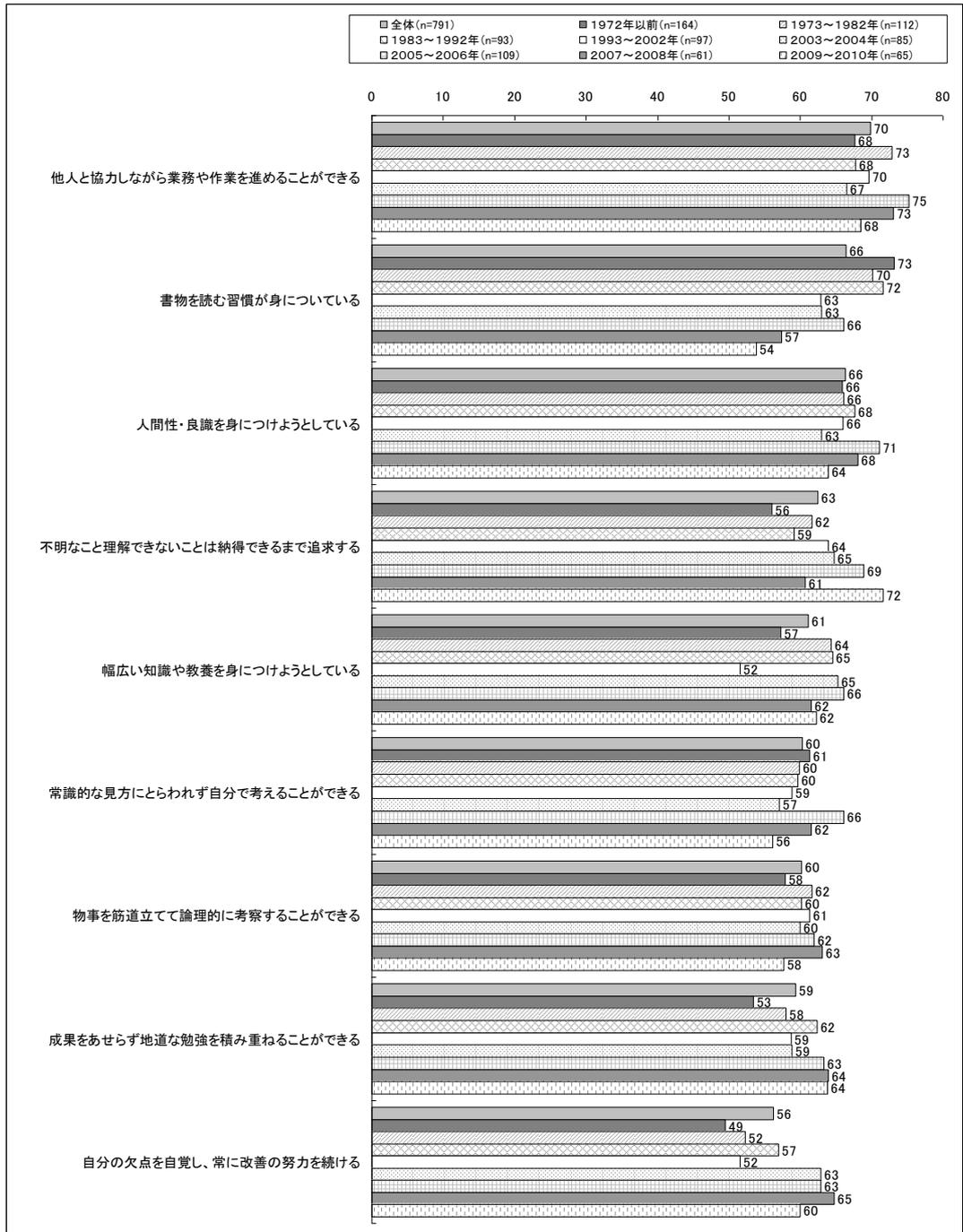
<全体>

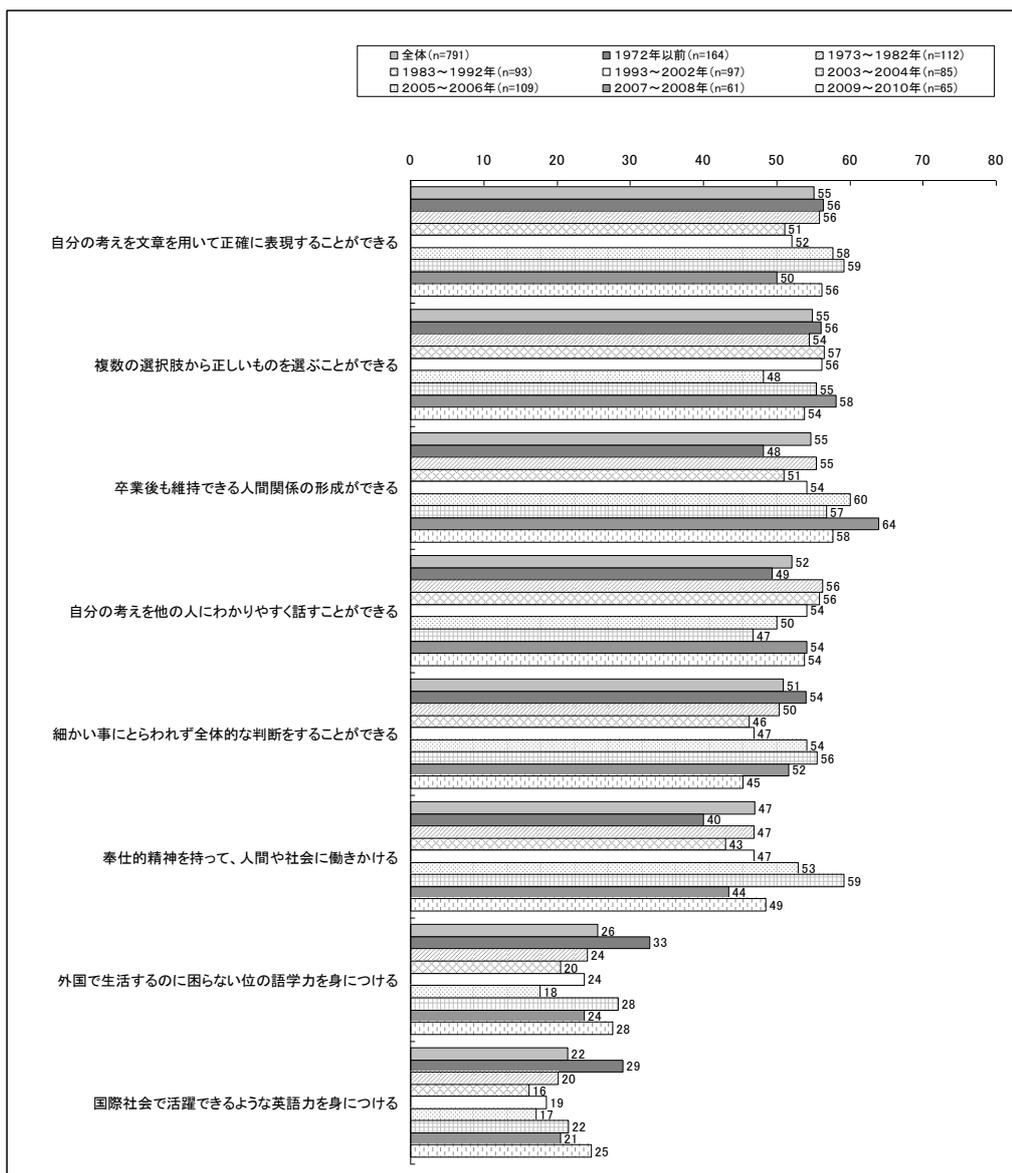


< 卒業学部別 能力習得度 >



< 卒業年次別 能力習得度 >





「卒業生が現在の業務を遂行していく上で必要な能力・資質を卒業時に修得できていたか」という全17項目の質問に対する回答を見ると、全体としてはあまり有意の差が見られないなかで、必要な能力・資質として5番目に多かった「幅広い知識や教養を身につけようとしている」（平均61%，社会65%）で社会学部は高い評価を得ている一方で、8番目に多かった「成果をあせらず、地道な勉強を積み重ねることができる」能力（平均59ポイント，社会56ポイント）はやや低く、16番目の「外国で生活するのに困らないくらいの語学力を身につける」（平均26ポイント，社会21ポイント）、17番目の「国際社会で活躍できるような英語力を身につける」（平均22ポイント，社会19ポイント）で社会学部の評価はやや低くなっている。

この結果は⑥と対応しており、全人的教養教育が充実している結果として「人間の成長」や総合的な知識・教養といった資質の修得については肯定的な評価が高い一方で、専門性や専門的学習能力についての評価が低めに出ているといえる。また、全学的にも評価が低い語学・英語力について社会学部の評価がさらに低く出ていることは、社会学部入学生の英語力が高いことを考えると、学部時代の英語教育や語学教育にやや物足りなさを感じた卒業生が多いことを示しているといえるだろう。

以上から、社会学部の専門的学問内容に応じた語学・英語力の育成を、今後の重要な検討課題として指摘できるだろう。

第2部 全学的教育事項に対する評価と課題

1 本学における全学的教育事項概要

(1) 学生受入状況

本学は、創立以来、市民社会の学である社会科学の総合大学として、リベラルな学風のもとに日本の政治・経済・社会と文化の発展に貢献してきた。また、日本だけでなく、世界の自由で平和な発展に貢献することを目指し、その指導的担い手を育成することに努めるため、学部においては一般入試（前期日程試験・後期日程試験）、外国学校出身者入試、私費外国人留学生入試及び推薦入試（商学部のみ）を実施している。

一般入試（前期日程試験・後期日程試験）及び推薦入試の募集人員は下表のとおりであり、各学部の前期日程試験の募集人員には外国学校出身者入試の5人以内が含まれており、また、私費外国人留学生入試については各学部若干名の募集人員が加わることとなる。

学 部	学 科	入学定員	募集人員		
			前期日程	後期日程	推薦入試
商 学 部	経営学科 商 学 科	275人	260人	—	15人
経済学部	経済学科	275人	215人	60人	—
法 学 部	法律学科	170人	160人	10人	—
社会学部	社会学科	235人	225人	10人	—
総 計		955人	860人	80人	15人

広報状況：

大学全体や、各学部・研究科の概要、受験に関する情報などについては、受験希望者に配付している『大学案内』や本学ホームページ（「一橋大学で学びたい方へ」）等で公表し、有用な情報を提供している。また、オープンキャンパスでは、近年の参加者の要望に応じて実施回数を増やしたほか、高校等への出張講義、都心や地方で開催する大学説明会への参加、本学を見学するキャンパスツアーの受入れなど、積極的な広報活動を実施している。

(2) 施設設備

本学には、学習のため学生が利用可能な主な施設設備として、情報基盤センター、附属図書館及びLL自習室等がある。

情報基盤センター：

情報基盤センター情報教育棟には、五つの演習室に約200台のパソコンが設置され、授業での使用時間を除き、学生の自由な利用に供している。情報教育棟の開館時間は、平日の8時40分～20時00分までであり、その間、学習、研究のために自由に利用できる。授業期間平日の10時00分～18時00分には院生スタッフ等による利用相談も行っている。情報教育棟内のプリンターに関しては、生協のプリペイドカードが利用できるものが3台、大学で配付しているコピーカードが利用できるものが2台設置されている。

情報教育棟での授業としては、2012年度夏学期には、情報基礎、情報科学総論、計

算機概論等のべ28講座（ゼミ1講座を含む）が提供され、2012年度冬学期には、延べ27講座が開講されている。

情報基盤センターが提供するオンラインサービスとしては、メール（Gmail）及びWebClass（授業支援システム）があり、学習、研究活動をサポートしている。WebClassはWebベースのe-learnigシステムであり、ブラウザを利用して、資料を参照したり、小テストを受けたり、レポート提出を行うこと等が可能となっている。

学内の主な教室及び公共施設には、無線LANシステム「1284Wireless（ひとつばしワイヤレス）」を整備しており、ノートパソコン等からインターネットに接続できるようになっている。

学内の約40か所の教室等に設置されたデジタルテレビや東2号館3階の学習室「映像情報ギャラリー」では、本学独自の映像コンテンツを自由に選択して視聴する高画質映像配信システム「1284ch（ひとつばしチャンネル）」を提供しており、授業、公開講座、サークル紹介等の映像コンテンツ化を進めている。

学内の情報ネットワーク、情報基盤センターの各種サーバ・システムの管理・運用及びセキュリティ管理は、情報基盤センター長（兼任）、副センター長（兼任）、准教授1人、助教4人、助手3人、事務職員4人及び非常勤職員4人が担当している。

附属図書館：

蔵書数は、図書186万冊（和漢書98万冊、洋書88万冊）、雑誌16,700タイトルに及び、日本唯一の社会科学系総合大学の図書館として、質・量ともに高く評価されている。蔵書の大半を占める100万冊の図書と16,000タイトルの雑誌を自由に手に取り利用することができるようになっている。これにより、図書館利用者の学習・研究調査活動及びレファレンスサービスが迅速に行われる基盤が形成されている。

蔵書の情報は、オンライン目録“HERMES”により学内外から検索できるようになっている。また、図書館ポータルサイト“MyLibrary”により資料の予約・貸出延長、学外への文献複写・資料貸借申込みなども行うことができ、利便性が高い。学部学生への館外貸出は、8冊以内・2週間以内で、休業期には長期貸出を行っている。蔵書の館外貸出冊数は、年間24.7万冊と多数活用されている。

学術資料の電子化の流れに応じて、電子ジャーナルや電子書籍、データベースの導入も進めており、14,000タイトル以上の電子ジャーナルや6,000タイトルの電子書籍、90種類以上の各種データベースを提供している。学生や教職員がネットワーク経由で学内外から学術資料にアクセスできるように、様々な利便性の向上を図っている。

閲覧座席数は700席、資料収容可能冊数は203万冊、延べ床面積は14,855㎡である。2011年度の図書館本館の入館者数は34万人、平日一日あたりの平均入館者数は1,273人と、利用率は高い。情報検索コーナー、グループ学習室（個室）、マイクロ資料室などの設備も整備している。また、自分のノートパソコンやタブレット端末を館内に持ち込み、無線LANでのインターネット接続による情報検索や、蔵書を利用したレポート・論文の執筆を行うこともできるようになっている。ノートパソコンやタブレット端末は、図書館でも館内貸出を行っている。

学生等に対して、図書館の利用案内、文献の検索・入手方法、データベースや電子ジャーナル等の利用方法等のガイダンスを実施している。また、附属図書館研究開発室の専門助手及び大学教育研究開発センターの教員の協力を得て、レポート・論文の執筆方法のセミナーも実施している。さらに、2012年度からは、全学的観点から学生の自律的学修を支援し、学生個々の学修相談にも応じる基盤的組織のアカデミック・プランニング・センターの事業の一環として、大学院生による学部学生向けの学修支援チューターを配置し、文献調査やレポート執筆方法等の相談・支援を行っている。

本学で生産された研究成果を電子的に保存しインターネットにより発信する一橋大学機関リポジトリ“HERMES-IR”を構築しており、学術論文の本文等2万件を公開している。国内外の研究者はもとより、学生の学習にも貢献している。

毎年、本学所蔵の貴重資料やコレクションを公開展示し、展示テーマに即した講演会を開催することにより、社会貢献に資するとともに、学生の学習にも貢献している。

国立6大学（東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京学芸大学、東京工業大学、東京農工大学、電気通信大学）、私立5大学（慶應義塾大学、早稲田大学、上智大学、国際基督教大学、津田塾大学）及び日本貿易振興機構アジア経済研究所とは、図書館間の相互利用協定を結び、学生や教職員の来館利用（館内資料閲覧）等を可能としている。その他の大学図書館等とも、文献複写や資料貸借を相互に行っている。

学内には、附属図書館以外にも、社会科学古典資料センター、経済研究所資料室、社会科学統計情報研究センター資料室及び国際企業戦略研究科図書室があり、蔵書を利用することができる。

LL自習室：

学生各自の学習計画に沿った外国語学習や授業の補習を支援するために、東学習室内にLL自習室が設けられている。音声・映像、マルチメディア教材を個別に視聴できるブースが9台（PCブース2台、AVブース7台）あり、カセットテープ、CD、VHS、DVD、CD-ROM教材での学習ができるようになっている。

自習用教材には外国語科目の言語を含め50以上の言語の教材が揃っており、TOEIC、TOEFL、ドイツ語、フランス語、中国語検定など語学能力試験のための教材もある。

（東学習室の開室時間（祝祭日を除く、月～金曜日 9時30分～16時45分））

(3) 支援体制

学生支援センター：

学生支援センターは、学生相談室とキャリア支援室を包括しており、学生がより有意義な学生生活を過ごせるよう、学内外の諸機関や教員等と連携しながら、全学的視点による支援に努めている。

学生相談室では、学生生活全般におけるあらゆる相談（修学・履修、進路・就職、生活・経済、各種ハラスメント、課外活動、健康、メンタルヘルス、対人関係、留学等）に応じている。室長（1人）のほか、専任の教員（1人）や臨床心理士の資格を持つ常勤カウンセラー（1人）、非常勤カウンセラー（2人）、インテーカー（2人）が相談に応じ、カウンセリングやアドバイス、あるいは関係機関（学務部窓口、学内関係部署、学外諸機関等）とのコーディネート等を行っている。2011年度に寄せられた相談の件数は、延べ1,918件（来談者実数は272人）にのぼり、本格的にオープンした2005年4月から増加傾向にある。相談内容も、メンタルヘルス、対人関係に関することから、生活相談まで多岐にわたっている。開室時間は、月曜日～金曜日（祝日を除く）の10時00分～17時00分となっている。また、ホームページも開設している。

(<http://www.hit-u.ac.jp/soudan/counseling/index.htm>)

キャリア支援：

① キャリア支援室の体制

キャリア支援室長（1人）に加え、『学部部門』は、シニアアドバイザー（1人）、キャリアアドバイザー（2人）が進路・就職相談に応じている。

2011年度に開設した『大学院部門』は、「社会科学系大学院におけるパッケージ型キャリア支援プログラム」により3年間の計画として予算化され、3人の特任講師がアカデミックキャリア支援、ノン・アカデミックキャリア支援、高度職業人養成エリアを担当している。

そのほか、技術補佐員2人、事務補佐員3人、RA2人を含め14人が構成員となっている。

② ガイダンスと説明会等の実施

毎年11月第一水曜日に開催する『就職総合ガイダンス』では、『就職の手引き』と『就職活動体験記』を配付し、就職活動の心構えや就職スケジュールなどを紹介しており、学部3年生、修士1年生の約700人が参加している。

2011年度学内会社説明会については、参加企業276社が来学し、参加学生は延べ17,778人となった。

ブース形式で開催する合同会社説明会については、冬学期は12回開催138社、参加学生は延べ15,079人となった。

総合職中央省庁セミナー、霞が関講演会、公認会計士制度説明会、会社四季報の読み方講座、日経新聞の読み方講座、就職ビジネスマナー講座などの就職セミナーについては、11回開催、参加学生は延べ約1,100人となった。

③ インターンシップの実施

2009年度以降、授業科目インターンシップを、学部2、3年生対象のキャリア教育と、キャリア支援として大学院修士1年生を対象として開講し、2012年度は協力企業19社に学生70人が参加した。受入企業は、三井住友銀行、第一生命、国際交流基金、曙ブレーキ工業などとなっている。

本インターンシップは、2年生から自らのキャリアを考える取組となっており、少人数で各社それぞれの特性を生かしたプログラムと事前・事後研修により現場体験の理解を深めている。

④ キャリアゼミ

2006年度に大学教育研究開発センターが行うキャリアゼミが新設され、7年目の2012年度は、「銀行・証券」、「自動車」、「マスコミ」、「通信」など19講座を開講し、学生121人が参加している。

講師は、各界のリーディングカンパニーとして日本の産業界を担っているOB・OGが務め、時にはゼミの場所を、東京都心にある講師の職場に移すこともある。各分野のリーダーの働く姿を通じて、社会との関わり方を学べる機会を提供している。

⑤ 進路相談

卒業生であるアドバイザーによる進路・就職相談は、2011年度は2,401件となった。最も多い相談内容は、エントリー625件、次いで面接507件、就職活動全般461件、進路相談304件、内定辞退・複数企業選択160件となっている。2011年度に就職した学生825人のうち、621人の相談を行った。

⑥ 外国人留学生在が日本企業に就職するための支援

2011年秋に外国人留学生向け就職支援セミナーを開催した。58人の学生が3日間にわたり自己分析、自己PR、エントリーシート、集団面接の講義のあと、5業種5社の人事担当者による模擬面接を体験している。

⑦ 情報提供

求人情報、会社説明会、就職セミナー、インターンシップ情報、キャリア支援室の利用方法をホームページ及びツイッターで学生に提供している。

また、キャリア支援室内には、求人情報、インターンシップ情報を掲示し、Uターン求人票、既卒者向け求人、障害学生向け情報誌及び各種情報誌を提供している。

留学生：

本学は、教育・研究の国際化に力を入れており、2012年5月1日現在の外国人留学生数は、文部科学省国費外国人留学生157人を含め、私費外国人留学生、交流学生等、あわせて50か国・地域から677人で、全学生数の約10.5%を占めている。

第2期中期目標・中期計画において、世界で通用する多様な人材を育成するため、学部・大学院を通じて学生の国際交流を推進するなど、教育の国際化をすすめることとしており、短期の派遣及び受入れを推進し、また、海外語学研修の実施等を含め交流協定校を中心に毎年300人程度を派遣するとともに、受入れも同程度を目指すこととしてい

る。

これらの課題への取組のため、2010年2月より、従来の「国際戦略本部」を学長を本部長とする「国際化推進本部」に拡充・整備し、学長のリーダーシップのもとに全学一丸となって加速度的に国際化を推進する体制とした。さらに、本部を支える「国際化推進室」を置き、国際化に向けての機動的な役割が果たせるようにした。

また、従来の国際交流の窓口であった「留学生センター」を、国際競争力のある学生を育成するという観点から、「国際教育センター」（日本語教育部門、留学生相談部門、国際交流科目部門の3部門制）に拡充・整備を図るとともに、留学生課と研究支援課の学術国際交流業務を統合して、「国際課」を設置した。

なお、外国人留学生用宿舎としての国際交流会館（国立キャンパス）及び外国人留学生と日本人学生混住の国際学生宿舎（小平国際キャンパス）が構内に整備されている。

障害のある学生：

本学では、心身に障害のある学生に対し、教育及び学生生活における支援を適正に行うための障害学生支援委員会を設置し対応している。障害学生支援の一環として、発達障害者の支援経験を有する非常勤カウンセラー（臨床心理士）や障害学生支援相談員がサポートしている。

なお、身体に障害のある学生に対しては、学生生活を送る便宜を図るため、エレベーター、身障者用トイレ、身障者控室、身障者優先駐車場、自動ドアの設置などバリアフリー化を推進している。

また、メンタルに障害のある学生に対しては、カウンセラーによるカウンセリング体制を整備し、遠隔講義などITを利用した修学支援も実施している。

保健センター：

保健センターは、学生・教職員の健康をサポートする機関として、定期健康診断、診察、カウンセリング、応急処置、病院紹介、健康・栄養相談等を実施している。

センター長、精神科医師1人、臨床心理士1人、保健師2人、管理栄養士1人が常勤で対応するとともに、学校医4人、非常勤臨床心理士2人も加わり、それぞれ専門的立場からサポートを行っている。

各種ハラスメントに関して：

本学は、各種ハラスメントに対して厳格な姿勢で臨んでいる。2000年4月に「セクシュアル・ハラスメント防止規程」及び「ガイドライン」を作成した。2004年4月には「アカデミック・ハラスメント防止規程」を作成し、ハラスメントの防止と排除、ハラスメントに起因する問題が生じた場合に適切に対処するための措置について定めている。また、2000年には、全学的相談窓口として「セクシュアル・ハラスメント相談室」を開設し、専門カウンセラー1人を配置した。その後様々な改定を経て、2010年4月からは「ハラスメント相談室」と名称を変更し、現在は2人の専門相談員が各種ハラスメントについての相談を受けている。相談窓口としては、この他に各研究科をはじめ各部署に14人の相談員（教職員）が配置され、ハラスメントに関する措置については、「対策委員会」が対応している。なお、現在、より多様なハラスメントに対応できる体制を作るために、2013年3月を目途に規則及びガイドラインの大幅な見直しをはかっている。

経済面の援助：

日本学生支援機構の奨学金受給者は、第一種、第二種、併用を合わせて、2011年度末現在で全学生の約25%（2011年度）となっている。その他、民間奨学団体や地方公共団体の奨学金で大学を経由して募集するものについては、学生支援課が学内選考の上、推薦を行うなどのほか、情報提供や出願手続き等に関して積極的に支援している。

また、一橋大学独自の奨学金を7件創設し、手厚く支援をしている。

各種奨学団体、地方公共団体からの奨学金受給者は3.3%（2011年度）となっており、日本学生支援機構の受給者とあわせると、全学生の28.3%となっている。

また、授業料・入学金免除に関しては授業料免除選考基準が定められている。

家庭教師などのアルバイトは、学生支援課で紹介している。

学生宿舎は、国立市内に「国際学生宿舎中和寮」、小平国際キャンパス構内に「国際学生宿舎」がある。

課外活動の援助：

本学の課外活動サークルとしては、自治団体連合18団体、体育会39団体、文化団体連合45団体（届け出のあった団体数）、その他多数の同好会が存在する。サークル活動を支援する施設として、課外共用施設、クラブハウスなどの多目的施設のほか、陸上競技場、野球場、ラグビー場、多目的グラウンド、テニスコート、体育館、武道場、トレーニングルーム、屋外プール等の運動施設がある。顧問教員を置いている各サークルには、助言・指導にあたっている。

他に、学生の自主的な課外活動として、大学の学園祭である「一橋祭」や「KODAIRA祭」が開かれている。こうした課外活動には、学生支援課学生生活係が支援にあたっている。また、すべての課外活動を対象に各種の音響・照明・映像機器などの物品を貸し出している。

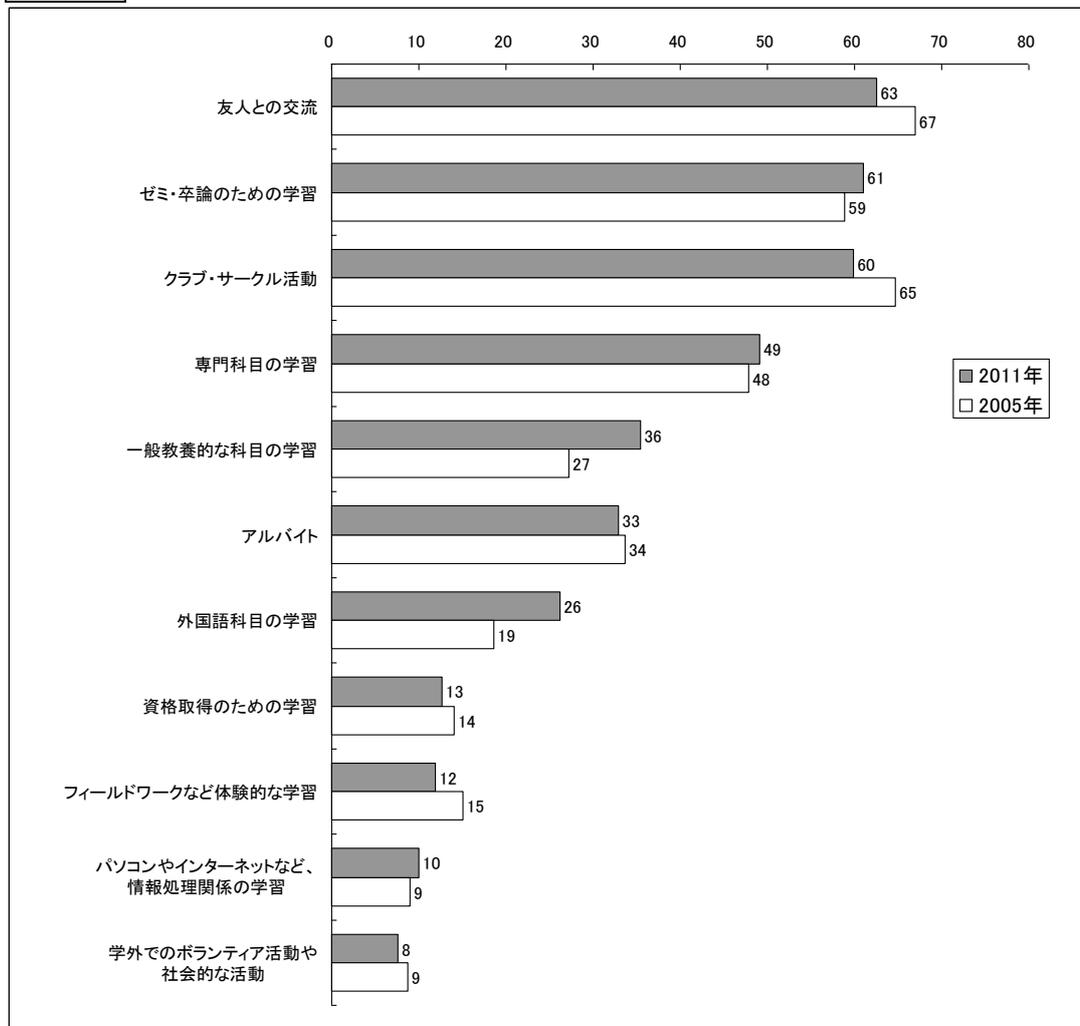
2 全学的教育事項に対する卒業生からの評価と課題

本項では、全学的教育事項について、卒業生がどのような評価を与えているかを、アンケート結果を通じて分析する。それぞれの項目について、各学部別卒業生のアンケート結果は別項において分析されているので、本項では、卒業生全体の回答結果及び卒業年次の違いによる評価の違い、及び前回（2007年報告書）からの変化を調べることで、全学的教育事項に関する本学のこれまでの取組が、卒業生にどのように評価されてきたかを分析する。

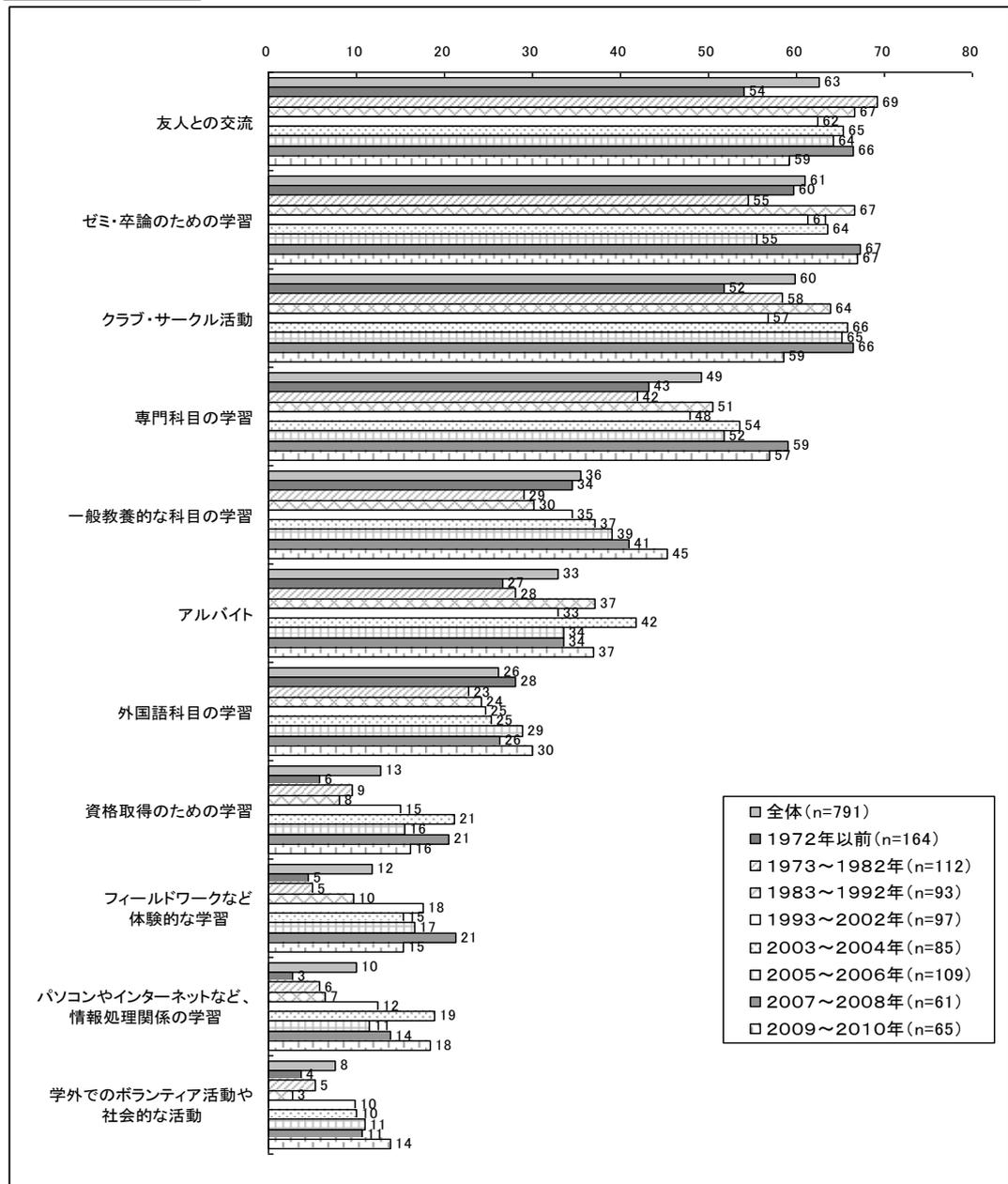
なお、以下の分析において卒業年次による評価の違いを検討する際には、①それぞれの在学時における大学の全学的教育の実態の変化を反映している場合と、②年齢すなわち卒業後の時間の経過や社会人としての経験の蓄積さらには各年次の卒業生が帰属している世代によって大学観や在学時の自らの経験についての解釈が変化している場合の少なくとも二つの可能性があることに留意する必要があることは言うまでもない。しかし②についての解釈や評価はこの調査だけでは結論を出すことが難しい問題であり、本項でも原則としてアンケート結果の分析から①について分かる事項を中心に分析をしていきたい。

大学生活で取り組んだこと

<全体>



<卒業年次別>



まず、卒業生から見て在学時に取り組んだこととして、「友人との交流」(63ポイント)「ゼミ・卒論のための学習」(61ポイント)「クラブ・サークル活動」(60ポイント)「専門科目の学習」(49ポイント)が、前回実施した2005年度調査と、今回実施した2011年度調査において上位4項目としてあがっており、ゼミやクラブ・サークルを中心として良く学び良く遊ぶ一橋大学の学生文化をよく示していると指摘できる。ただし、注目すべきことは、「友人との交流」(-4ポイント)、「クラブ・サークル活動」(-5ポイント)が微減の傾向を示しているのに対して、学習項目である「ゼミ・卒論のための学習」(+2)、「専門科目の学習」(+1)、「一般教養的な科目の学習」(+9)、「外国語科目の学習」(+7)が微増ないしはっきりと増加の傾向を示している点である。

この点については、卒業年次別で見るとさらにはっきりした傾向を読み取ることができる。すなわち、最新の卒業生集団である(2009-2010年卒業者)では直近の卒業生集団(2007-2008年、2003年以降はほぼ同じ傾向)と比較して、「友人との交流」(59)、「クラブ・サークル活動」(59)がともに-7ポイントとなっており、その一方で、学習項目

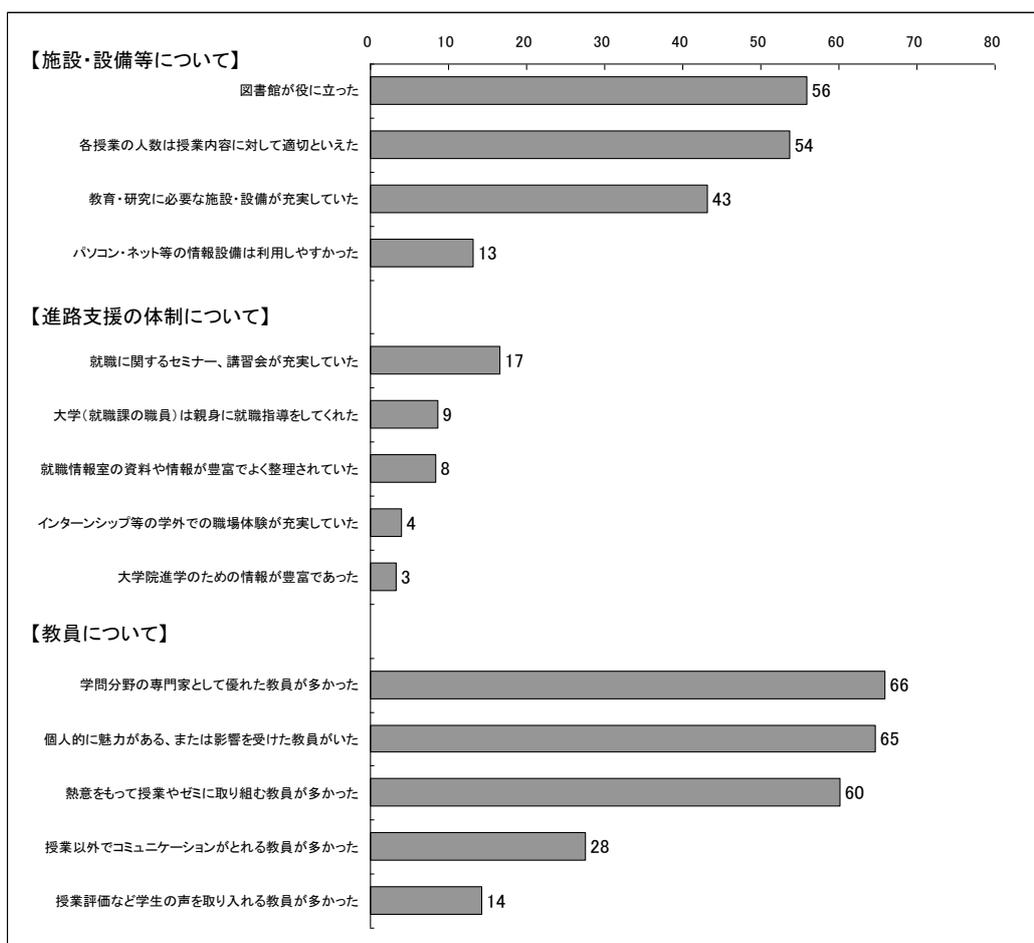
である「ゼミ・卒論のための学習」(67)が卒業生全体平均に対して+6ポイント、専門科目(57)が+8ポイント、「一般教養的な科目の学習」(45)が+9ポイント、「外国語科目の学習」(30)が+4ポイントとなっている。

これらの数字は、近年の一橋大学において行われてきた一連のカリキュラム改革によって、学習への取組が着実に向上したことの一つの表れとして評価できるのではないかとと思われる。

「フィールドワークなど体験的な学習」(12ポイント)、「学外でのボランティア活動や社会的な活動」(8ポイント)といった校外活動・社会活動は1990年代以降に入学した30代の卒業生から取組が顕著に増加しているが、必ずしも一本調子に伸びている状況ではなく、他項目との比較ではまだ低い水準にとどまっている。その一方、30代(概ね1990年代まで)の卒業生と比較して20代(2000年代)の卒業生は「アルバイト」にととてもよく取り組んだ(13.2%)比率が逡減している(30代に対して4.7%減少)。これは一面で大学における学習負担が増加した結果であり、また一面において就業機会の減少を反映している結果であると思われる。その一方、直近の卒業生集団(2009-2010年卒)については「アルバイト」にととてもよく取り組んだ(18.5%)がすべての卒業年次集団をも上回って直近の卒業生集団(2007-2008年)に対して+9.7%となった。この急激な増加は、学費・生活費の相当部分を保護者の収入だけでなく自ら支弁しなければならない学生が増加している現状を意味している可能性が指摘できるだろう。

教員評価

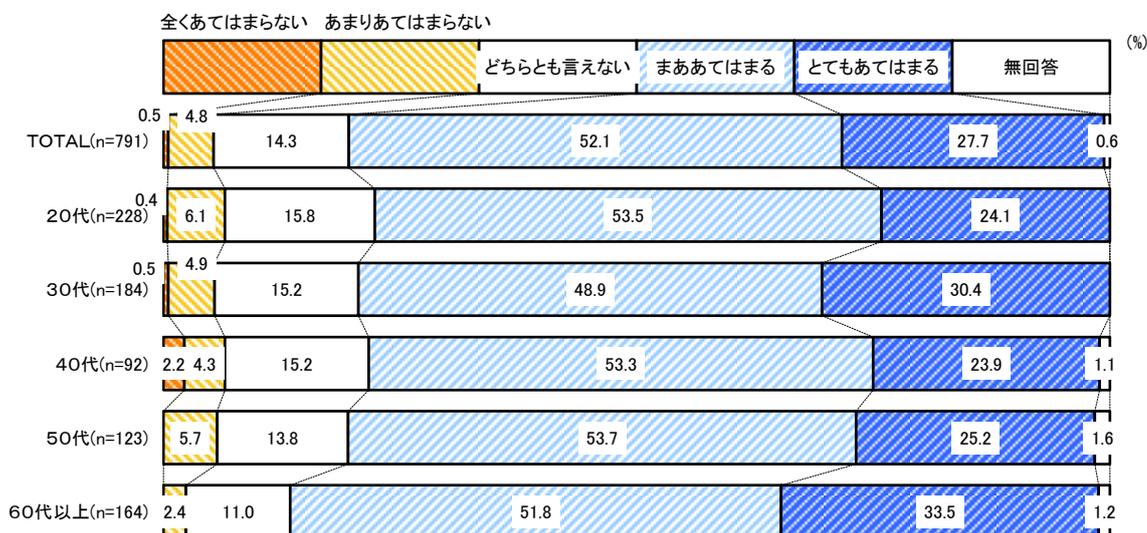
<全体>



卒業生の在学時に関する「施設・設備等」、「進路支援の体制」、「教員」についての評価の概要を次に示す。

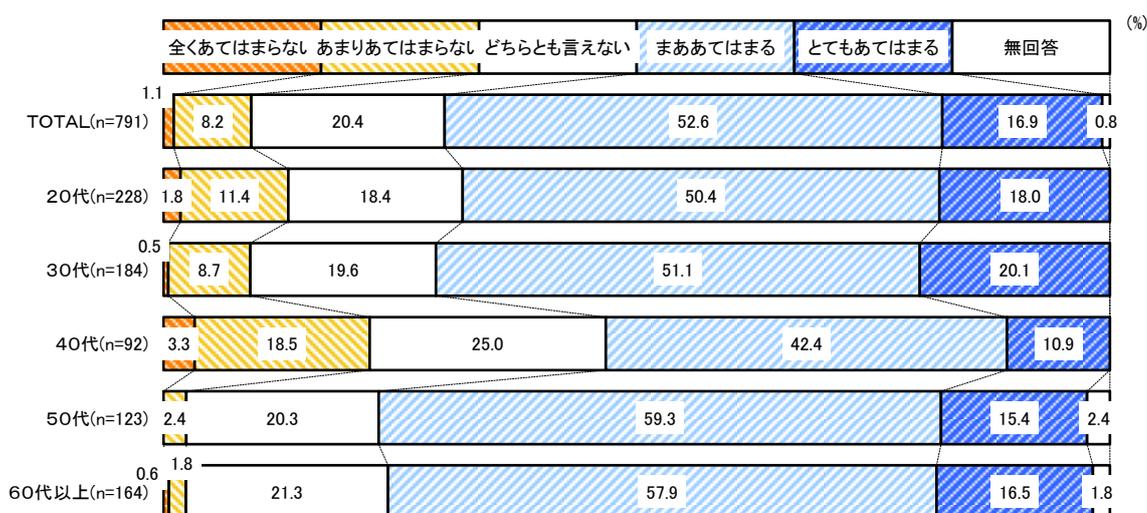
まず、「施設・設備等」についての質問項目四つのうち、卒業年次による変化があまり見られない項目として「各授業の人数は授業内容に対して適切といえた」をあげることができ、他大学との比較では授業の人数をある程度抑えてきたことに対する肯定的な評価として見るができると思われる。

Q3【1】 在学時の一橋大学評価 A)施設・設備 等について 各授業の人数は授業内容に対して適切といえた年代

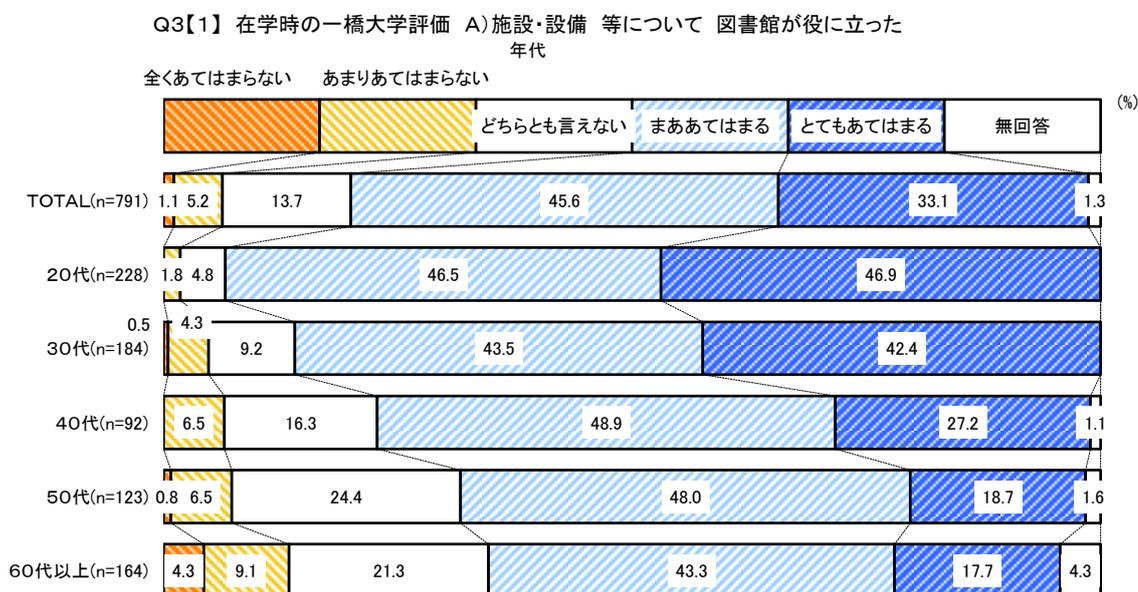


次に、「教育・研究等に必要な施設・設備が充実していた」という評価は、国立・小平キャンパス統合以前の1983－1992年の卒業生において、もっとも低い数字を示し、キャンパス統合以後の卒業生においては評価が回復していることがわかる。統合後にキャンパスに対する在学時の満足度が比較的高いことを示しているといえるだろう。

Q3【1】 在学時の一橋大学評価 A)施設・設備 等について 教育・研究に必要な施設・設備が充実していた年代

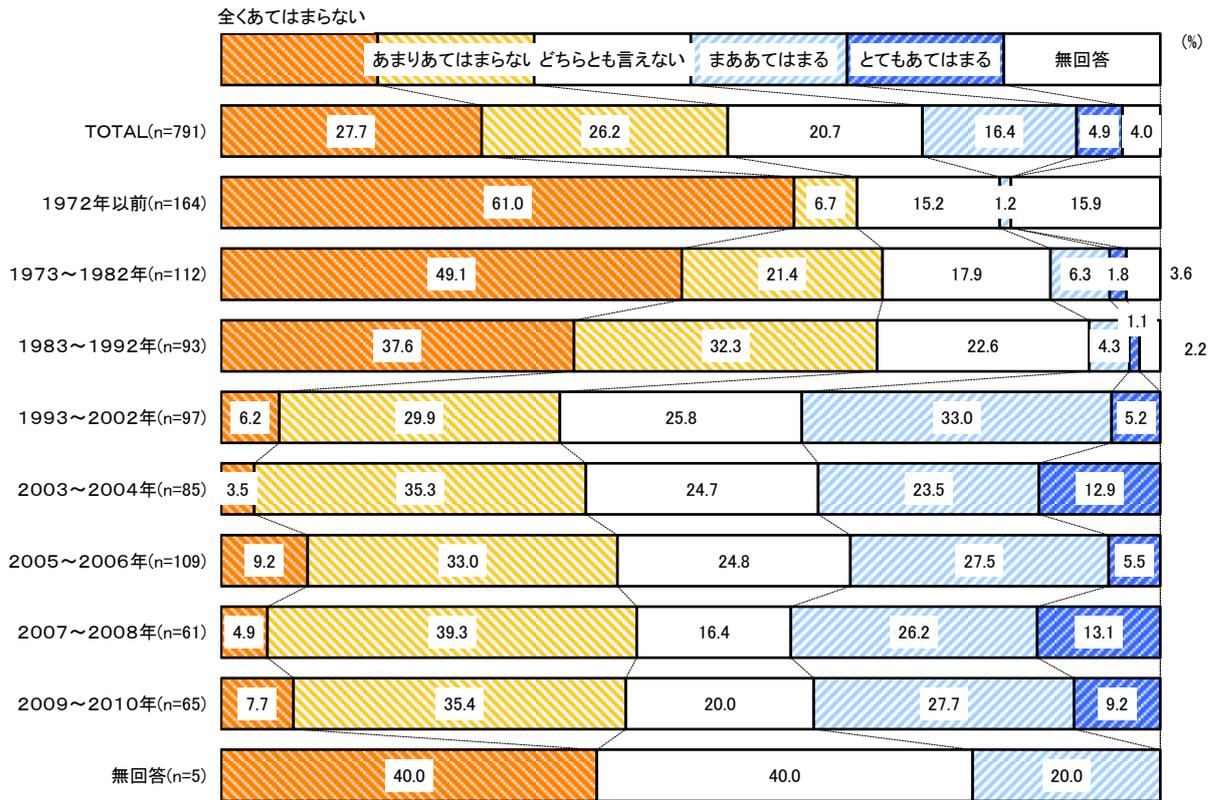


さらに注目されるのは、キャンパス統合後の1996年に完成した図書館増改築による学習図書館機能の充実により、新図書館を利用した卒業生の世代以降「図書館が役に立った」という回答が大きく増加したことである。さらに、開館時間の延長により近年の卒業生は図書館を長時間利用する経験をする者が増えていることも、肯定的評価が遡増している背景として指摘することができるだろう。



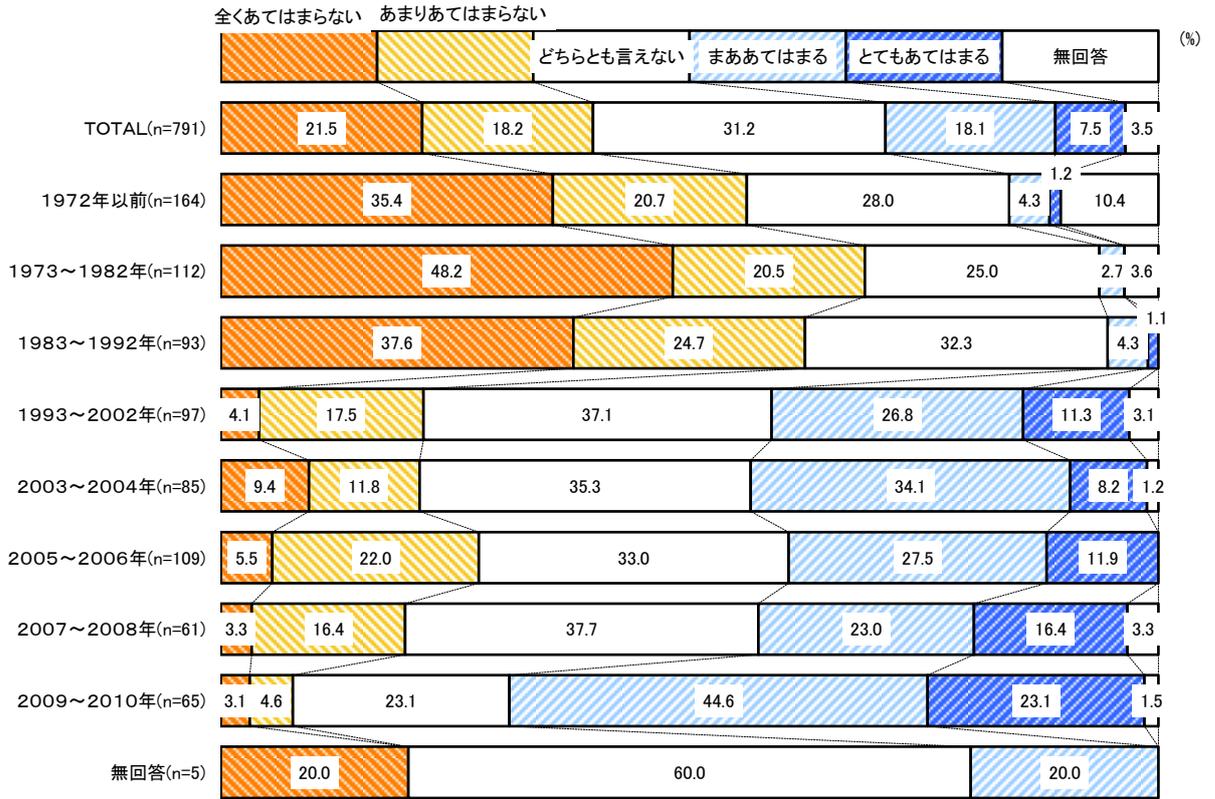
以上の比較的、肯定的評価が高い3項目に対して「パソコン・インターネット等の情報設備は利用しやすかった」(13ポイント)は低い値を示している。その卒業年次別の動向を見ると、パソコン・インターネットの利用が始まった1990年代以降、2003-2004年の卒業生、2007-2008年の卒業生において評価がいったん高まったあと下がるというパターンを繰り返しており、設備の更新が学生のニーズに必ずしも追いついていない状況を示していると考えられる。この項目に対する評価を上げていくことが本学の一つの課題として指摘できるだろう。

Q3【1】 在学時の一橋大学評価 A)施設・設備 等について パソコン・ネット等の情報設備は利用しやすかった
卒業年次

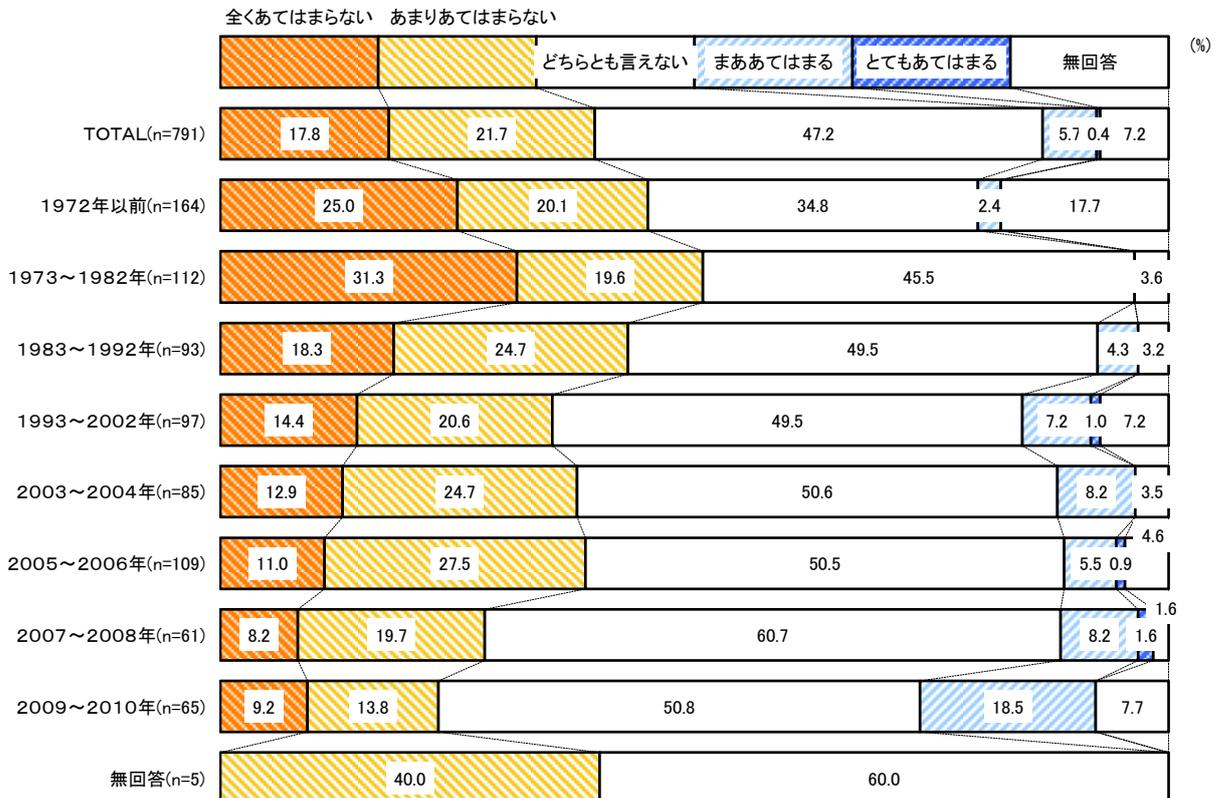


次に「進路支援の体制」について見る。かつて、一橋大学の学生は、就職活動の条件がきわめて恵まれており、大学や教員に依存することなく希望する企業あるいは自ら見つけた企業に就職することができると考えられていたがゆえに、大学の進路支援に対する期待・評価がともに低かった時期が長かった。こうした状況は大きく変化し、一橋大学も学生の就職・進学などのキャリア形成支援に力を注ぎ、2011年4月には全国初めての試みとして大学院部門も発足させている。その一方で、学部生向けキャリア支援体制の充実も進み、就職を希望する多くの学生がキャリア支援室を利用するようになってきた。学内で開催されている就職ガイダンスや会社説明会に参加する学生も多数に上る。次のグラフからも、直近の2009－2010年度の卒業生においては「就職に関するセミナー、講習会が充実していた」に対する評価が急上昇したことが読み取れる。また、「インターンシップ（企業研修）等の学外での職場体験する機会が充実していた」の充実を上げる卒業生も2007－2008年度以降、増加しており、学生の認知度・利用度は着実に改善されつつあると指摘できるだろう。大学院支援部門の設置の効果も直近の卒業生において確認することができる。

Q3【1】 在学時の一橋大学評価 B)進路支援の体制について 就職に関するセミナー、講習会が充実していた
卒業年次

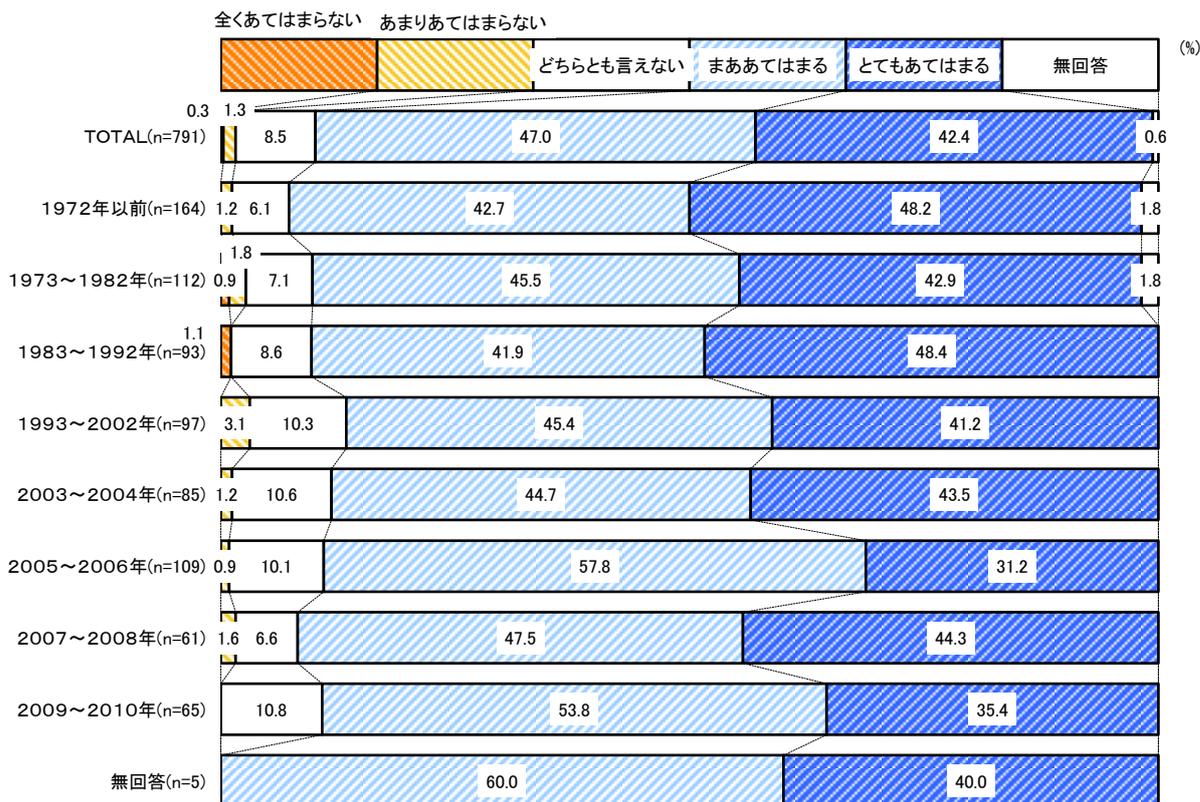


Q3【1】 在学時の一橋大学評価 B)進路支援の体制について 大学院進学のための情報が豊富であった
卒業年次



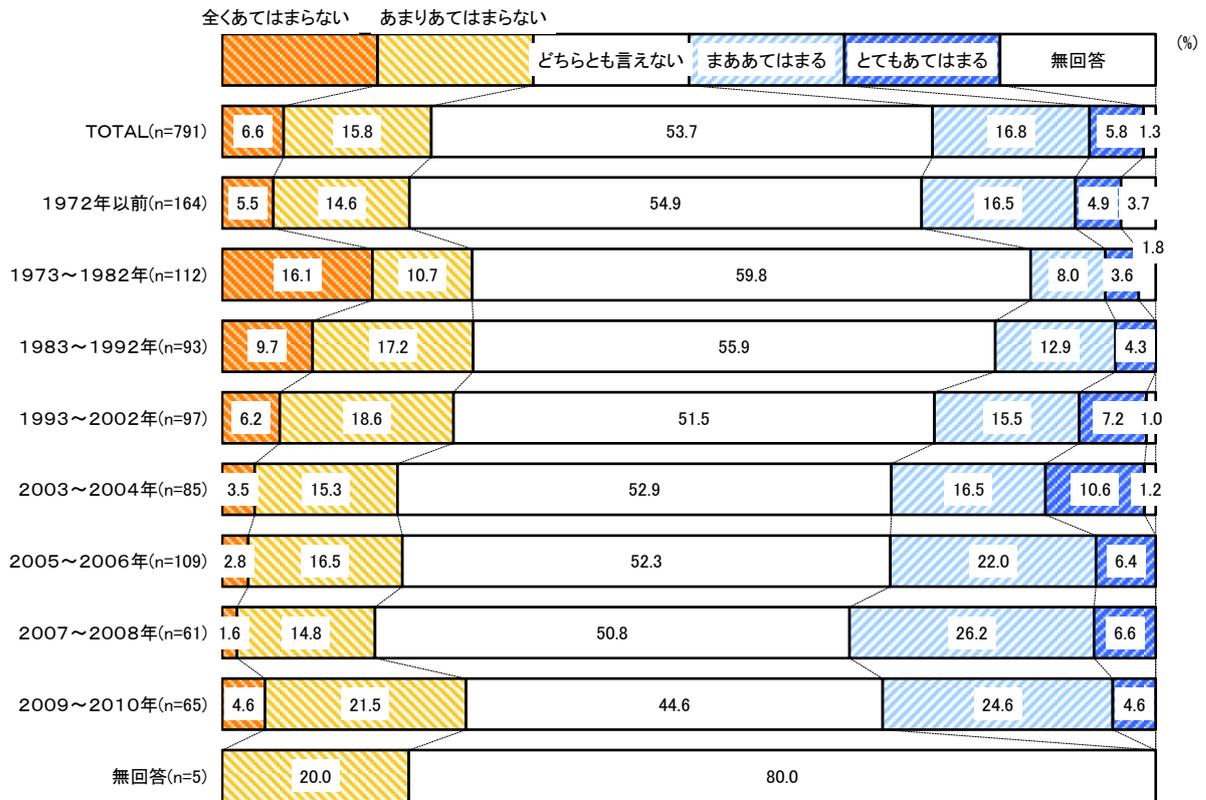
次に「教員」に対する評価を見る。一般に卒業生の「教員」に対する評価は高く、特に「学問分野の専門家として優れた教員が多かった」(66ポイント)、「個人的に魅力がある、または影響を受けた教員がいた」(65ポイント)、「熱意をもって授業やゼミに取り組む教員が多かった」(60ポイント)という項目はいずれも高いポイントとなっている。卒業年次別の変化を見ても、年次により若干の数字に出入りはあるものの、基本的には大きな違いはない(あえていえば、「学問分野の専門家として優れた教員が多かった」という評価に若干の漸減傾向を見て取ることができる)。

Q3【1】 在学時の一橋大学評価 C)教員について 学問分野の専門家として優れた教員が多かった
卒業年次



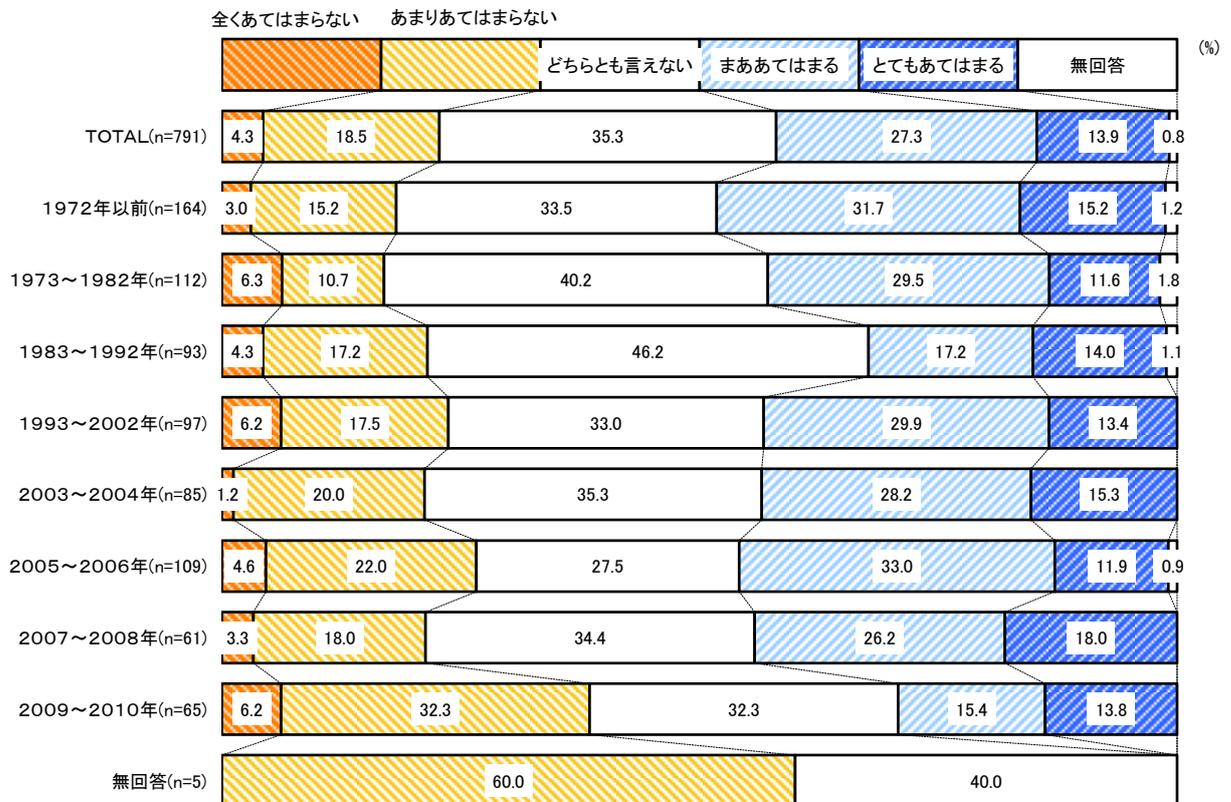
これに対して評価が高くない項目としては、まず、「授業評価など、学生の声を教育改善に取り入れる教員が多かった」という項目(14ポイント)をあげることができる。その卒業年次別の推移を見ると、全体として徐々に「授業評価など、学生の声を教育改善に取り入れる教員が多かった」という評価が増えてきてはいるものの、授業評価アンケートの導入の前後で大きな変化は見られず、むしろ、近年の卒業生の中でこの項目について「とてもあてはまる」と回答する学生が明らかに減少していることが指摘できる。全学一律の授業評価アンケートの導入は卒業生の評価に影響を与えておらず、学生から見て個々の教員が「学生の声を取り入れる」仕組みとしてはあまり強い印象を残していないようである。

Q3【1】 在学時の一橋大学評価 C)教員について 授業評価など学生の声を取り入れる教員が多かった
卒業年次



もう一つ学生の評価が意外に低い項目として、「授業以外でコミュニケーションがとれる教員が多かった」という項目（28ポイント）をあげることができる。この点については、一橋大学は後期課程でのゼミナールにおいて学生と教員がきわめて近い雰囲気の中かで学習する環境があるために、学生の教員に対するコミュニケーションの期待度も高いがゆえに、評価がかえって低めに出るのではないかという仮説を考えることも可能であろうが、明瞭な結論を出すことはできない。気になるのは、直近の卒業生集団（2009～2010年）において、その前の集団と比較して評価が急落し、全体でも最低（21.5ポイント）となっていることである。この傾向が有意の変化を意味しているかどうかについてはただちには分からないが注意を要するだろう。

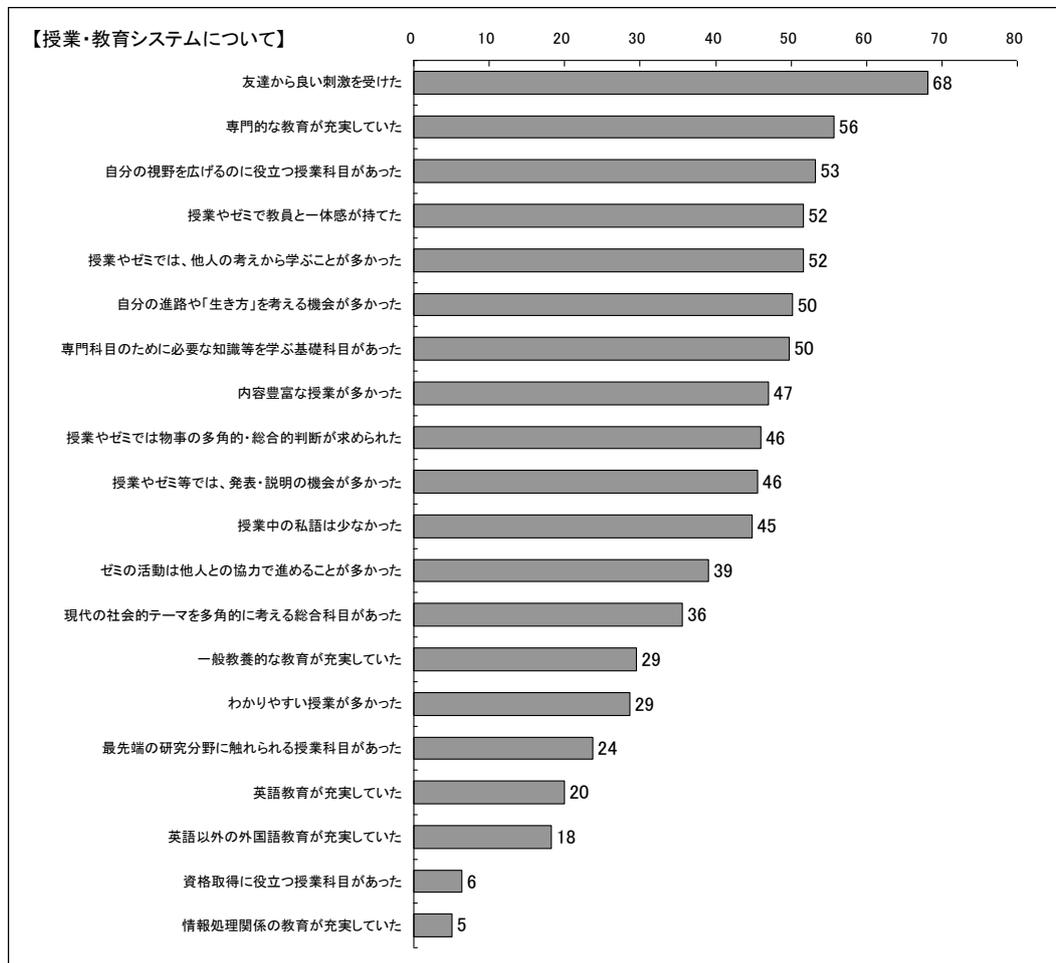
Q3【1】 在学時の一橋大学評価 C)教員について 授業以外でコミュニケーションがとれる教員が多かった
卒業年次



授業・教育システムについて

次に「授業・教育システム」についての20項目にわたる評価点についての回答を検討する。

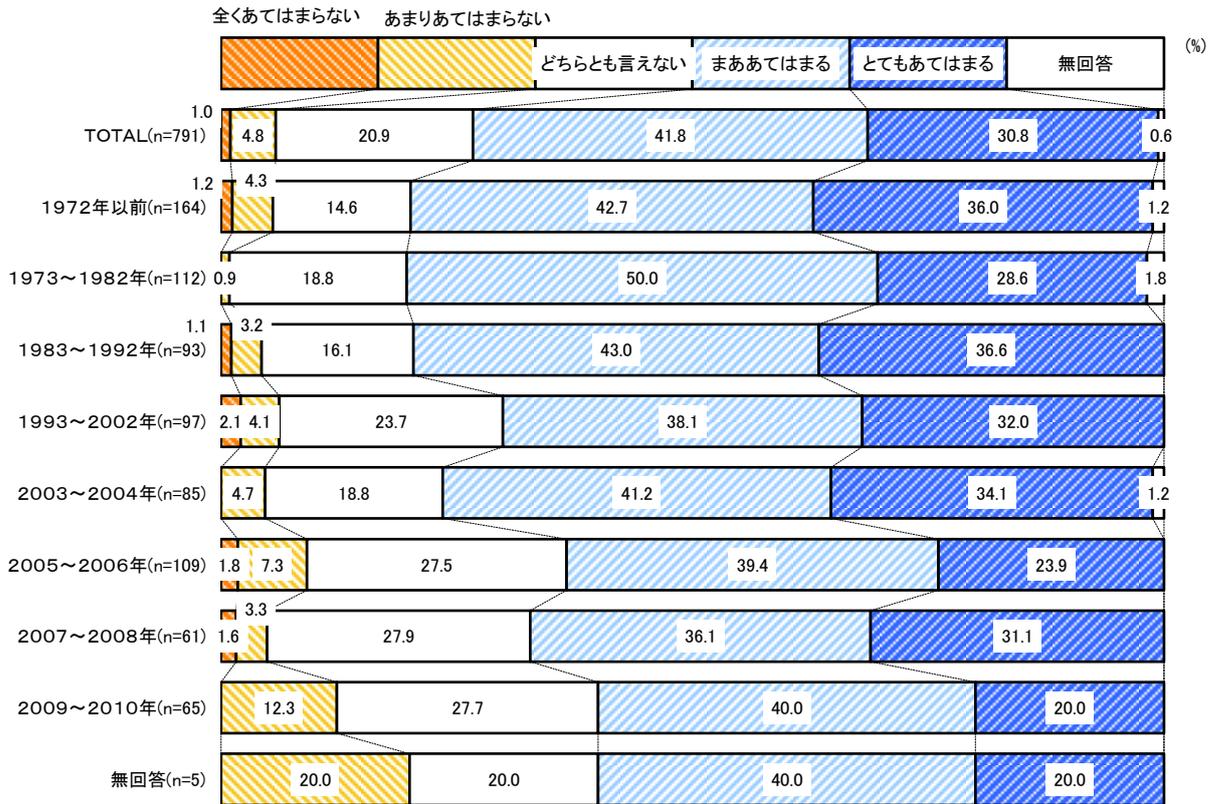
<全体>



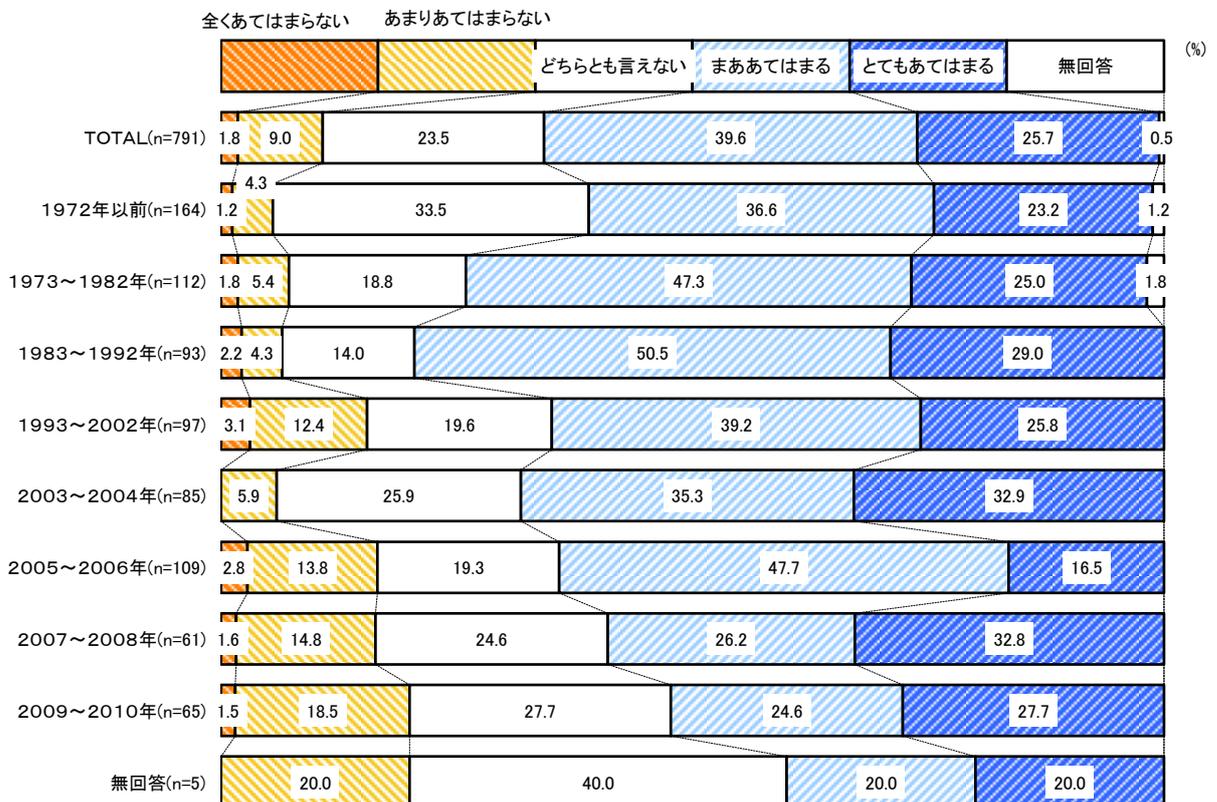
上記に評価点の高い順に項目を整理した。非常に高いポイントを示している「友達から良い刺激を受けた」（68ポイント）は、ゼミや少人数講義における討論・発表を中心とした一橋大学の授業・教育システムから生まれた評価と見てよい。授業やゼミで「授業やゼミで教員と一体感が持てた」（52ポイント）、「授業やゼミでは、他人の考えから学ぶことが多かった」（52ポイント）、「授業やゼミでは、物事の多角的・総合的判断が求められた」（46ポイント）、「授業やゼミ等では、発表・説明の機会が多かった」（46ポイント）、「ゼミの活動で、他人との協力ですすめることが多かった」（39ポイント）も同様である。

しかし、近年の卒業生集団においては、これらの項目のなかで顕著な変化を示している場合がある。すなわち、「授業やゼミで教員と一体感が持てた」は直近の2009－2010年度の卒業生では40ポイントと全体平均をかなり下回っている。「授業やゼミ等では、発表・説明の機会が多かった」も40ポイントで逡減傾向にある。これらは、教員の多忙化の影響がゼミ運営にまで及んで学生と教員、学生同士の交流の機会を減じさせている可能性を示唆している。

Q3【1】 在学時の一橋大学評価 D) 授業・教育システムについて 授業やゼミで教員と一体感が持てた
卒業年次



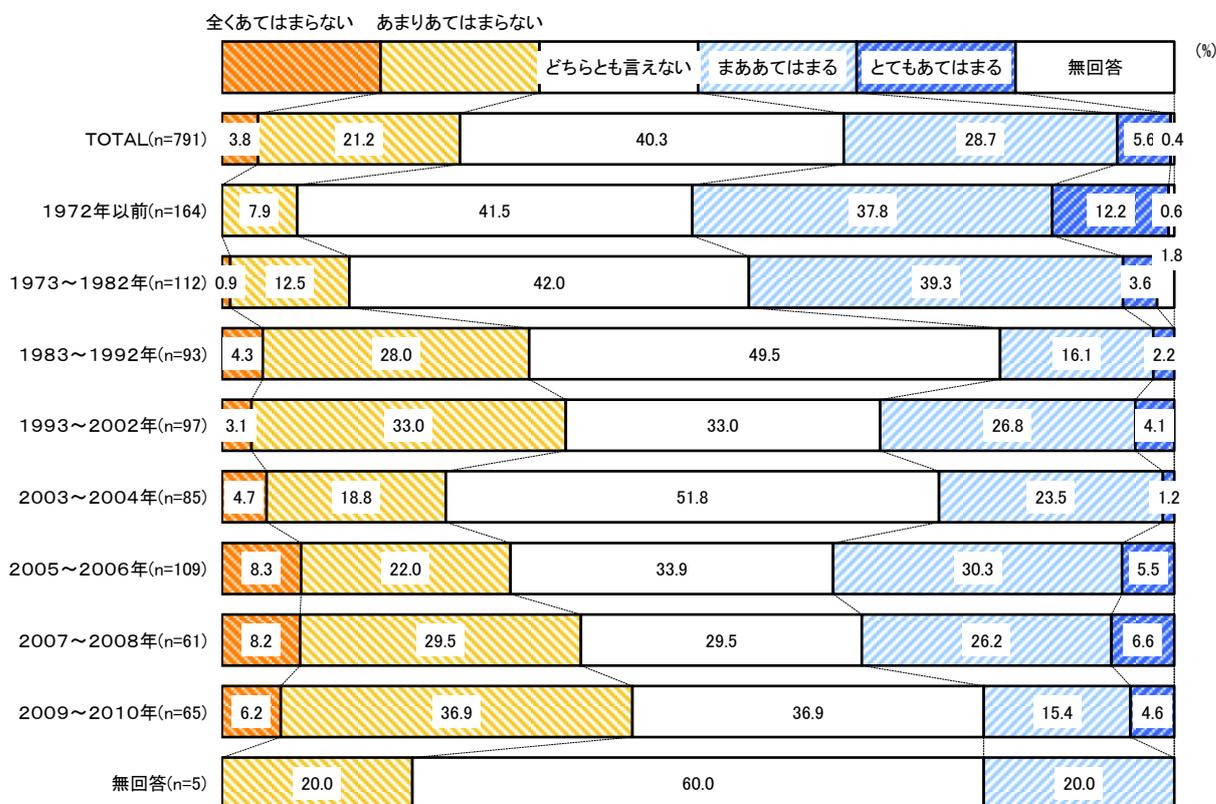
Q3【1】 在学時の一橋大学評価 D) 授業・教育システムについて 授業やゼミ等では、発表・説明の機会が多かった
卒業年次



ゼミ・少人数授業関連以外で卒業生からの評価が高い項目としては、「専門的な教育は充実していた」(56ポイント)、「自分の視野を広げるのに役立つ授業科目があった」(53ポイント)、「専門科目のために必要な知識等を学ぶ基礎科目があった」(50ポイント)「自分の進路や「生き方」を考える機会が多かった」(50ポイント)、「内容豊富な授業が多かった」(47ポイント)などをあげることができる。「現代の社会的テーマを多角的に考える総合科目があった」という回答も、キャンパス統合(1996年)以来のカリキュラム改革を反映してそれ以後の卒業生の間では高い比率(平均36ポイントに対して、2007-2008年の卒業生が48ポイント、2009-2010年の卒業生が43ポイント)を示している。このように、学問にふれる喜びを感じさせるような専門的で高度な授業や、視野を広げる多角的で新鮮な授業科目に対する評価が高い一方で、「一般教養的な教育が充実していた」(29ポイント)、「わかりやすい授業が多かった」(29ポイント)の評価は相対的に低く、この点に課題があることを示している。

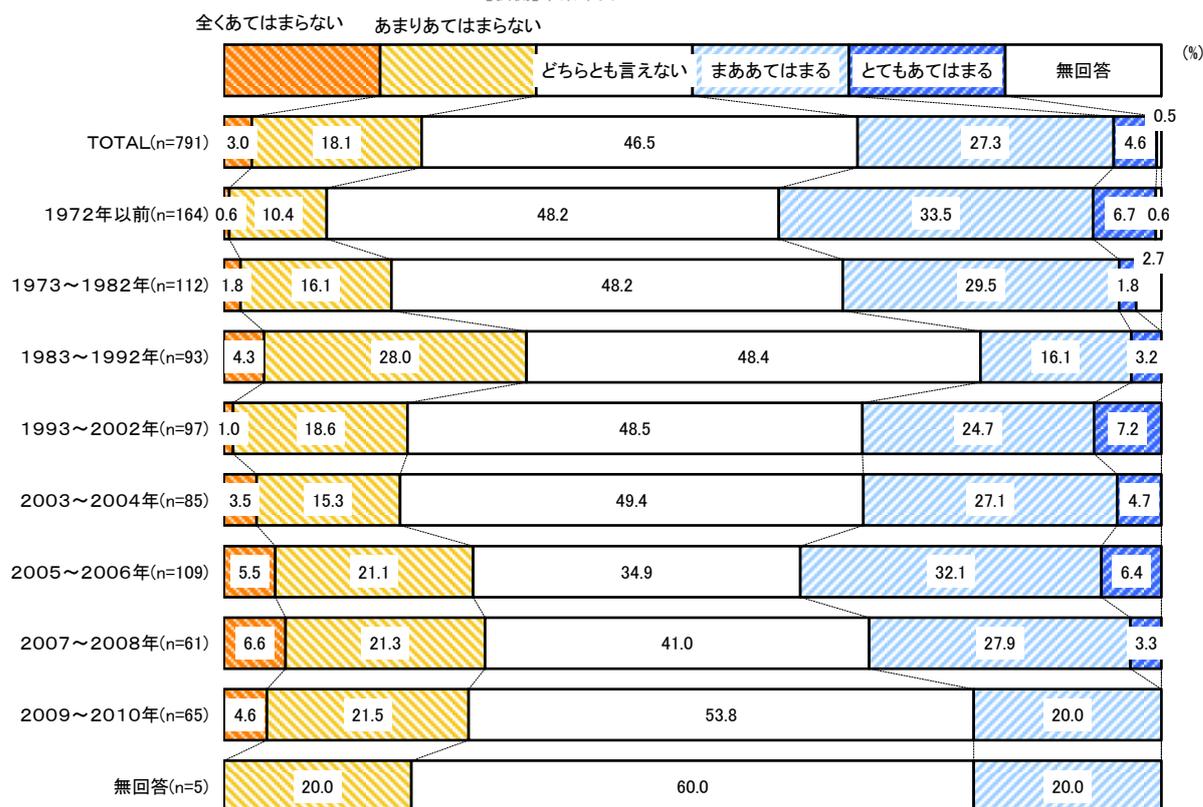
さらに、「英語教育が充実していた」、「英語以外の外国語教育が充実していた」に対する評価も相対的に低い(それぞれ20, 18ポイント)。この両項目ともに、卒業年次別で1983-1992年度卒業生(英語10, 英語以外11ポイント)と直近の2009-2010年度卒業生(英語11, 英語以外10ポイント)の評価が低いことは気にかかる点である。その原因はこのアンケート結果からだけではただちに推測することはできない。そのほか「資格取得に役立つ授業科目があった」、「情報処理関係の教育が充実していた」の教育の充実度に対する評価も低い(各6.5ポイント)。これらは開講数に限りがあるために、このような結果になることはある意味でやむを得ない。

Q3【1】在学時の一橋大学評価 D)授業・教育システムについて 英語教育が充実していた
【表側】卒業年次



Q3【1】 在学時の一橋大学評価 D) 授業・教育システムについて 英語以外の外国語教育が充実していた

【表側】卒業年次

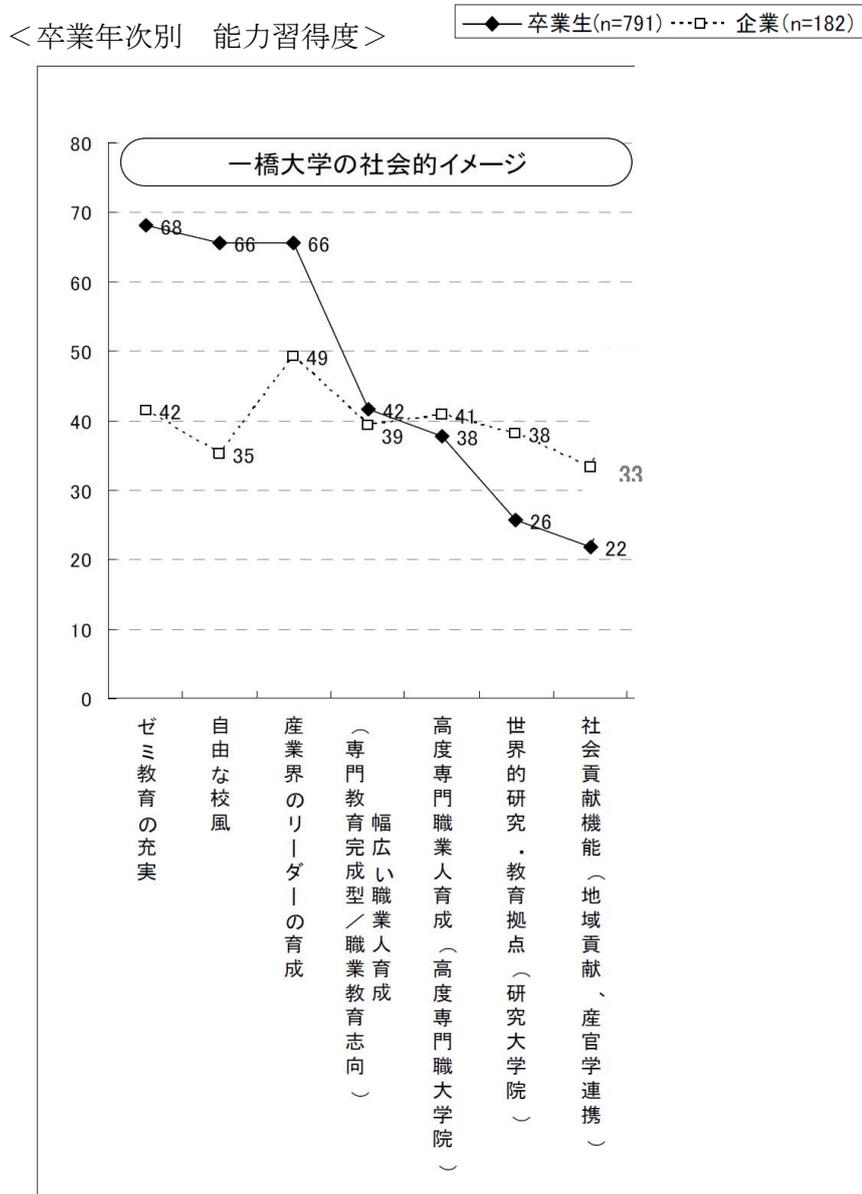


本調査は「充実」していたか、そのような授業が「多かった」という印象をもっているかを聞くもので、必ずしもそうした授業に対する在学時のニーズについてたずねたものではない。このため、こうした「充実度」等で評価が低かった項目については、学生のニーズの有無についても十分に精査することが必要であろう。

3 全学的教育事項に対する企業からの評価と課題

(1) 一橋大学の特色に対する企業からの評価

ここでは、一橋大学に対して企業からみた社会的イメージを、卒業生から見た社会的イメージとの差異に着目して検討する。

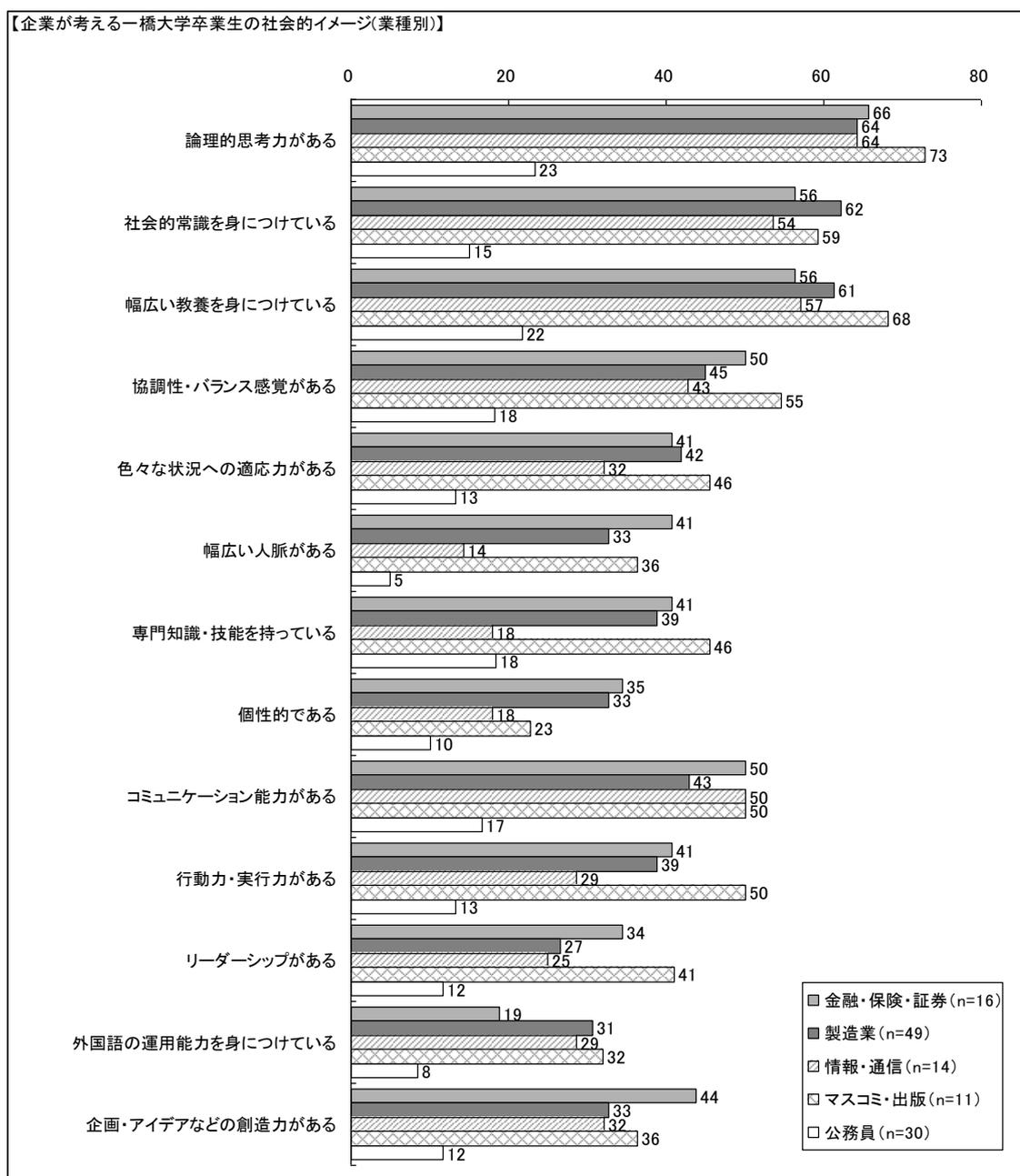


まず、卒業生の持つイメージに比べて企業からのイメージの方が低いものとして、「ゼミ教育の充実」、「自由な校風」、「産業界のリーダーの育成」の3点がある。とりわけ、自由な校風というイメージを卒業生側が持つのに対して企業サイドはそうは見えていない、という点が興味深い。ただ、「産業界のリーダーの育成」に関しては、企業に対してそういうイメージを高めてもらえるように、教員・学生双方の努力が必要であろう。

次に、「幅広い職業人育成 (専門教育完成型／職業教育志向)」及び「高度専門職業人育成 (高度専門職大学院)」という面については、企業と卒業生との間でさほど変わらないイメージを持っているということがわかる。これらの人材育成は、一橋大学の伝統でもあり、重要な課題として今後一層の充実を図りたい。

そして、「世界的研究・教育拠点（研究大学院）」及び「社会貢献機能（地域貢献，産学官連携）」については，企業のイメージの方が，卒業生のイメージより強いということがわかる。これらの点については，一橋大学が社会の中で果たしている重要な役割として，在学生や卒業生にも理解してもらうよう努力する必要がある。そういう意識を持っていただくことによって，こうした一橋大学の良い点を伸ばしていく可能性があるからである。

(2) 企業から見た卒業生イメージ

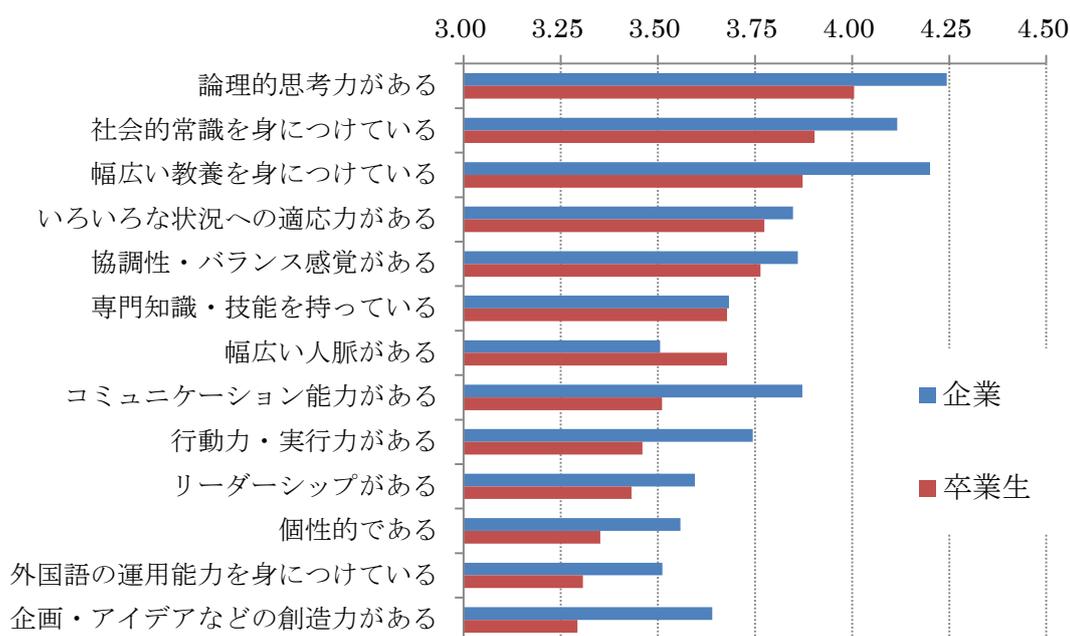


卒業生に対しては，各業種ともに「論理的思考力がある」や「社会的常識を身につけている」，「幅広い教養を身につけている」などの一般教養，「協調性・バランス感覚がある」，「いろいろな状況への適応力がある」を身につけているとのイメージが強い。他方，「専門知識・技能をもっている」や「個性的である」との評価は相対的に低い。こうした企業の見方は，卒業生を実際にみた結果というだけではなく，企業がこうした性格の

者を求めたことを原因として生じたとも考えられるが、卒業生に、専門的能力をもたせることを目的とする大学側のイメージとの間には、かなりのギャップがある。

「公務員」ではすべての項目のイメージが全体の値よりも低くなっている。他業種と比較すると、かなり極端な数値であり、これは、公務員になった者の実際の特性というよりも、採用者側の見方が反映されているように思われる。例えば、個々の組織では採用者数が少なくてイメージがあいまいである、あるいは立場上明確には回答しにくいといった可能性が考えられる。

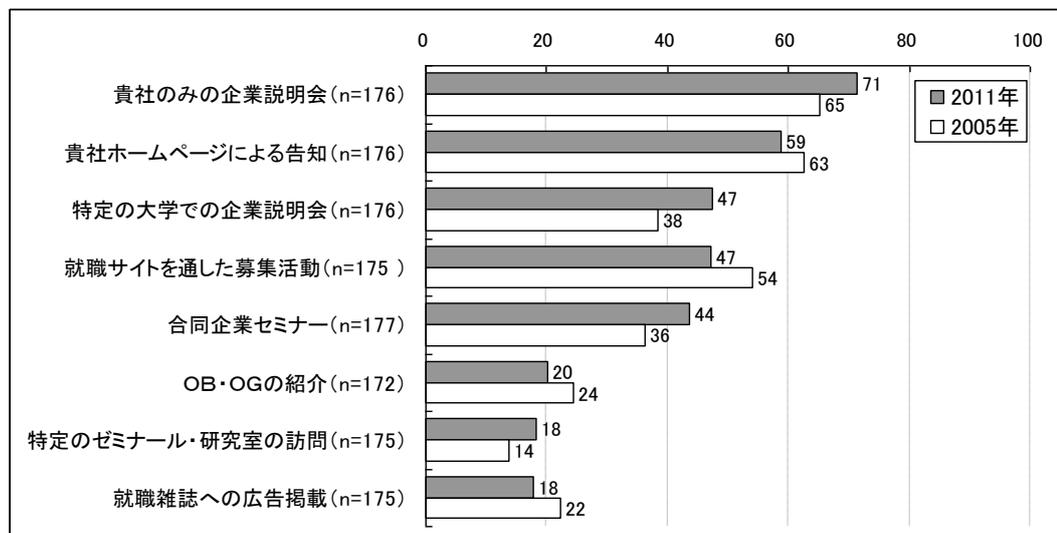
この企業から見た「一橋大学の卒業生イメージ」を、ここでは卒業生自身が抱いている卒業生イメージと比較してみたい。いずれも5段階評価でたずねているので、その平均点をグラフで以下に示した。



- 全体的に、企業からの評価の方が卒業生の評価よりも高い傾向にある。特に、「論理的思考力がある」、「幅広い教養を身につけている」、「コミュニケーション能力がある」、「行動力・実行力がある」、「企画・アイデアなどの創造力がある」ではその差が大きい。
- しかし、「専門知識・技能を持っている」では、企業からの評価が卒業生による評価と同じレベルとなっている。
- さらに、「幅広い人脈がある」に関しては、企業からの評価が卒業生からの評価よりも低く、卒業生が思っているほどには企業からの評価が高くないことを示している。

(3) 企業が採用活動で重視している取組

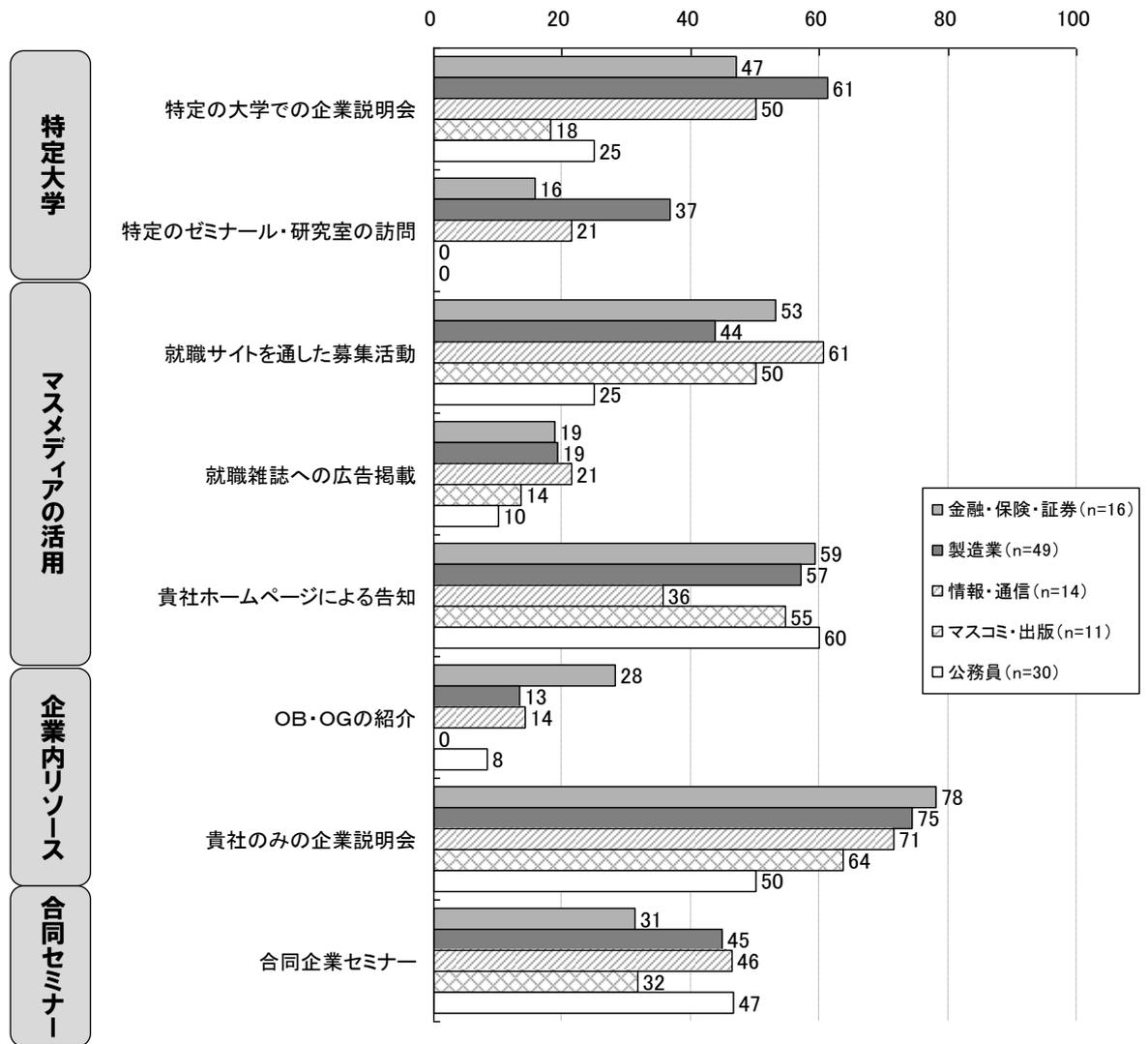
< 前回調査との比較 >



企業が採用活動として重視している取組として、「貴社独自の企業説明会」、「貴社ホームページによる告知」という企業独自の取組をあげることができる。また、「就職サイトを通した募集活動」、「特定の大学での企業説明会」、「合同企業セミナー」が次に重視されている取組である。

2005年度の前回調査と比較すると、「貴社独自の企業説明会」、「特定の大学での企業説明会」、「合同企業セミナー」に力を入れる企業が増加した一方、「貴社ホームページによる告知」や「就職サイトを通した募集活動」などのインターネットを介した取組については低下している。ITブームは一過性のものであり、採用活動には、人を実際にみる必要があるということであろう。

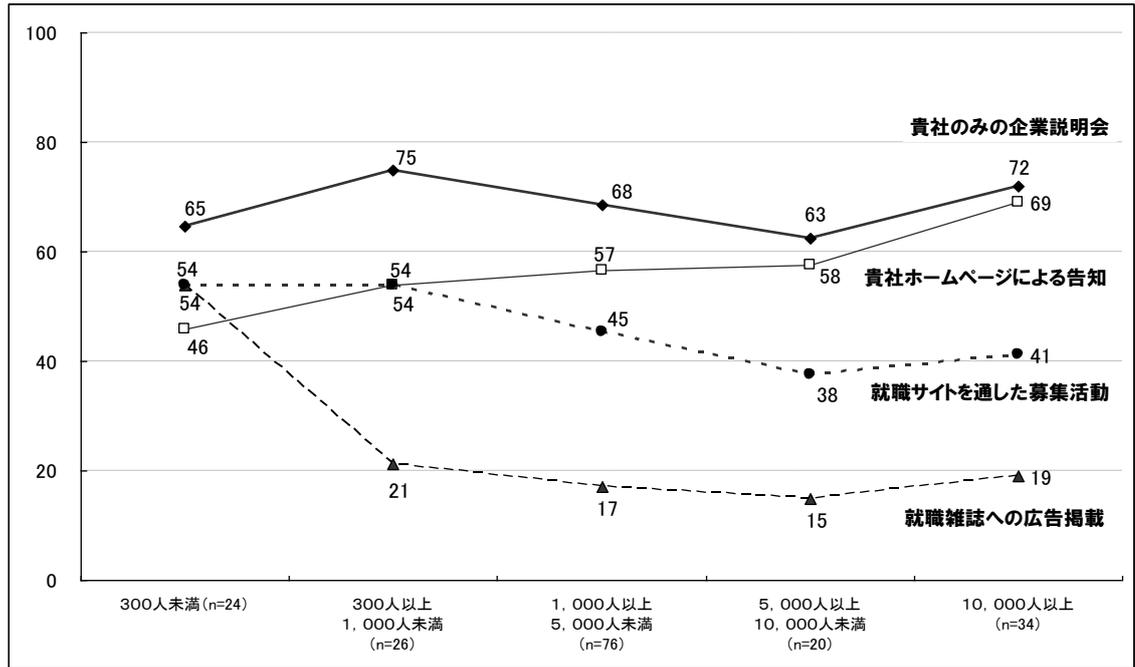
<業種別>



業種別に重視している取組をみると、「金融・保険・証券」では「貴社だけの企業説明会」、「貴社ホームページによる告知」を中心に取り組んでいるほか、「OB・OGの紹介」が他業種より多いのが特徴であり、企業内リソースが活用されている。「製造業」では「特定の大学での企業説明会」、「特定のゼミナール・研究室の訪問」が顕著であり、採用実績のある大学を中心に採用活動が行われている。伝統的な業種ほど、IT化に流されない採用方法が残っていると考えられる。

また、「情報・通信」では「貴社ホームページによる告知」が低く、「就職サイトを通じた募集活動」や「合同企業セミナー」が高くなっており、企業内リソース以外も積極的に活用して採用活動を行っている。

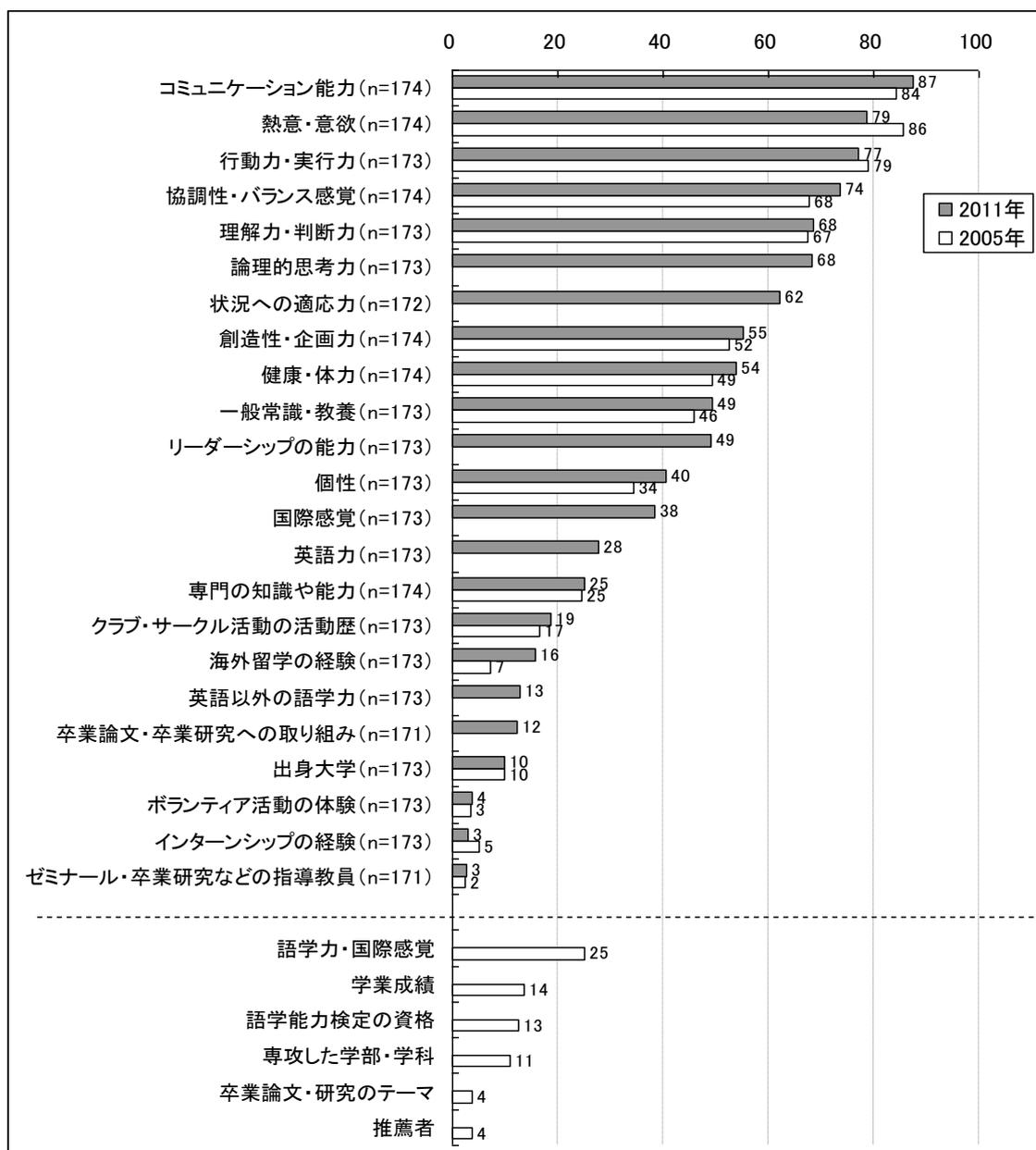
<規模別／企業内リソースと社外リソースの比較>



規模別に企業内リソースと社外リソースの取組状況を見ると、1,000人未満の中小企業では「就職サイトを通した募集活動」、「就職雑誌への広告掲載」が大企業よりも高い。また、「貴社ホームページによる告知」は、企業規模が大きくなるにつれて重視されるようになる傾向がある。

(4) 企業が採用にあたって重視している資質

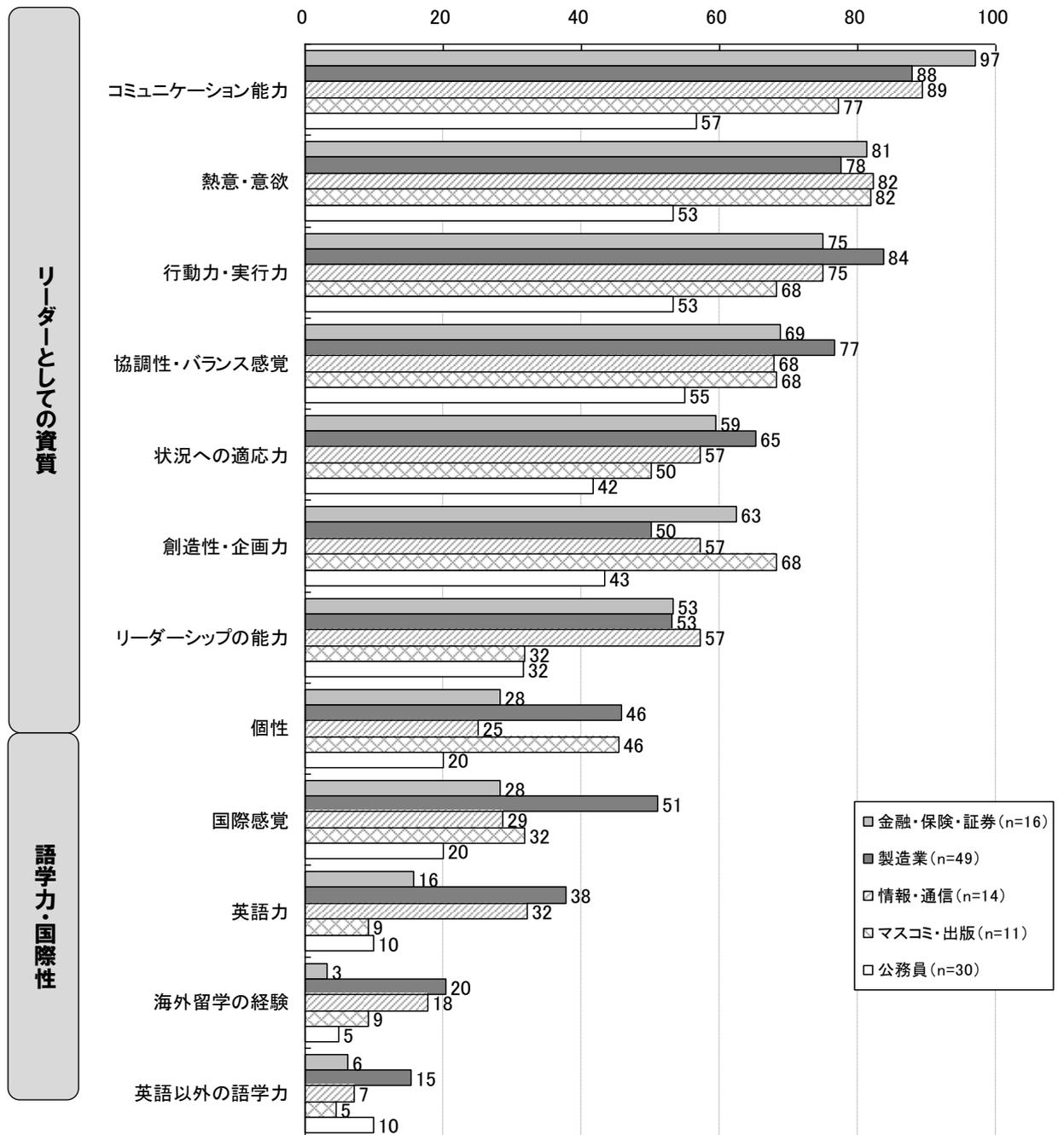
< 前回調査との比較 >



企業が採用にあたって重視する項目は、「コミュニケーション能力」が最も高く、次いで「熱意・意欲」、「行動力・実行力」、「協調性・バランス感覚」、「理解力・判断力」と続いている。他方、「国際感覚」、「個性」、「英語力」、「専門の知識や能力」などの重視度は比較的低い。大学の専門的能力を目的とする教育とのギャップが目につくところである。これは、それだけ卒業生の採用される会社に余力のあるところが多いことを反映しているとも思われる。即戦力を求めるよりも、長い目で人材を養成しようとするものともいえる。企業に余力がなくなり、即戦力を求めているとの一般的な先入観は、必ずしもあてはまらない。これが本学だけに関わる特徴かどうかは不明である。

2005年度に実施した前回調査と比較すると、「コミュニケーション能力」、「協調性・バランス感覚」を重視する企業が増加しており、対人関係の構築に関わる能力が重視される傾向が伺える。そのほか、「健康・体力」、「一般常識・教養」なども微増となっており、専門性よりも基礎的な能力を重視する傾向があるだろう。

<業種別>



資質の内容を区分して、「リーダーとしての資質」と「語学力・国際性」に関わるものを業種別に示すとこの図のようになる。第1位の「コミュニケーション能力」については、特に、「金融・保険・証券」で非常に重視されている。

「語学力・国際性」の重視度は「製造業」及び「情報・通信」で高く、「国際感覚」や「英語力」が求められている。海外進出を迫られているこれら業種の現状を反映したものと見える。

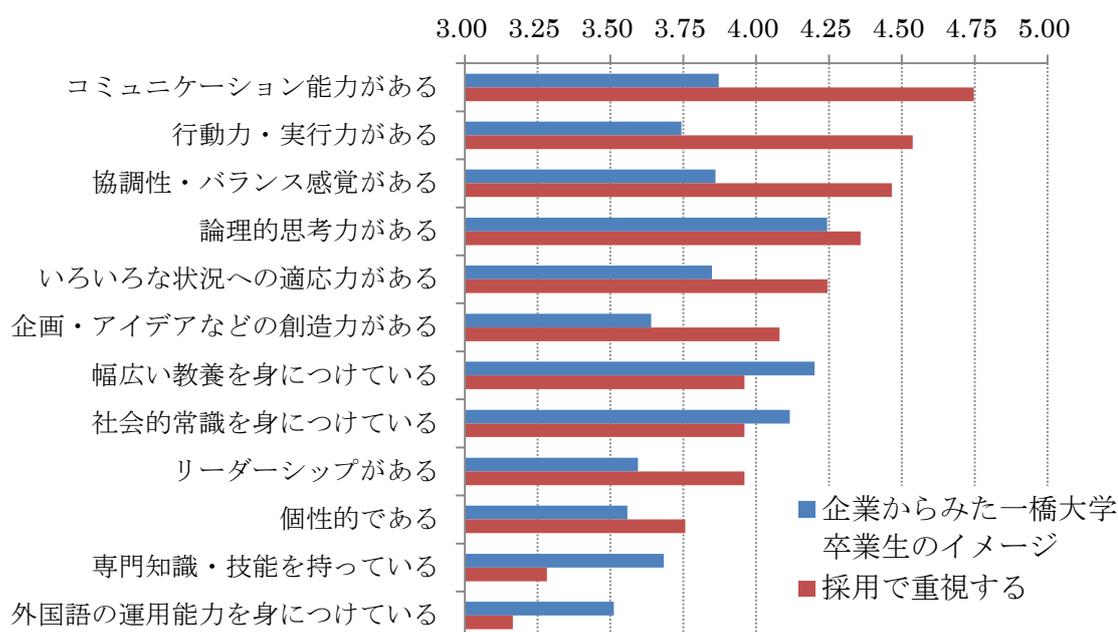
専門性・経験の豊富さの重視度は他の項目に比べて低い。特に、「インターンシップの経験」や「ボランティア活動の体験」はいずれの業種においても非常に重視度が低くなっている。他方、「行動力・実行力」、「協調性・バランス感覚」などはいずれの業種でも重視度が高く、業種に関わらず、採用時には専門性よりも基礎的な能力が重要視されて

いることが伺える。繰り返しになるが、即戦力を求めるよりも、長い目で人材を養成しようとする姿勢があると考えられる。

(5) 企業が重視する資質と企業の一橋大学卒業生イメージとのギャップ

本調査では、「採用に当たって重視していること」を23項目にわたって5段階評価でたずねている。そのなかには、「卒業生に対するイメージ」の12項目と同様の指標が、若干の語句・表現を変えたかたちで盛り込まれている。そこで、採用にあたって重視している項目において、実際の卒業生がそうしたイメージに合致しているかどうかを検討することができる。

その結果を以下のグラフに表した。なお、採用にあたって重視する度合いの高いものから順に12項目を並び替えている。



- 企業から見た卒業生のイメージとして最もあてはまるのが「論理的思考力がある」だ。これは、採用にあたって最も重視されており（図中12項目のうち4位）、求められる人材像の一側面と、実際のイメージが合致しているといえる。
- ところが、採用にあたって最も重視される「コミュニケーション能力」であるが、卒業生のイメージとはギャップが大きい。重視の程度に見合うほどには高いイメージを持たれていない。また、採用にあたって重視される2番目・3番目の項目である「行動力・実行力」及び「協調性・バランス感覚がある」についても、卒業生イメージとのギャップが大きい。
- 逆に、「幅広い教養を身につけている」、「社会的常識を身につけている」の2項目では、重視している程度と比べてより高いイメージをもたれていることがわかる。同様に、重視の程度が低い「専門知識・技能を持っている」、「外国語の運用能力を身につけている」の2項目に関しても、卒業生イメージの方が評価は高い。
- 論理的思考力を養うことは、高等教育の役割の一つである。一方で、企業が求める資質としては、論理的思考力だけにとどまらない。本調査でもみられるように、組織のなかで協調しながら積極的に業務を進めることができる能力も重視されている。大学教育のなかで、本学の研究教育理念に沿った形で、こうした能力の開発をどのようにしていけばよいかひきつづき検討する必要がある。

(付録) 卒業生調査及び企業調査の実施概要

調査内容

1 卒業生調査

- 基本事項
 - * 年齢, 性別, 卒業学部, 卒業年度, 出身高校, 大学院
- 一橋大学への進学理由等
 - * 進学理由
 - * 進学したときの気持ち
- 一橋大学での学生生活
 - * 一橋大学で取り組んだこと (勉学, サークル活動など)
- 卒業生の目で見たと一橋大学の評価
 - * 施設・設備, 進路支援の体制, 教員, 授業・教育システム
 - * 総合的な満足度
 - * 一橋大学進学の知人等への推薦
 - * 卒業生自身の人間的成長
 - * 如水会活動への参加
 - * 在学中に獲得した知識の仕事への反映
 - * 一橋大学で身につけた能力
 - * 卒業後に不足していたと感じる能力
- 大学生活を振り返って
 - * 業務に必要なことと卒業時に身につけたこと
- 卒業生の日頃の考え方や行動について
 - * 普段の考え方
- 社会から見た一橋大学
 - * 一橋大学の社会的イメージ
 - * 一橋大学卒業生の社会的イメージ
- 仕事内容
 - * 就労形態, 業種, 会社規模, 転職等の経験, 収入状況
- 一橋大学に対する意見

2 企業人事担当者調査

- 基本事項
 - * 業種, 会社規模
- 各企業の採用活動
 - * 2012年度新規採用予定者数
 - * 一橋大学卒業生の応募人数の変化
 - * 世代ごとの採用人数
 - * 採用方針の変化
 - * 採用にあたって重視すること
- 各企業から見た一橋大学について
 - * 一橋大学の社会的イメージ
 - * 一橋大学卒業生の社会的イメージ
- 一橋大学に対する意見

調査方法

(卒業生) アンケート用紙の郵送による配付と返信用封筒による回収

(企業) 同上

調査対象と回収率

1 対象

(卒業生) 1961年度から2009年度に卒業した学部生で, 同窓会 (社団法人如水会) 会員である者から, 以下の表にある八つの年度を指定して各年度からサンプリングした合計3,199人

※ 社団法人如水会の協力により卒業生情報の提供を受けた。

(企業) 最近数年程度以内に就職実績のある企業843社

2 回収率
(卒業生)

卒業年次別	配付数	回収数	回収率 (%)
1961年度	200	93	46.5
1971年度	200	71	35.5
1981年度	400	112	28.0
1991年度	400	93	23.3
2001年度	399	97	24.3
2003年度	400	85	21.3
2005年度	400	109	27.3
2007年度	400	61	15.3
2009年度	400	65	16.3
(卒業年次未記入)		5	-
計	3,199	791	24.7

卒業年次別	商学部		経済学部		法学部		社会学部		無回答	計
	男	女	男	女	男	女	男	女		
1961年度	26	0	27	0	21	0	16	0	3	93
1971年度	22	1	17	0	13	0	16	0	2	71
1981年度	32	0	29	0	24	3	16	3	5	112
1991年度	20	1	23	4	14	4	22	3	2	93
2001年度	23	6	18	4	13	8	18	4	3	97
2003年度	12	3	17	2	13	12	19	6	1	85
2005年度	14	10	17	4	15	17	13	18	1	109
2007年度	10	4	12	2	10	7	3	11	2	61
2009年度	14	3	13	0	11	5	11	8	0	65
(卒業年次未記入)	0	0	0	0	1	0	0	2	2	5
計	26	0	27	0	21	0	16	0	4	791

(企業)

配付数	回収数	回収率 (%)
843	182	21.6

調査時期

2011年10月 ～11月

調査概要

本学が調査の構想と調査票の素案を提示のうえ、(株) インテージが調査票の作成と回収後の集計を実施し、分析報告を行った。

なお、調査票の発送・回収は本学が行った。

「卒業生が見た一橋大学」アンケート

所要時間：20分程度

以下の情報は、アンケートの分析・集計にのみ利用します。回答内容をあなた個人の情報として扱うことはありません。また、ご記入いただいた内容は集団として集計をして分析します。回答内容から個人を特定することも一切ありません。率直なお考えをお答えいただけるよう、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、自由記述欄への回答については、質問番号がわかるようにしていただければ、別紙に出力されたものを併せて提出していただいても結構です。

Q1. あなたの年齢をお書きください。

満	<input type="text"/>	<input type="text"/>	歳
---	----------------------	----------------------	---

Q2. 性別 (1. 男 2. 女)

Q3. 卒業学部 (1. 商学部 2. 経済学部 3. 法学部 4. 社会学部)

Q4. あなたの卒業年を西暦でお書きください。

<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	年3月卒業
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------

Q5. あなたの出身高校の所在地・設置区分をお答えください。また差し支えないようでしたら高校名をご記入ください。

学校所在地	設置区分	高校名	
(<input type="text"/>) 都・道 府・県	(1. 国立 2. 公立 3. 私立)	(<input type="text"/>)	高校

Q6. もし、大学院も修了または退学されている場合には、
学校名や課程など、その内容をご記入ください。

(<input type="text"/>)

==== 回答の前に ====

◎アンケートはあまり考え込まずに、最後まで回答してください。途中、どうしても選択肢の内容があてはまらない質問は、飛ばしていただいて構いません。

初めに、在学中を振り返っての質問にお答えください。

I: あなたが一橋大学に進学した理由などを教えてください

【1】一橋大学への進学を決める際に、以下の項目からどの程度影響をうけましたか。それぞれについて1～5の番号を1つずつ選択してください。

一橋大学に進学した理由	回答欄(マルをつける)				
	とても影響を受けた	まあ影響を受けた	どちらとも言えない	あまり影響を受けなかった	全く影響を受けなかった
1) 大学発行の入学案内やパンフレット	5	4	3	2	1
2) 高校の先生の勧め	5	4	3	2	1
3) 家族の勧め	5	4	3	2	1
4) 大学説明会やオープンキャンパス	5	4	3	2	1
5) 大学のホームページの内容	5	4	3	2	1
6) 友人の受験	5	4	3	2	1
7) 先輩からの勧め、体験談を聞いて(読んで)	5	4	3	2	1
8) 予備校・進学情報誌の内容	5	4	3	2	1
9) 一橋祭や小平祭(KODAIRA祭)を見て	5	4	3	2	1
10) その他(記入 (<input type="text"/>))	5	4	3	2	1

【2】あなたにとって、一橋大学・学部に進学した時の気持ちとして、以下のどれに近いですか。1つ選択してください。

- | | |
|------------------------|--------------------|
| 1. ぜひ入りたいと思って進学した大学・学部 | 2. まあ満足して進学した大学・学部 |
| 3. やや不満足だが進学した大学・学部 | 4. やむをえず進学した大学・学部 |

Ⅱ：一橋大学でのあなたの学生生活についてお答えください

【1】あなたは、一橋大学で、以下のことについて、どのくらい取り組んでいましたか。それぞれについて1～5の番号を1つずつ選択してください。

一橋大学で取り組んだこと	回答欄(マルをつける)				
	とて もよく 取り組 んだ	まあ よく 取り組 んだ	ど ちら とも 言 え な い	あ ま り 取 り 組 ま な か つ た	全 く 取 り 組 ま な か つ た
1) 一般教養的な科目の学習	5	4	3	2	1
2) 外国語科目の学習	5	4	3	2	1
3) パソコンやインターネットなど、情報処理関係の学習	5	4	3	2	1
4) 専門科目の学習	5	4	3	2	1
5) ゼミ・卒論のための学習	5	4	3	2	1
6) フィールドワークなど体験的な学習	5	4	3	2	1
7) 資格取得のための学習	5	4	3	2	1
8) 友人との交流	5	4	3	2	1
9) クラブ・サークル活動	5	4	3	2	1
10) 学外でのボランティア活動や社会的な活動	5	4	3	2	1
11) アルバイト	5	4	3	2	1

Ⅲ：一橋大学を卒業生のあなたを目で評価してください

【1】在学していたころの一橋大学について以下の項目に関して、あなたを目で5段階評価をしてください。評価基準の1～5は下記のとおりですので、それぞれ近いものを1つずつ選択してください。

(A)施設・設備 等について	回答欄(マルをつける)				
	と て も あ て は ま ら な い	ま あ て は ま ら な い	ど ち ら か も 言 え な い	あ ま り あ て は ま ら な い	全 く あ て は ま ら な い
1) 教育・研究に必要な施設・設備が充実していた	5	4	3	2	1
2) パソコン・インターネット等の情報設備は利用しやすかった	5	4	3	2	1
3) 各授業（講義、実験、ゼミ等全部含めて）の人数は授業内容に対して適切といえた	5	4	3	2	1
4) 図書館が役に立った	5	4	3	2	1
(B)進路支援の体制について	回答欄(マルをつける)				
1) 大学の就職情報室の資料や情報が豊富で、よく整理されていた	5	4	3	2	1
2) 大学（就職課の職員）は親身に就職指導してくれた	5	4	3	2	1
3) 就職に関するセミナー、講習会が充実していた	5	4	3	2	1

	とてもあてはまる	まああてはまる	どちらでもない 言えない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
(つづき)	回答欄(マルをつける)				
4) 大学院進学のための情報が豊富であった	5	4	3	2	1
5) インターンシップ(企業研修)等の学外で職場体験する機会が充実していた	5	4	3	2	1
(C)教員について	回答欄(マルをつける)				
1) 学問分野の専門家として優れた教員が多かった	5	4	3	2	1
2) 個人的に魅力がある、または影響を受けた教員がいた	5	4	3	2	1
3) 熱意をもって授業やゼミに取り組んでくれる教員が多かった	5	4	3	2	1
4) 授業評価など、学生の声を教育改善に取り入れる教員が多かった	5	4	3	2	1
5) 授業やゼミ以外にもコミュニケーションがとれる教員が多かった	5	4	3	2	1
(D)授業・教育システムについて	回答欄(マルをつける)				
1) 内容豊富な授業が多かった	5	4	3	2	1
2) わかりやすい授業が多かった	5	4	3	2	1
3) 一般教養的な教育が充実していた	5	4	3	2	1
4) 英語教育が充実していた	5	4	3	2	1
5) 英語以外の外国語教育が充実していた	5	4	3	2	1
6) 情報処理関係の教育が充実していた	5	4	3	2	1
7) 資格取得に役立つ授業科目があった	5	4	3	2	1
8) 自分の視野を広げるのに役立つ授業科目があった	5	4	3	2	1
9) 専門科目を学ぶために必要な知識や考え方を学ぶ 基礎科目があった	5	4	3	2	1
10) 専門的な教育が充実していた	5	4	3	2	1
11) 現代の社会的テーマについて多角的に考える総合科目があった	5	4	3	2	1
12) 最先端の研究分野に触れることのできる授業科目があった	5	4	3	2	1
13) 授業中の私語は少なかった	5	4	3	2	1
14) 授業やゼミで教員と一体感が持てた	5	4	3	2	1
15) 授業やゼミでは、他人の考えから学ぶことが多かった	5	4	3	2	1
16) 授業やゼミ等では、発表したり他の人へ説明する機会が多かった	5	4	3	2	1
17) 授業やゼミでは、物事を多角的・総合的に判断することが求められた	5	4	3	2	1
18) ゼミの活動で、他人と協力して物事をすすめることが多かった	5	4	3	2	1
19) 友達から良い刺激を受けた	5	4	3	2	1
20) 自分の進路や「生き方」を考える機会が多かった	5	4	3	2	1

【2】あなたは総合的に見て、一橋大学の以下のことにどの程度満足していますか。それぞれについて1～5の番号を1つずつ選択してください。

一橋大学の満足度	回答欄(マルをつける)				
	とても満足	まあ満足	どちらとも言えない	あまり満足していない	全く満足していない
1) 施設・設備	5	4	3	2	1
2) 進路支援の体制	5	4	3	2	1
3) 教員	5	4	3	2	1
4) 授業・教育システム	5	4	3	2	1
5) 総合的にみて	5	4	3	2	1

【3】あなたは一橋大学に進学することを後輩や友人の弟妹あるいはお子さんにも勧めたいと思いますか。あてはまるものを1つ選択してください。

5. ぜひ勧めたい 4. まあ勧めたい 3. どちらとも言えない 2. あまり勧めたくない 1. ぜったい勧めたくない

【4】あなたは一橋大学で学んだことによって、自分の人間的な成長が得られたと思いますか。あてはまるものを1つ選択してください。

5. とてもそう思う 4. まあそう思う 3. どちらとも言えない 2. あまりそう思わない 1. 全くそう思わない

【5】あなた自身の如水会活動への参加状況について、あてはまるものを1つ選択してください。

5. 積極的に参加している 3. どちらとも言えない 2. あまり参加していない
4. まあ参加している 1. まったく参加していない

【6】あなたの現在の仕事を遂行する上で、在学中に獲得した知識や技能をどのくらい使っていますか。あてはまるものを1つ選択してください。

在学中に獲得した知識・技能の使用頻度	回答欄(マルをつける)				
	頻繁に使っている	やや使っている	どちらとも言えない	あまり使っていない	全く使っていない
1) コミュニケーション能力	5	4	3	2	1
2) 論理的思考力	5	4	3	2	1
3) 英語力	5	4	3	2	1
4) 専門の知識と能力	5	4	3	2	1

【7】あなたが一橋大学で身につけた能力にはどんなものがあるでしょうか。あなた自身の言葉で、以下に自由にご記入ください。

【8】あなたが一橋大学卒業後に社会人になったときに、不足していたと感じる能力にはどんなものがあるでしょうか。あなた自身の言葉で、以下に自由にご記入ください。

Ⅳ：一橋大学での大学生活を振り返って、お聞かせください

【1】あなたは、現在の業務を遂行していく上で、下記に掲げた1)～17)は①どの程度必要だと思いますか。また、②大学卒業時にどの程度身につけていましたか。それぞれの項目について1～3の番号を1つずつ選択してください。

必要性と習得具合	①必要性			②卒業時の習得具合		
	絶対に必要である	必要である	それほど必要ではない	身につけていた	どちらとも言えない	身につけていなかった
回答欄(マルをつける)						
1) 自分の考えを他の人にわかりやすく話すことができる	3	2	1	3	2	1
2) 不明なこと、理解できないことは納得できるまで追求する	3	2	1	3	2	1
3) 他人と協力しながら業務や作業を進めることができる	3	2	1	3	2	1
4) 奉仕的精神を持って、人間や社会に働きかける	3	2	1	3	2	1
5) 自分の欠点を自覚し、常に改善の努力を続ける	3	2	1	3	2	1
6) 複数の選択肢から正しいものを選ぶことができる	3	2	1	3	2	1
7) 人間性・良識を身につけようとしている	3	2	1	3	2	1
8) 幅広い知識や教養を身につけようとしている	3	2	1	3	2	1
9) 外国で生活するのに困らないくらいの語学力を身につける	3	2	1	3	2	1
10) 物事を筋道立てて論理的に考察することができる	3	2	1	3	2	1
11) 自分の考えを文章を用いて正確に表現することができる	3	2	1	3	2	1
12) 書物を読む習慣が身につけている	3	2	1	3	2	1
13) 常識的な見方にとらわれず、自分の頭で考えることができる	3	2	1	3	2	1
14) 成果をあせらず、地道な勉強を積み重ねることができる	3	2	1	3	2	1
15) 細かいことにはとらわれずに、全体的な判断をすることができる	3	2	1	3	2	1
16) 国際社会で活躍できるような英語力を身につける	3	2	1	3	2	1
17) 卒業後も維持できる人間関係(ネットワーク)の形成ができる	3	2	1	3	2	1

この後は、現在のあなた自身の考えについての質問にお答えください。

V： あなたの日頃の考え方や行動についてお答えください

【1】あなたの普段の考え方などについて、以下の項目はどれくらいあてはまりますか。それぞれ近いものを1～5の番号から1つずつ選択してください。

普段の考え方	回答欄(マルをつける)				
	とてもあてはまる	まああてはまる	どちらでもない 言えない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1) 少なくとも人並みに、価値のある人間である	5	4	3	2	1
2) 自分に対して肯定的である	5	4	3	2	1
3) もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	5	4	3	2	1
4) 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	5	4	3	2	1
5) ほとんどの面で、私の人生は理想に近い	5	4	3	2	1
6) 私は自分の人生に満足している	5	4	3	2	1
7) もう一度やり直せるとしても、ほとんど何も変えないだろう	5	4	3	2	1
8) 自分の名前が好きだ	5	4	3	2	1
9) 私の体は丈夫で健康だ	5	4	3	2	1
10) 最近、肉体の衰えが目立つ	5	4	3	2	1
11) ここ数年を振り返ると、いやなことも結構あった	5	4	3	2	1
12) 私は概して幸せである	5	4	3	2	1

VI： 社会から見た一橋大学について、お答えください

【1】一橋大学はどのような特色の大学であると社会的に認知されていると思われますか。それぞれ近いものを1～5の番号から1つずつ選択してください。

一橋大学の社会的なイメージ	回答欄(マルをつける)				
	とてもあてはまる	まああてはまる	どちらでもない 言えない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1) 世界的研究・教育拠点(研究大学院)	5	4	3	2	1
2) 高度専門職業人育成(高度専門職大学院)	5	4	3	2	1
3) 幅広い職業人育成(専門教育完成型/職業教育志向)	5	4	3	2	1
4) 社会貢献機能(地域貢献、産官学連携)	5	4	3	2	1
5) ゼミ教育の充実	5	4	3	2	1
6) 自由な校風	5	4	3	2	1
7) 産業界のリーダーの育成	5	4	3	2	1
8) その他→ ()	5	4	3	2	1

Ⅷ： 最後に一橋大学に対する意見をお答えください

- 【1】 あなた自身、一橋大学での学生生活を振り返って、どのような点がよかった・悪かったと思われますか。
以下の欄にそれぞれご自由にお書きください。

〈在学中に感じた良かった点〉

〈在学中に感じた悪かった点〉

- 【2】 あなた自身大学を卒業後、一橋大学出身者として、どのようなメリット・デメリットがありましたか。
以下の欄にそれぞれご自由にお書きください。

〈卒業後に一橋大学出身者であることのメリット〉

〈卒業後に一橋大学出身者であることのデメリット〉

- 【3】 これからの一橋大学に期待することを、ご自由にお書きください。

質問は以上で終わりです。
ご協力ありがとうございました。

【4】貴社のここ数年の採用方針に、下記のA)B)はどの程度あてはまりますか。それぞれ近いものを1～5の番号から1つずつ選択してください。

	とてもあてはまる	まああてはまる	どちらとも 言えない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
A)採用枠の拡大	回答欄(マルをつける)				
1) 学部卒	5	4	3	2	1
2) 大学院卒	5	4	3	2	1
3) 技術職 (理系学部卒)	5	4	3	2	1
4) 総合職 (文系学部卒)	5	4	3	2	1
5) 中途採用	5	4	3	2	1
6) 海外の大学卒業生	5	4	3	2	1
7) 都市部の大学の卒業生	5	4	3	2	1
8) 地方の大学の卒業生	5	4	3	2	1
B)採用活動として重視している取り組み	回答欄(マルをつける)				
1) 貴社独自の企業説明会	5	4	3	2	1
2) 合同企業セミナー	5	4	3	2	1
3) OB・OGの紹介	5	4	3	2	1
4) 貴社ホームページによる告知	5	4	3	2	1
5) 特定の大学での企業説明会	5	4	3	2	1
6) 特定のゼミナール・研究室の訪問	5	4	3	2	1
7) 就職雑誌への広告掲載	5	4	3	2	1
8) 就職サイトを通じた募集活動	5	4	3	2	1

【5】貴社では採用にあたって、以下の項目をどの程度重視しますか。それぞれ近いものを1～5の番号から1つずつ選択してください。

	とても重視する	まあ重視する	どちらとも 言えない	あまり 重視していない	全く 重視していない
採用にあたって重視していること	回答欄(マルをつける)				
1) 熱意・意欲	5	4	3	2	1
2) 一般常識・教養	5	4	3	2	1
3) 行動力・実行力	5	4	3	2	1
4) 理解力・判断力	5	4	3	2	1
5) 協調性・バランス感覚	5	4	3	2	1
6) コミュニケーション能力	5	4	3	2	1
7) 健康・体力	5	4	3	2	1

	とても重視する	まあ重視する	どちらかというと 言えない	あまり 重視していない	全く 重視していない
(つづき)	回答欄(マルをつける)				
8) 創造性・企画力	5	4	3	2	1
9) 論理的思考力	5	4	3	2	1
10) 個性	5	4	3	2	1
11) 国際感覚	5	4	3	2	1
12) 専門の知識や能力	5	4	3	2	1
13) ボランティア活動の体験	5	4	3	2	1
14) クラブ・サークル活動の活動歴	5	4	3	2	1
15) インターンシップの経験	5	4	3	2	1
16) 海外留学の経験	5	4	3	2	1
17) リーダーシップの能力	5	4	3	2	1
18) セミナール・卒業研究などの指導教員 卒業論文・卒業研究への取り組み	5	4	3	2	1
20) 英語力	5	4	3	2	1
21) 英語以外の語学力	5	4	3	2	1
22) 状況への適応力	5	4	3	2	1
23) 出身大学	5	4	3	2	1

Ⅱ： 貴社からみた一橋大学について、お答えください

【1】一橋大学はどのような特色の大学であると思われますか。それぞれ近いものを1～5の番号から1つずつ選択してください。

	とてもあてはまる	まああてはまる	どちらかというと 言えない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
一橋大学の特色	回答欄(マルをつける)				
1) 世界的研究・教育拠点 (研究大学院)	5	4	3	2	1
2) 高度専門職業人育成 (高度専門職大学院)	5	4	3	2	1
3) 幅広い職業人育成 (専門教育完成型/職業教育志向)	5	4	3	2	1
4) 社会貢献機能 (地域貢献、産官学連携)	5	4	3	2	1
5) ゼミ教育の充実	5	4	3	2	1
6) 自由な校風	5	4	3	2	1
7) 産業界のリーダーの育成	5	4	3	2	1
8) その他→ ()	5	4	3	2	1

【2】一橋大学の卒業生(出身者)にどのようなイメージを持たれていますか。それぞれ近いものを1～5の番号から1つずつ選択してください。

一橋大学の卒業生(出身者)のイメージ	回答欄(マルをつける)				
	とてもあてはまる	まああてはまる	どちらとも 言えない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
1) 専門知識・技能を持っている	5	4	3	2	1
2) 幅広い教養を身につけている	5	4	3	2	1
3) 社会的常識を身につけている	5	4	3	2	1
4) 幅広い人脈がある	5	4	3	2	1
5) リーダーシップがある	5	4	3	2	1
6) 協調性・バランス感覚がある	5	4	3	2	1
7) 外国語の運用能力を身につけている	5	4	3	2	1
8) 個性的である	5	4	3	2	1
9) コミュニケーション能力がある	5	4	3	2	1
10) 論理的思考力がある	5	4	3	2	1
11) 企画・アイデアなどの創造力がある	5	4	3	2	1
12) 行動力・実行力がある	5	4	3	2	1
13) いろいろな状況への適応力がある	5	4	3	2	1

Ⅲ：最後に一橋大学に対する意見をお答えください

【1】一橋大学の卒業生を採用された立場から、本学の学部教育の方針・内容について、改善すべき点や望ましいと考えられる点につきまして、お気づきのことをご自由にお書きください。

【2】これからの一橋大学は、どのような人材を社会に送り出してほしいとお考えですか。ご自由にお書きください。

質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。

評価委員会名簿

(2013年3月31日現在)

委員長	学長	山内進
	副学長(理事)	大芝亮
	副学長(理事)	落合一泰
	副学長(理事)	小川英治
	副学長	高橋滋
	商学研究科長	三隅隆司
	経済学研究科長	蓼沼宏一
	法学研究科長	山部俊文
	社会学研究科長	町村敬志
	言語社会研究科長	糟谷啓介
	国際企業戦略研究科長	菅野寛
	国際・公共政策教育部長	佐藤主光
	経済研究所長	浅子和美
	附属図書館長	江夏由樹
	大学教育研究開発センター長	筒井泉雄
	事務局長	林一義

社会から見た大学教育自己点検・評価部会名簿

部会長	社会学研究科長	村田光二 (社会学研究科長は2012年11月30日まで)
副部会長	役員補佐	三隅隆司 (役員補佐は2012年11月30日まで)
委員	商学研究科教授	佐々木隆志
	経済学研究科教授	竹内幹
	法学研究科教授	小野秀誠
	社会学研究科教授	中野聡
	言語社会研究科教授	佐野泰雄 (2012年3月31日まで)
	言語社会研究科教授	三浦玲一 (2012年4月1日から)
	国際企業戦略研究科教授	大橋和彦
	国際・公共政策教育部教授	佐藤主光 (国際・公共政策教育部長は2012年4月1日から)
	キャリア支援室シニアアドバイザー	高橋治夫
	学務部長	中村敬 (2012年3月31日まで)
	学務部長	阿部正一 (2012年4月1日から)

